
英雄譚のツマ

三角州

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄譚のツマ

【Nコード】

N1984T

【作者名】

三角州

【あらすじ】

目が覚めると異世界にいた。状況説明をしてくれる人も無く、見つけた武器は錆びてボロボロ。そして周りに広がるのは鬱蒼と茂る森。パワーアップした肉体だけが頼りのこの状況で、戦う事など考えた事も無い彼は、元の世界へ戻る術を探すが……誰が、戻れば全てが上手く回るって、言った？

ツマ、大地に放り出される(前書き)

ご意見等いただければ幸いです。

ツマ、大地に放り出される

カーテンの隙間から部屋に差し込む眩しい光に、俺はだいぶ遅い目覚めを迎えた。

やばいこれ 面接時間 過ぎてない？

あわてて目覚まし時計を見ると、12時半と表示されている。せつかく見つけた今よりいいバイト先だったのに、完全に終わったな。まあ終わった事を悔いても無駄だしメシ食ってから考えよう。そう決めると俺は、ガラクタまみれの自分の部屋から抜け出し、1階のリビングへと降りていった。

そつだ、自己紹介をしておこう。

俺の名は渡会^{わたらい} 龍二郎^{りゅうじろう}。二郎なのに長男だ。

実家にパラサイトしてコツコツ資産を増やし、いずれこの世の権力構造の一部となる……事を夢見る22歳のアルバイトのような者で、自慢は身長160？体重42？のこの体型。BMIだけならそこいらのギャルゲヒロインには負けないぜ？腕相撲でも今まで俺が女に勝った事は1度もない位だ。でもコレって自慢になるの？

俺はリビングに入って気がついた。電気がつかない…カーテンもブラインドも障子も全部閉まっている……

いやそもそも家の中に人の気配が無いし、最近俺を悩ませていたご近所さんが建て替え（大企業の保養所から大規模マンションにす

るのは建て替えて言うの？)をする音も聞こえない！

はす向かいに住む夜勤の兄ちゃんを、寝不足で病院送りにしたあの『カーンカーンカーン』が平日に聞こえないとか、ありえんだろ？
つーかあんなマンション地盤が悪いこの辺に建てて大丈夫なのかよ？……まあソレは置いといて。

もうコレはアレしかないだろ！？ でもマジか？

俺は一つ深呼吸をすると自分の部屋へ戻り、カーテンの前に立った。この分厚いカーテンの向こうには、お隣さん家(元大地主っぽい)の一般市民感覚で言えば広大な庭が広がっている筈だ……

俺はカーテンに手をかけて大きく息を吸うと……一気に開く！そして現れる有り得ない光景！

「…………マジだ！ 森だ！」

はい、異世界に召喚されたっぽいです。

俺はその場で膝を付くと、天井を見上げてガッツポーズ！ 声にならない雄たけびを上げる！

「っ……………しゃあああああああっ…！」

22年間ずっと待ってたよコレ！

「くくくふふ……………」

笑いの止まらない俺は、今更ながら自分の体の中の変化にも気がついた。

ボクサーの真似事のように構えると、右手でパンチ。

「シユシユシユシユシュー」

やべえ速ええ。

お次は捻りを加えつつ軽く跳んでみる

「よよよの五つ回転と半つと」

フィギュアスケートならメダルに手が届くな……なんて頭は冷静さを装うが、ニヤける顔は止まらない。

巷の巻き込まれ型主人公は『平穩無事が一番』とか言ってるけどさ？ いつか世界の頂点に立ちたかったらそんな事言ってるらねって！ この（多分）混沌とした世界で成り上がってYO？ あわよくばその力を持ったまま元の世界に戻りやよ？ 俺無敵じゃね？ そう言うもんだろ！？

「くふふ……ふふっふ……ふぁー……っはっはっはっはぁあ！」

俺は高笑いをあげながら、自分の新しい体の性能を堪能したのだ。
った。

30分ほど体を動かした俺は、汗の一つもかかない体に大いに満足すると、家の中を調べる事にした。

電気もガスも無いので、生ぬるいお湯でシヨンボリしながらカツ

ブラーメンを食い、キャンプ用品でも無い物かと家中探し回ったが、残念ながら目的の物は見当たらなかった。
つまり目的じゃない物は見つかった。

「日本刀とか使った事無いよ？……って中ジャリジャリ言ってるよ」
まず一つ目が日本刀。鍔の無い直刀で、見た目は例えるなら『土産物屋で一番安い白木の木刀』といった感じか。その中に錆びてどろしょうも無くなった刀身があった。

「この首輪、犬用じゃないの？……なんか俺もうダメかも知れない」
次に首輪。説明書つきで要するに『体温発電の翻訳装置』らしい。
つまり日本語が通じないって事だ。
……何だかテンション下がってきた。

この他に本来この家に無かったであろう物は無いので、とりあえずそれらを持って山歩きが出来るような服に着替えると、腕時計を付けたリュックを背負って家の外に出る事にした。
因みにリュックは殆ど空だ。まだ遠出をする気は無いから何を入れるかは追々考えていけば良い。
スタート地点で一人でいるのは寂しいが、まずはこの家を拠点にして周辺を調査しよう。上手くいけばこの錆びたポン刀よりまともな何かが見つかるかもしれない。

そして俺は、この見知らぬ大地に大いなる歴史を刻むため、偉大なる第一歩を踏み出したのであった。

「あ、水分も持っておかなきゃ」

振り返ると、そこに家なんてなかった。

「……おせー」

未知との遭遇

「何だよコレマジか」

状況はかなり悪い気がする。

ついさっきまで家が一軒建っていたとは思えない、足元の覚束ない泥濘がひろがっている。午後の日差しが地面に届かないほど暗い森の中で、俺は途方にくれていた。家を出る前はこんな深い森には見えなかったのに…

いくら身体能力が上がっているとはいえ、長時間の行動は不可能だろう。現代日本に生きていたこの身は、サバイバルに必要なあらゆる知識を全く持っていない。

食料の確保も必要だが、異世界の森で何をどう探せと言うのか？もし川を見つけて水を飲んだとして、ココの水は俺の飲めるものなのだろうか？

そして何より、この森に潜んでいるであろう野生動物。キラービ―とか豪傑熊とかマドハンドとかグレーターデーモンとかが出てきたら勝てる気がしない。

どんどん不安になってくる。このままじゃダメだ。

「最初の威勢はどうしたんだよ、落ち着け、素数を数えて落ち着くんんだ」

1…2…4…8…16…

…ダメだ、ツッコミ役がないからテンション右肩下がりだ…

「マジでダメだ、動かなきゃ…何でもいいから状況を進展させるん

だ！よっしや行くか！」

俺は、パンパンと顔を叩くと直刀をぎゅっと握り締めて、状況の打開策を求め歩き出した。

「イイイイヤツツハアアアアアア！こおの身体すうごいよお
お！」

俺は全力疾走していた！今の俺にとって地面の状態なんて全く意味を持たない！

長時間の行動が不可能？はっ！笑っちゃうね！

コケそうになったらそのままそのまま強引に1回転してやればいい！

何かに引っかかったらそのまま全部引き千切ってやるだけだ！

120度くらいの崖ならそのままの勢いで登れちゃうんだよ？

「タアアノスイイイイイ！」

もう自分でも何言ってるのか意味わかんない！

身体が軽い！今熊いたけどすれ違いざま素手で一撃だし！もう何も怖くない！

「……イイイイヤツトオっと、川発見！」

俺はクレーターを作る程の勢いで川岸に着地、華麗にポーズを決めると1時間ぶりに停止した。

嗚呼…今俺最高に輝いてる…

身体を見返すと服はかなり傷んでいたが、リュックと靴（自慢のマウンテンブーツだ）は大丈夫だった。動きやすい靴で走ってたらこんなもんじゃ済まないだろうから、これは正解だったな。

川を見ると魚の姿がみえた。底まで簡単に見通せる、とても綺麗な川だ。

俺は裸足になって川に入り…

「……………シャツ！」

魚を岸に蹴り上げた。

…決めた。俺ここでターザンになる。

…ゆっくりと、夜の帳が下りてゆく。

ライターでマキに火をつけ、その火を絶やさないようにする。

夕飯の焼き魚は、腹が炭化してたのにそれ以外の部分は生焼けだった。

集めてきたマキは、もうすぐ尽きるだろう。

俺は空を見上げ、呟いた。

「…ターザンは無理だ」

周りから聞こえる10匹前後の、虎みたいに馬鹿でかい野犬の唸り声を聞きながら、俺は静かに立ち上がる。

唸り声が、大きくなった。

「眠れない夜に、なりそうだな……俺、今最高にカッコいい」

そして、夜が明けた。

「あゝ、眠い」

そんな事を呟きながら、俺は炭化してない焼き魚を食う。今度は上出来だ。

睡眠場所さえ確保できれば孤独なターザンライフもいけそうだが、今日中にそれが見つからなければ身体が限界だろう。

夜行性の奴らは昼間とはあまりに違いすぎるのだ。

野犬達は尋常じゃないタフネスで何度も襲ってくるし、川ではワニが逃げ回り、それを巨大な駝鳥が丸呑みにして帰っていく。

鋭い牙を持つこれまた巨大な草食動物たちは、大木を『上から幹ごと一口で』喰らっていくのだ。

そしてそいつ等は日の出の5分前位になると、煙のように消える…
こんな所で、どうすれば生き延びる事が出来ると言うのか。
今向こうでメツチャ俺の事警戒しながら水飲んでるヤギとか…
あのヤギについて行けば、安全な場所も見つかるかな？…見失っ
たら終わりか。

今の俺にはこの身体がたった一つの命綱。二度目の夜を迎える前
に森を出よう。

川沿いに下れば文明に出くわすはずだ。海まで出たら今度は南へ。
よし決めた。

「じゃ、行くとしますか」

俺はキャンプの痕跡を適当に消すと、探索を開始した。

太陽がちょうど真上に来る頃、ついに俺は人を発見した！
男女3人が川岸で飯の準備をしているようだが、まだ此方には気
づいていない。

2人の男は戦士なのだろうか？頭にベレー帽をのせ、森の中とは
思えない綺麗な白いサーコートにマントを纏っている。いや、俺が
汚れすぎているのかもしれないな。

リーダーらしき女も白い服だが、着物の上に袈裟みたいなものを
羽織って錫杖を持っている。虚無僧？

あ、錫杖でマキに着火した。

皆動くたびにジャラリと音がするから、中はチェインメールだろう。

戦士さんの盾には、それぞれ十字架とお経が描いてあるみたいだ。適当な世界観だなおい。

間違いない、ここは剣と魔法の世界だ。俺も魔法とか使えるんじゃないかな？主人公ってそう言うもんだろ？

ま、そんな事はどうでもいい。彼等とコンタクトを取らなければならぬ。

翻訳の首輪を着けると…彼らの言葉が解る！

「あ s d f g h j っ たんすよ、正に人体の神秘という物を実感しやしたね」

「本当にそんな事が出来るのかい？嗚呼…そんな恐ろしい事僕には考える事も出来ないよ…」

「俺がこの手の話で嘘付いたこた在りやせんでしょう？」

「ああ…ああ…」

「そゆこと話すのは、私の居ないところでお願い出来ませんか？」
『申し訳ない』

最後だけ男二人がハモった。

何を話していたのかは解らないけど、何だか凄くいい人たちっぽく感じるぞ？

これ当たりじゃないか？出るなら今しか無いんじゃないか？よし！

俺は両手を上げて、ゆっくりと、茂みから出ると、笑顔で、挨拶した。

「こんにちは」

初めての現地人

極力相手に刺激を与えないように動いたつもりでも、相手の反応は想像以上に過敏な反応だった。

「え？待って待って」

「どちらさんで、いらっしやいやすか？」

「いやその、ちょっと助けていただけないかな〜って…」

「は？この森の？こんな所にいらっしやるのに？それも只のお一人で、ですかい？」

戦斧を構えて俺と女性の間立つのは、口調にしては背の高い細マッチョのオツサン。2m超えてそうだ。

適当に切つたら短い短い金髪だけど、欧米のアクションスターみたいな顔だからその大雑把さがカッコいい。なんでこんな残念な口調で喋るんだろう？

身体との対比から斧が小さく見えるが、俺の一般サイズより小さな手では、あの柄は握りきれないだろう。

構えてる間にも、斧が光ったり防具に薄い膜が張られたり動きに残像が残るようになったり、大変忙しい。

あ、ちよつと浮いた。

矢継ぎ早に補助魔法つぽいものを重ね掛けされている様だ。

「ええ、他には誰も…」

「僕達もそれ程甘い訳じゃないんだよ。何人居るのかも直ぐに判る」

「ほんとに俺一人ですって！」

「…もつやつちやつていいんじゃないかな？」

すべるような動きで俺の背後に移動するのは、口調からも判りや

すい『良いとこの坊ちゃん』みたいなお兄さん。ガツンと刈り上げた茶髪だが、人生の苦勞を知らずに育ったかの様な、必要以上に若々しい顔だ。

俺と同じ小さな身体にしては、大き目のメイスを持っている筈だ。背後に立たれたから何をしてるのか判らないが、声が上から降ってくる。

多分、今振り向いたら

『さいごに わたしが みたものは (中略) わたしの ぼうげんは ここで おわってしまった!』

なんだろうな…

「…どうやら、本当にお一人の様ですが…」

「だから言ったじゃないですか…」

「そうなると思わなかった事になるのですよ…」

「何で!?!」

「もうやっちゃいます?」

「助けて斧の人!」

最後に、この短絡的な女性は黒髪おかつぱ。とても可愛らしいけど服装はヘルメット無し of 虚無僧スタイル。

口元に人差し指を当てて、そっぽを向いて可愛らしげに「困ったなあ」ってポーズを取っているけど、錫杖の先に付いた沢山のリングがグルグル回っている。

マキに火を着けるのにもあんな動きはしていなかったから、全力で此方を警戒しているのだろう。

ああ錫杖の先に光の槍っぽいものが出来てきた。アレハ ヤバインジャ ナイカ?

「斧の人つて…俺スか？」

「そうお兄さんとりあえず話し合おうねね？」

「如何したモンですかねえ？」

「やっっちゃいます？」

「やっっちゃおうか？」

「穩便に！穩便にっ！」

メイスさんは一度勘違いを自慢げに垂れ流したから落ち着くまで触りたくない。

錫杖さんはもうこっちに杖を向けてる。なんか楽しそうだなこのサディストめ。

でも相手も落ち着いてきた様だし、先ほど迄の緊張感はもう無い。このまま行けば話も通じそうだ。

「そちらの脅威になりそうな物は何もありませんって」

「背中のは只の棒ではないんだろう？」

「刃が錆び付いた刀です。そちらで…あ、それを確認していただければひゃああ」

メイスさんは、こちらが言い終わる前にリュックに引っ掛けてあった直刀を外すと、錫杖さんに放り投げた。

錫杖さんはキャツと可愛らしい悲鳴を上げて刀を避けると、集中が乱れたのか光の槍が俺を掠めて直ぐ後ろの何かに刺さった。ひゃああマジか。

「危ないじゃないか！僕に当たったらどうするんだ！」

「私キャツチボールは苦手なんですよう……」

「……」

「……助けて斧の人……」

錫杖さんは、プウと膨れながら刀を拾いに行く。

この状況でも動揺しない斧の人にすがった俺の目に、狂いは無かった様だ。

何とか話を聞いてもらえるようになった俺は、後ろ手に縛られ転がされた格好で靴の中まで調べられた後『異世界から来ました。勇者になりたいな』と言う本音を隠し、「記憶喪失で一般常識も碌に解らなくなってしまった」というキャラで押し通した。名前は『リユウジ』としか覚えていないキャラ設定だ。

メイスさん事『バイツ』さんは俺の不幸に号泣してくれたが、俺が記憶を取り戻すまで実家で世話をしやろうとまで言い始めた。勿論丁重にお断りしたが、必要以上に距離感が近い気がする。一度裏切ったら地獄の果てまで追いかけてくるタイプだったりしないでくれよ？

良家の次男坊で、実家を大いに盛り上げるために戦士となり、背の低さを活かして（それでも俺よりはちよつとだけでかいんだ）所属部隊の”人には言えないお仕事”をこなす出世街道奮進中らしい。

「辛かったんだねえ…でももう大丈夫！僕が君の事を悪いようにはさせないから！」

「いや、そこまで言って頂かなくても…」

錫杖さん事『アイ』さんは「人生まだまだこれからですよ」と慰めてくれたが、その表情は『ヘツさま』と露骨に言っているのが判ったし、彼女もそれを隠そうとしていなかった。なかなかいい性格をしているようだが、それもまた彼女の自信の表れなのだろう。

天才キャラか努力系かは知らないが、学生時代は2つの学科を行ったり来たりして、どちらも優秀な成績を納めたそうだが、出席日数不足で退学となったそう。何とやらは紙一重って事か。

「ココから先はきつと上手いききますよ。元気を出して、ね？（とても楽しそうに）」

「あゝ、そうなんでしょうか？」

斧の人は『ライデ』さん。すぐに『こいつ嘘言ってるな』と言う表情になり、適当に合いの手を入れるだけになった。だが俺に害意の無い事も判ったようで、俺の束縛を解く様に進言してくれたのは彼だ。このトリオの最年長で大黒柱で……一番下っ端らしい。

実力だけで成り上がれる凄腕だが、これ以上昇格すると事務仕事が出るからと昇格を断り続けているんだそう。今は若手を偉い人の監視無しで育てるのが楽しいと言う。本当に口調が残念な人だ。

「夜の見張りは俺とアンタで組みやす。よござんすね？」

「はい、宜しく願います」

俺と言つイレギュラーを回収したライダーさん達は、ひとまず拠点に戻ることにしてくれた。

だが、真つ直ぐ森の外に向かったとしても、彼らの足ではもう一日かかるらしい。

睡眠不足の俺の足で最短距離を駆けても、出られたかどうかは怪しいだろう。

回りも薄暗くなってきた。あと10分もすれば夜の住人が動き出す時間じゃないか？。

彼らはアレにどう対処するのか？俺ももう30時間は寝て無いはずだし、そろそろ不安になってきた。

「アイさん、夜間の安全はどうやって確保するんですか？」

俺の疑問に、アイさんは嬉しそうに答える。

「ふっふっふ……待ってましたよその言葉、そう！その為のこの杖！なんですよ！」

「これ無しじゃあ、俺ら30秒でお陀仏でサあ」

「君と僕らとの出会いは、矢張り運命だったと言つ事だよね！」

「じゃあ……うん。地面もちょうどいいし、ココでキャンプにしまし
ようか？」

アイさんは、錫杖に祈りを籠めるとエイツと可愛らしい声で……

いやココまで来ると……あざといんじゃないか？でも白い虚無僧だし？

まあいい。地面に錫杖が刺さると、ソコを中心に5m四方が光の

壁に包まれた。

壁の表面には、びっしりと何かの文字が書いてある。

これは梵字かな？俺に読めない事は確かだ。

「はいお終い。このサークルの中に光を嫌う者は進入できません」

「成る程…コレ凄いですね？」

「ね、コレ無しで生き延びる人間がいるなんて、在り得ないんですよ……ね？」

「やめてそんな目で見ないでお願いホント俺ココ出たら死んじやいますからっ！」

「リュウジくん。火いちょうだーい」

「ハイ喜んで！」

慌ててライターを持ってバイツさんの下に向かう。

くっ！この狭いサークル内じゃアイさんの笑顔からの逃げ場が無い！

背中に刺さる視線が痛い！つかマジで痛い？！

イタタタタツちよと待てあの娘視線に魔力籠めて遊んでるよ畜生！

フレンドリーにも程があるよ彼女人格に難有りだ！

「リュウジさんは俺と一緒に後半の見張りですぜ？早く飯食って寝ましようや」

「俺もう寝ます！昨日から一睡もしてないし！」

「良い夢を見てくださいね、リュウジ」

おのれ後で許さんぞ虚無僧！俺が英雄になったら泣いて謝るまでデコピンしまくってやる！

なんて事を考えながら俺は横になると、安堵感から一瞬で意識を手放した…

「…本当にお疲れだったようですね（笑顔で見下ろしながら）」
「彼にこれ以上辛い思いをさせない為にも！僕らが頑張らなくてはならないんだ！」
「その為にも、さっさと飯作っちゃまいやしょうぜ？」

教えて世界観

目が覚めると、カッコいい金髪のオッサンの顔が見えた。

「お早うございやす」

口調だけが残念なライドさんだ。

横に目をやると、寝転がってこちらを見ているアイさんと、寢床の準備をするバイツさんがいた。

当然その向こうに俺たちの生命線である『光の壁』が在り…その壁に音もなく体当たりを繰り返す化物たちが居る……

……この森の中心には隠しボスか何かが待つてるんじゃないか？

「交代の時間だよリュウジ君」

「うう……お早う御座います。皆さんコレ見ながら眠れるんですか？」

「そう！それが信頼関係と言う物なのさ。君は僕を信頼して眠った。僕は君に命を預ける。何も疑問は無いだろう？」

「あ、有難う御座います」

「？、じゃあ僕も眠る事にするよ。後は宜しく……zzz」

出会ってから1日も経っていない俺に『命を預ける』とまで言うてくれるとは、俺は本当にいい人たちに出会えたと思う。

俺の今までの人生で、命を預けられる親友なんて居ただろうか。

彼らにだったら、隠し事なんてする必要は無かったんじゃないか？

「リュウジ？先程は疲れていたようですし仕方ありませんが、眠る前に挨拶の一つ位してくれても良かったと思うのですよ」

アイさんのそんなセリフは横になったまま言われても説得力に欠けるが、面倒だから素直に謝っておこう。

「すいません」

「解っていただければ結構。以後気をつけて下さいね？では、お休みなさい」

そう言うとアイさんは目を閉じ、何か呟くと一瞬で眠りについた。自分に睡眠魔法でも使ったのだろう。

彼女も要らん事をしなければ普通に可愛いんだが……

だが、この二人の事を考える前に先ずは、ライデさんが何所まで感じているのか、そして何所まで打ち明けるかを考える必要が……

「さてリュウジさん。アイとバイツは眠ってやす。腹あ割って話やしませんか？俺らの敵で無エのなら、他言無用は確約致ししよう」

俺の頭じゃ考えるだけ時間の無駄に思えてきた。半端に嘘をついて後々信頼を損ねるのがオチだな。

「……ライデさんはホントに色々察して貰えて助かります」

俺は、彼に全てを相談する事とした。

「一応最初に聞いたときヤすが『リュウジ』って名は偽名でヤすか？」

「ええ、俺の名前は……」

「いえ結構です、俺らも偽名なんですぜ？」

「えっ？全然気が付かなかった」

「本名をみだりに明かせば容易く呪われる事すらご存知無いですか？
ですかい……」

この世界では『本名』がとても重要らしい。

とっさの偽名は正解だったと言うことか。

「さっさと本題に入りヤすが……人に言えない記憶をお持ちで？」

「実は……（後略）」

「成る程ネえ、初めての夜はそうやって気合一つで切り抜けたんで？」

「ホントなんですよ？」

「解ってやすって、アンタの身のこなしは俺らの手には負える筈が無工感じでヤしたからねえ」

「解る様な動きでした？」

「チームを組んだ仲間をそう言うのが解るトコ迄育て上げるのが、俺の生きがいだサあね」

そう言うところライデさんは微笑んだ。

後輩に視線を向けるライデさんの横顔は、本当にカッコいい。

チュートリアルはNPCで無双するけど直ぐに生き別れになって、ラスボス直前にPCとして戻ってくるんだけどステータス調整とか何もしてないから、エンディング迄ベンチウオーマーとして活躍することとなる『先の大戦の英雄』キャラみたいだ。

それはいいとして、矢張り俺の身体はハイスペックらしいが、見る人が見れば解ると言う。

目立たないよう気をつけなくてはならない。

「しかしそうになると、リュウジさんと一緒にキョウカイの詰め所へ入れませんか？」

「『キョウカイ』……ですか？」

「そう、『キョウカイ』。ここいらはキョウカイの支配地でやしてね」

こつちの世界にも教会があり、教会は国からも独立した領土を持つている様だ。

「でも何で一緒じゃマズインですか？」

「リュウジさんは記憶喪失なんだ、アンタの『記憶を回復』する為にキョウカイは全力を挙げるでしょうぜ」

「確かに一生懸命やって貰っても無意味だから、申し訳ないですね」「頭ん中かき回されて全てをキョウカイに捧げる『模範的臣民』になるってエ事でせあね」

「……マジで？」

「大マジ」

何だかとんでもない事を躊躇いの無い即答で断言されてしまった

……

しかしこの世界の人権に対する感覚が解つたのは大きい。

「でも何故そんな事教えてくれるんですか？」

「何度か記憶の回復に立ち会った事が在りやしてね……」

「皆、同じ様な人間になつていた、と？」

「皆、一週間で家族を『キョウカイを否定する反乱分子である』として收容所にぶち込みやがるんでせあ」

ライデさんが僅かに顔を歪ませた。思い出したくも無い事なのだろう。

それを見ながら考える。俺は今『悪役側の領土』にいるのだろうか？それとも、俺の中のファンタジー感が甘っちょろいだけか？

「じゃあ、今寝てる二人にも話して協力して貰ったほうが良いんでしょうか？」

話題を変えた。だがこれも、あまり良い話題ではないか？

いや、ライデさんは答えなどどうに出ている様な顔になった。

「彼らを信じるかどうかはお任せしやすが、リュウジさん自身は如何したいンで？」

「……ちよつと考えさせて下さい」

「即断出来ないンならそれは『信頼しきれない』ってエ事でヤしょ？だったら相手を信じて巻き込んでから後悔するより、自分の判断を信じて後悔するほうがまだマシってエモンじゃ、ありやせんか？」

「……う〜」

「リュウジさんの服は特徴的だ。街に入ったら雲隠れして服を処分しちめエば、俺らにや追えネえでしようぜ」

何処かで逃げる、って事か……

「そこでお別れ。ですかね」

「リュウジさんの脚なら一日で町から町へ走れやしよう。その後は自由に世界を巡りや良い。また会える事があるとすりゃ『記憶喪失』も回復していやしよう？」

その後、逃走に際してのイロハを教わり、ついでにこの世界の歴史と文字（読めるけど書けない）も教わりながら、夜明けを待つこととなった。

この世界について、教わった事をまとめる。

この世界は、かつて今とは比べ物にならないほど繁栄していたそうだ。

だが、世界大戦の勃発により、国家の枠組みが崩壊。大戦のきっかけは、今となっては知る者など皆無だと言う。

その後、各地の勢力が剣と魔法で武装して群雄割拠の時代に突入し、旧文明を食い散らしながら合併吸収を繰り返した結果、現状に至る訳だ。

教会は、その中でも規模の大きな勢力だと思われる。

掲げるスローガンは『世界を黄金時代の姿に戻す』その為に旧文明の研究機関が各地に置かれており、頑張っているらしいが成果は振るわないらしい。

ライデさん曰く『馬車の残骸を見つけても、車輪を知らなければ薪にしかならない』って事だ。

そして、極力生まれ育った土地に永住するよう求めるため『一般市民に地図は不要』と言い切り、その勢力範囲は不明。

ライデさんは最前線で戦う兵士であるため、例外として各地を巡ったが、それでも教会の規模は『一週間じゃ東西を横断しきれない』

事しか解らない。

そして、ライドさんがいるこの森の所有権争いが南西の最前線。

だが最近はにらみ合いばかりで動きが無いとか。

こんな不気味な森領内にあっても管理出来ないし、かと言って切り開いてしまえばお互い本気でぶつかり合う事になる。

偉い人たちがどう考えているかは知らないが、現場ではいつの間にか『森の中では戦闘を避ける事』と言う口頭でのみ伝えられる秘密のルールが出来ているそうだ。

ライドさん達はこの先日森の奥で起きた異常を確認するために森に入ったが、恐らくその異常は俺がこの世界に来た事によるものだろう。

よってライドさんは、俺が雲隠れした後に二人に俺の素性を話し、『任務完了、何も問題は在りませんでした！』で済ますつもりだ。

「二人を説得出来るんですか？」

「口八丁手八丁でどうにでも出来やすよ？それだけでココまで生き延びて来ヤしたから」

ライドさんは、ニヤリと笑った。

光の壁の外で休むことなく無駄骨を折っていた勤勉な怪物たちが、突如隠れ始める。

夜明けだ。

眠っている二人を起こさないようにライデさんが飯を召喚している。

教会に所属すれば、『朝ごはん召喚のクリスタル』を頂けるそう

だ。
初めて見る召喚魔法が『フランスパンとスクランブルエッグ』と

は……
何所でも美味しい飯が食えるのは良いことなんだろうけど、ねえ……

「あゝ……便利な、魔法ですね？」

「補給を言い訳に任務を投げ出すなんざ許さんってエ事でサあね」

「そんな退廃的思考は再教育なんですよ？」

「そいつぁ困りやしたね」

振り返ると、いつの間にか起きたアイさんがストレッチをしている。
た。

身体を回すと関節が鳴って、その度に「うゝ」って呻いている。

……あれでハタチ前なんだぜ？

「昼飯とか夕飯のサポートは頂けないんですか？」

「キョウカイは私共に『食事回数 of 自由を与えたい』との取り計らいを下さったのです」

「……素晴らしいお心遣いですね」

「どんだけ立派なココロザシを掲げる組織でありやしもね、でつかくて息の長エモンになると、どっかしら面白おかしくなってくんでサあ」

「ふふっ……ライデ、世界征服は立派な志なんですか？」

ああ、俺やつぱり悪の帝国の土地にいるんだ……

「そつだライデ、リュウジの分のご飯も配給されるのですか？」

「そちらが寝てる間に全てバッチリですぜ」

「今日はパンが切り分けてあるのですね」

「手が空いてたんでリュウジさんに切ってもらいヤした」

「あ、俺お先に頂いてます」

俺の分の飯が有ると言うのは嘘だ。

ライデさんには、俺と別れてから二人に全てを打ち明けてもらう事にした訳で。

朝食は各々の取り分がわかり難いよう先に切り分け、俺が先に食べた事にして量に関する疑問をはさみ難くさせる。

一人で勝手に食べた事は彼女らに不快感を与えるかもしれないが、それもまたライデさんの策だ。と思う。

ほらアイさんが錫杖振り上げてプルプルしてる。

「……貴方は。夜も、そうでしたね。『待つ』と言う言葉も体で思
い出させてあげましょう！」

「うわ待つて御免なさ痛い痛いちょっと待つて！」

「どうやら思い出した様ですね！？次は忘れる事が出来ない体にし
ちやいましょう！」

「ふわあ〜うお早う。みんな朝からげんきだね？」

「お早う御座いやすバイツさん。今日の食事はパンとスクランブル
エッグ。パンはリュウジさんが切り分けたモンですぜ？」

「ふ〜ん……リュウジ君はアイに気に入られたみたいだね？」

「私の愛情はチョッピリ過激ですから（笑顔で）」

「これが！これが音に聞くツンデレってやつなのか！？デレか死か
?dere or die!くそっ！なんて口ツクなんだ！」

「リュウジさんも馬鹿な事言っていないで、皆さんとつと飯イ食って森を出やしょうぜ?」

こうして、何だか考えてみればこちらに来てから初めてとなる、賑やかな腹拵えを済ませると、俺達は森の外へ移動を再開した。

「リュウジは見た目と違ってタフですね?」

「俺に惚れたかい?いつでも誰でもウエルカムだぜ?」

調子に乗ってボケてみると、アイさんも笑顔で返してくれた。

「途中から本気で殴っても大丈夫でしたからね。本当に本当にタフですよ」

……ライドさん、彼女は道化師のフリして全て理解しているんじゃないですか?」

「抜けたー!ー!」

「リュウジ君、近場の集落までは直ぐだ。今日はゆっくり休めるよ」

太陽が傾き始める頃、ついに俺達は森を脱出する事が出来た。

森の外には、かつて栄華を極めたのであるう様々な建造物が建ち並び、緩やかな時間の流れに身を任せて朽ち果てるのを待つ光景が、何所までも広がっていた。

どの建物も蔦や苔などに覆われて壁も見えなくなっており、地面に至っては、舗装されていたのかを想像する事も出来ない位になっている。

この場所に暮らす人々は、何故コレを放棄したのだろうか。

森の侵食から逃げている？とも考えたが、それなら近場に集落なんて無いだろう。

つまり俺の見立てが正しければ、と言う注釈付きではあるが、あの森は長い事拡大しては居ないと言うことだ。

でも、あんな森二度と近づくつもりは無いから、考えるだけ無駄かな。

そんな事を考えながら森のほうを振り返ると、今までは木々に遮られて気付かなかった物が見えた。

「あれは、いつたい、なんだ……」

思わず足を止める。止めざるを得ない。

「ん？リュウジ君はあの塔の事も忘れちゃったのかい？」

「……ええ」

森の向こうには、その姿を隠そうとする太陽。そして、まるで太陽に寄り添う様に『塔』が、建っていた。

東京タワーから、富士山を見ると想像して欲しい。

富士山のある場所に、代わりに白い塔が立っていると想像できるだろうか？

塔の高さは富士山の10倍とか20倍とか、そんな感じで。

その姿は継ぎ目一つ無い美しい円筒状。この距離からでもその白磁の如き艶やかさが想像できる。

「アレが何かは私たちには解らないのです」

「僕なんか気になった事も無いから、リュウジ君の反応の方が新鮮だけど」

「俺たちじゃ一生係わりの無エモンだってエのは、確かでサあ」

その塔は、一瞬で俺の心を鷲掴みにした。

アレは『超古代文明の遺産』とか『神々の神殿へ至る道』とか、そう言った物に違いない。

そうだとすれば、俺がココに来た理由もあそこに行けば解るかもしれない。

今この瞬間！俺がこの世界で成すべき事が、遂に遂に姿を現したのだ！

「ほらリュウジ君さっさと行くよ！」

「早く宿を取らないと、良い部屋が無くなってしまいますよ？」

「塔が見える宿を探しやすから、さっさと進みましょうぜ？」

……コイツら……

ツマはこっそり居なくなりたい

無事森を出て町に辿り着いた俺達は、まっすぐ宿屋に向かった。バイツさん達は皆教会という国にも等しい組織に所属しているのだから、ソコが用意してくれた宿泊所とかに泊まるのかと思っていたが、育ちの良いバイツさんが言うには『こちら辺には高級な宿なんて無いんだから好きなのところに泊まる方が楽しいでしょ？』だそうで、こちらで唯一門番が建っている、どう見ても高級な宿屋に入った。

全額バイツさんもちで。

バイツさんが部屋を頼むと、ちょうど開いてる部屋は4人部屋しか無かったのだが、ボンボンのバイツさんは笑顔で『じゃあ4人部屋を3部屋頼むよ』とか言い出した。部屋割りはこうだ。

男部屋。

女部屋。

予備、或いはプライベート用。

予備って何？プライベートって何？

宿の裏に川が流れていたの、俺は泊まる部屋の場所だけ教わってから水浴びをすることにした。

飯は直ぐに用意が出来ないようだったし、風呂も事前に予約が無いとお湯が無いから水風呂になるとの事で、それならばと一番手っ取り早い水浴びを決行した訳だ。

何かイベントでも起こらないものかと期待したが、アイさんが来たら殺されそうだし、他の2人が来ても嬉しくない。

じゃあ第3者が現れたら？

俺はウィットに富んだ会話が苦手なんだ。

「お客さん！こちらに着替え置いときますよ？」
「わかりました」

現れた第3者は受付に居たおじちゃんだった。

水浴びを終えた俺は、用意された着替えを羽織る。

用意されていたのは、高層ビルの窓際でワイン片手に下界を見下ろすときに着るような、ゴツイガウンだった。

明かりを持って待機していたおじちゃんに、足元を照らして貰いながら宿に戻る。

ふと心配になっておじちゃんに「チップとかもってないよ？」と告げると『バイツ様よりお気遣い頂いておりますので』との事で、宿を出るまで何も気にしなくていいそうだ。

宿一つから『もう結構』と言われる量のチップの先渡しって、いったいどうなっているのだろう。などと考えていると、宿の向かいにある酒場が賑やかになった。どーせ俺には関係無いし、と言いなから部屋に戻ると、みんなのサイフ、バイツさんがまたやらかした事を聞いた。『共通の目的のため戦う同士云々』と、教会のために皆で頑張ろうぜ的な演説をぶち上げながら、向こうの酒場で酒を奢って来たらしい。

『うちで一番高い酒を、ここにいる客全員に吞ますんだぜ？』ってアレだ。

丁度出来上がった少し遅い夕食を予備部屋で食べながら『バイツさん』じゃなくて『おだいじん様』でいいんじゃないかと言ったら、すでにこの町では お大尽様＝バイツさん で問題無いらしい。本人が言ってるから間違いない。

……負けだよ。俺の完敗だ。

「お早うございます」

今日の目覚めもライデさんの顔だった。

「お早うございます」

欠伸をしながら返すと、俺はベッドから降りる。今日が『彼等と行動する最終日』だ。

昨日は無事人里に辿り着いた安堵感と整った寝床とバイツさんに負けて、夕食後直ぐに寝てしまったが、今日は忙しくなる筈だ。

アイさんとバイツさんには『今日は自由行動にして明日の朝教会に発とう』と言ってあるので、今日中に消えなくてはならないし、午後に回ってからこの町を出るようだ、今度は日の出ているうちに隣町へ辿り着くことが難しくなる。

だからと言って何も言わずに消えるのは嫌だし、何とかして後々『リュウジ君のあれは別れの挨拶だったんだね!』なんて気付いてもらえる形で別れたい。

「ん？バイツさんはもう飯食ってるんですか？」

今更ながらバイツさんの姿が無い事に気付く。

「バイツとアイはリュウジさんに『飯イ先に食われる悲しさを教えてやる』って二人で出かけて行きやしたぜ」

ライデさんは苦笑した。

だがこの状況、俺とライデさんにとっては願ったり叶ったりな訳だ。

……このまま雲隠れしてしまうには最高の状況だけど、別れの挨拶位はしたいかな。

迷いを孕んだ俺の気持ちに気付いたのが、ライデさんは続ける。

「飯イ食ったらココにはもどりやせんぜ？準備の方は良ウ御座いやすね？」

さらにちよつとだけ、迷った。

バイツさんも、ライデさんも良い人だったから。

……アイさんはどうだろう。

正直あの娘おかしいよね？

普通人を全力で殴ったりしないだろ？

ぶつちやけ初めて会ったとき俺とバイツさんの事殺しかけてたよね？

……ま、それは置いといて。

俺は、覚悟を決めた。

ライデさんが折角手はずを整えてくれたのだし、他の二人には話さないで、結論を出したのはおれ自身だ。

ここでまごまごしていても、状況は何も改善されない。

「はい！ばつちりです！」

食事が終わると町に出た。昨日は暗くなっていたのでよく観察しなかった、この町の様子をみる。一般人がどのような文明レベルでの生活をしているのかが判れば、俺がこの先どうするべきかも自ずと見えてくる。

そりゃ最終目的はあの馬鹿でかい塔に向かうことだが、別に急ぐ理由も無いし、落ち着いて考えれば『あの塔に行けば何か進展がある』と考えた事自体が間違いかもされない。

それに最悪の場合、この世界で暮らしたほうが楽しいなら戻れなくてもいいとすら考えている。

この町の規模はライデさん曰く平均よりちょっと上らしい。

四方を木の柵で覆われているが、台風が来たら無くなりそうな適当な造りだ。どれ位適当かと言うと、何も背負っていないければ柵の隙間から出入り可能な位適当だ。

出入り口に物見櫓が建っているが、中で番兵達がカードゲームをしている姿が見える。

そんな状況だから町への出入りは完全にフリーで、町の中央通りでは当たり前のように敵国の商品が未使用完品で売り出されてすらいる。所謂『闇市』ってやつだろうか。

若い商人なんか、一攫千金を狙ってこの町と国境の向こう側を往復してこれらを販売しているが、自分の取り扱う違法な輸入商品の教会中央での価値を知らない、或いは中央までの輸送ルートを開拓できないので、大商人に買い叩かれているとか。

建物は木造が多いが、兵士達の詰所はコンクリの打ち放しだったりする。石造りや土壁、漆喰の壁は見当たらない。この辺りでは廃れた技術なのか、或いはこの世界では発明されなかった技術なのかもしれない。

所謂中世ファンタジー的な建築物が見当たらない。この統一感の

無い町並みに若い商人の出店が立ち並び、そんな中を町の住人や小間使い、そして食い扶持を求める浪人が歩き回り、それを呼び込むバーや食堂。

「何だか、お祭りみたいですね」

ライデさんに声をかける。

「ココは毎日コンナンですけど、ココより安全な最前線なんざ無いんですよ。勝手に色々集まって来るので、揃わねエモンはありやせんからね」

歩いている人達の服装も結構バラエティーに富んでいるが、大まかに分ければ3種類になるだろう。時代劇みたいな奴とか、中世ヨーロッパ系とか。後はその2種類の混ぜ物系。

基本は何でも有りだが、服装に関して言えば、今の俺はちょっと目立つだろう。初日に調子に乗ったせいでボロボロのシャツとダメージジーンズの両方に、和柄のプリントが入っていたから。

まだこの世界にダメージ加工は先進的に過ぎるようだ……

リュックと靴以外の服を処分した俺は、この世界における無難な旅人ルックになる。和装だとヒラヒラして走りづらそうだったので、地味に徹した洋装にした。宿に戻って二人に会うとまずいので、服屋の前でライデさんとはお別れだ。

「真つ直ぐ東に向かえばイイんでヤすが、一般にゃ公表されてねエルートなんで獣道ぐらいしか残ってヤせん。迷わねエ様注意してくだせエ」

「コンパスも持つてるし大丈夫ですよ、何から何まで本当に有難うございました」

ライデさんは節制すれば半月は暮らせそつな資金まで提供してくれた。

これで適当に足場を固めて、後は自分で何とかしろって事だ。

……言い方を悪くすれば手切れ金って事だが、そもそもライデさんには俺にココまでしてくれる義理も理由も無い。穿った見かたをするのは失礼だろう。

俺はライデさんに大きく手を振りながら別れる。

ライデさんも同じようにして、姿が確認出来なくなるまで心配そうに見送ってくれた。

そして俺は町の東端、ライデさんに教えられた場所に辿り着いた。正規の出入り口では無く、人気も少ないが、人の出入りが可能なように柵を切り広げられた跡が放置されている。勿論見張りなんて居るはずもない。

あまりにもやる気の無い警備状況を見て、俺は思わず呟いた。

「この町本当に大丈夫なんですか？」

そして後ろを振り向く。

「ここから入ってくる商材には当家が関わる物も在るからね。未来

を見据えて考えればこういった物も必要悪って事なのさ」

俺のすぐ後ろにいたバイツさんは、笑顔で答えてくれた。

「いやーこのまま気付かずに行かれちゃったらどうしようかと思っ
ちやっただよ」

「いつから見てたんですか？」

「いつから……だろうね？」

「……俺をどうするつもりですか？」

「個人的には最後までエスコートしたいけど、どうだい？」

「……所用が在りますので、そろそろ失礼させて頂きます」

おもむろに背を向ける。

「あああ待つて待つてリユウジ君にもいい話するから！」

「……俺は心理戦とかダメなんで難しい事無しで頼みますよ？」

バイツさんはは隠し通路の近くにある、だいぶ昔に廃業したと思
しきバーに俺を案内すると、勝手知ったると言った感じでカウンタ
ーの上に座った。

ここなら誰にも聞かれずに話が出るのだろう。

よく見ると、床に穴が開いているのに、椅子やテーブルは座って
も汚れないように手入れがされている。

俺は彼の前に立つ。座る気にはなれなかった。

「で、いつから見てたんですか？」

聞きなおす。ちょっと、不機嫌な声で。

「そうだね、ライデに全てを打ち明ける辺りからかな？」

アルファからオメガまでって事か？俺は思わず苦笑する。

俺はバイツさんが人気の無い場所で足音を立てるまで、全く気付かなかった。

「人には言えない仕事をしてるって、言ったよね？そんな人間に対して信頼を寄せるなんて愚の骨頂、絶対にダメだよ」

バイツさんは、とても楽しそうだ。こんなに楽しそうに自己否定する人間を、俺は理解できない。

「リュウジ君はこの先一人で生きていくんだから、そこんトコ気をつけないとね」

「いい勉強になりましたよ……って、このまま行ってもいいんですか？」

じゃあこの男なんで俺を呼び止めたんだ？

「そ。」僕”個人としては使い勝手の良さそうな人形は増やしたいよ？けど、”僕達”の規模で考えると、別に脅威になりそうとも思えないし、飼い殺すのも面白みが無いから……」

言いながら天井を見上げて考えるそぶりを見せる。

これは一体何の冗談だろう。

「放置、かな？」

バイツさんは笑顔でこちらを見た。

一体何が楽しいんだ？意味が解らない。

「何故、そんな事を、俺に？」

「リュウジ君が気に入ったからだよ？君の世界では気に入った人にアドバイスカシしないの？」

どう見てもアドバイスの域は超えている。

バイツさんは明らかに悪役だ。どうしようもなく悪役だ。

「じゃあ、アイさんも気付いて？」

「彼女も彼女のやり方で気付いているね」

俺とライドさんの苦勞は一体何だったんだ……いやちょっと待て。

「じゃ皆で俺を騙してたんですか！？」

「いやいや、ライドに裏は無いよ。アイは君の異常性に気付いたっただけさ」

「……異常性、ですか？」

ライドさんはいいい人だった様で安心したが、その後の言葉に興味を惹かれる。

俺の異常性？

この身体能力の事か？

杖で殴っても耐える頑強さか？

バイツさんはカウンターから降りると、俺の手を取る。

「そう、アイは君を人間じゃ無いと確信しているよ」

そう言いながら感触を確かめるように、俺の指をいじる。

思わず手を引くと、ソレに合わせる様に、バイツさんは顔を上げる。

いつの間にか、バイツさんは笑う事を止めていた。

「リュウジ君、この世界に、魔力を持たない有機物は存在しないんだよ」

初めての实战……或いはモツ

「全ての有機物が、魔力を持つ、と？」

俺は問いを返す。

「そう。アイは魔力の流れを必要以上に感知出来る娘でね？ 冷めた料理に残った魔力の残滓すら見えるんだよ」

そして俺からは、魔力が全く見えない、と？

地球にはそんな物ないからどうにもし難いが、見る人が見れば確かにキモイかもしれない。

知り合いの友達がスクリームマスクを決して外さずに生活していて、自分以外ソレに疑問をはさまない不気味さ。のようなもんだろ
うか？

「まあ僕は君の正体になんて興味ないから、どうでもいいんだけどね？ それにアイ程の魔眼は滅多にいないから、日常生活でバレる事は無いと思っついていいんじゃないかな。僕も君も運がいいよ、こんなレアな異常を秘密裏に確認できるなんて」

そう言っつて、また笑う。

「ここだけの話、そんな稀有な能力者に必要以上のノイズが入らないようにって、ライデを監視するのが僕の役目なんだよ」

「監視、ですか……」

俺にはもうバイツさんが何なのか解らないんだが。

「アイにとって君は恐怖の対象だよ。視界に入らないと認識出来ない知性体との遭遇は初めてだって」

「……そこまで、嫌われているんですか？」

何だか悲しくなってきた。

シビアだなあこの異世界。

「それでもアイは、ライデの意思を尊重したいと言っている。二人がそれでいいなら、僕も君を追う事はしないよ。僕は籠の鳥より自由に飛び回る鳥を観察する方が好きなんだ」

「監視でもつける気ですか？」

「そんな事はしないよ。君がキョウカイ内の市街地に入れば僕に生存確認の情報が上がってくるだけ」

どんだけのネットワークを張り巡らせているんだコイツ？

俺はため息をついていた。

初っ端からとんでもない奴に出会っちまった、と。

「なにになに？ そんなに気を落とさないでよ、お昼奢るからよ」

「結構です……って今何時!？」

「正午」

……やっちまった。

余裕を持って次の町に向かう筈が。

「早めに出るつもりだったのに……」

天を仰ぐ俺の左肩にポン、とバイツさんの手がかかる。

「大丈夫だよ」

「……え？」

バイツは嬉しそうに笑うと、右肩にも手を置いた。

「生存確認はするから」

結局今日の出発は諦めて、バイツの手配で部屋を見繕ってもらい、一泊する事にした。

今更戻ってアイさんやライデさんと顔を合わせるのとは色々な意味で辛いので、二人が入らないような超高級料亭の2階席でバイツに昼飯を奢って貰う。

ドレスコード？ バイツ様のご尊顔一つで全てはフリーパスですよ。

コース料理の8割を平らげた頃、低い地鳴りと共に、テーブル上の皿が震えた。

「地震ですかね」

「……違うね、何かあったみたいだ」

バイツの視線の先には、黒装束の男が料亭の従業員に声をかけながら、こちらに向かってくる姿があった。

黒装束は、テーブル前で方膝を付くと、バイツを見上げる。

バイツが話を促そうとするのと、再び皿が踊るのは、ほぼ同時だった。

「これは、テロ？」

「一度目の爆発は『宿屋タックノール』宿泊客のデータは確認中で
す」

「二度目は？」

「町の2箇所の厩舎。ほぼ同時です」

この黒装束すげえ。どうやって情報収集してるんだ。

「相手は僕達の足を潰しに来たわけだ。誘拐でもするのか？」

「そのようです。最初の爆発に合わせて馬車が進入、タックノール
より男性1名を誘拐しました」

「何所から逃げるつもりかな？」

「東の抜け穴に向かっていきます。駐留部隊の包囲網は間に合いません
ね」

まあ、あんなにだらけてるのに素早い対応が出来るなら『素敵！
抱いて！』ってなるけど、世の中そんなに甘くはないわな。

バイツは席を立つと窓辺に向かい、俺を呼ぶ。

「リュウジ君、犯人は丁度この下を通って逃げるよ」

全てを見通す様な素振りには気に入らないが、これが本来の彼なの
だろう。

俺も窓から外を見るが、遠くに火の手が見えるだけで、何も来な
い。

「蜥蜴は？」

「明日にはお屋敷に戻りましょう」

「あ」

バイツが笑顔で青ざめる。何か最後の詰めでミスした様だ。

「馬を追える間者は今居ないんだっけ……」

よく解らんが馬鹿め。俺なら行けるがな。

通りの向こうがざわめく。本当に犯人が来るようだ。

バイツは顔を手で覆い俯いている。

「ああああああ待つてちよつと待つて待つて」

蹄の音が響いてくる。犯人は近いみたいだ。

バイツは耳を塞いでしゃがみこんでいる。

黒装束は微動だにしない。ボスが困つてんだから意見の1つや2つしてやればいいのに。

「なんでコイツこんなユカイな事してるんですか？」

「爆破誘拐事件の犯人を逃がせば、上層も流石にこの町を捨て置く事が難しくなりましょう。無断販売のルートも再構築の必要に迫られます」

黒装束が答えてくれた。そうだ、人がさらわれてんだよな。

「誘拐されたのはどんな人が判りませんか？」

「フリーの遺失技術研究者、ローエン。身代金目的かと」

悪い奴じゃなさそうだな。ここでバイツに恩を売るのも悪くない。床にうつ伏せに転がったバイツに声をかける。こいつフリーダムな奴だな。

「……バイツさん、俺が追います」

「じゃあコレを持っていくといいよ」

起き上がったバイツの下には装飾つきの剣が隠されていた。

あれ？ はめられた？

「コレには追跡用標識が埋め込んであるんだよ、持ってるだけいいからね？ リユウジ君は奴らのアジトを教えてください、その先は僕の仕事だから」

「目標が来ました」

膝を付いてから動いていない黒装束の声に窓を見ると、確かに馬車が見えた。

馬車は俺達の下を猛スピードで駆け抜ける。だが、今の俺なら十分追える。

よっしゃ行くか。

「じゃ、後お願いします！」

俺は窓から飛び降りた。着地のショックなんて気にならない。

アイの言とおおり、俺は本当に人間では無いのだろうか。

だが、今はそんな事を考える前にやる事が……

「ちょ、リユウジ君剣！」

「……投げてー」

馬車は2時間ほど走ると、森の前でで止まった。

昨日まで俺が居たあの森じゃ無い、人の手が入った森だ。

中から出てきたのは5人。武装した4人が誘拐犯で、喚きながら引きずられているヒヨロイ爺さんがローエン氏か。

俺は、森の奥へ向かう彼らを追う。昨日までと比べればこんなハイキングだが、ローエン氏は転びまくっているから追跡は楽勝だ。俺は隠れていた岩陰から出て 背後に気配を感じ、振り返る。

声が届く距離では無いので何言ってるのか知らないが、抜き身の剣を持った誘拐犯の仲間と思いき男が馬で駆けてくる。

「まだ居たのかよっ？」

とつさに新手に向かって走る。

でもどうしよう。相手は殺意十分だけど俺は人殺すのは勘弁……
って考える間もなく両者の距離は縮む。

俺はバイツの剣を鞘ごと掴む。それを思い切り振りかぶって。

「ええい、ままよっ！」

投擲。

「デメエ何もぎよっ！」

見事馬上の男を撃墜した。

主を失った馬は何所へともなく走り去る。

森に入った奴らは気付かなかっただらしい。完璧なミッションでした。

流石俺。自分の無敵っぷりが怖い。

俺はバイツの剣を回収すると、倒れた男には近寄らずに追跡を再開した。

……死んでませんように。

この森は中心部が大きく窪んでおり、そこに隠れるように2階建ての建物があつた。

戦乱の中で忘れられた隠し砦ってやつかな？

中に居るのは馬車の5人と出向かえた男の計6人。後続はもういないようだから、倒すべきは5人だ。

だが俺が倒した奴と、もう一人、どこかで脱落した奴がいたらしい。

脱落者にリーダー格が不安視していた奴がいるようで、リーダー格は逃げの算段に入ろうとしている。

ちなみにメンバー全員が1階での会議中、ローエン氏は2階に監禁放置されている。

彼らがどんな結論を出すかは知らないが、あまり前向きな結論は出そうに無い。なら最初からこんな事しなければ良かったのに。

でもコレはチャンスだ。

ローエン氏を背負つても馬に負ける気はしない。指をくわえて待つよりも、救出してヒーローになろう。

俺は早速砦の壁に取り付き、窓から2階に侵入。ローエン氏が監禁されている部屋、鉄の扉の前に来たが、そこで漸く問題点に気付く。

ローエン氏の脱出方法は？

担いで逃げるのは簡単だが、俺の機動力にモヤシのローエン氏は身が持たないんじゃないか？

……困った。お年寄りを甘く考えすぎていた。

悩んでいると、ローエン氏に気付かれた。

「んあ？ 誰かおるんか？ おい！ 聞こえんのか！」

オワタ。

ローエンが扉を叩く音が砦中に響く。1階から誘拐犯が走っていく音がする。

「ああもう！ 扉壊すから下がれ爺さん！」

ローエンが下がるのを確認するとドアノブに手をかける。勿論鍵がかかっているが、この扉は……

「押すとびるああー！」

俺の全力全開体当たりの前では鉄の錠前など玩具に等しい。

……やっぱ俺人間じゃ無いのか？

鍵をへし折り扉が開く勢いと共に部屋に転がり込むと、尻餅ついて目を見開いたローエン爺ちゃんのご対面。

「無茶なやつちやのう………」

「誰のせいだ畜生！」

「で、どう逃げるんじゃ？」

「思いつきませんでした！」

「なんと！……馬鹿もんがあー！」

勢い任せに動いてどうにかなるはずもなく、俺の出したプラン（2階から飛び降りて、担いで逃げるよ）が否定され、ローエンのプラン（皆殺つちやえばいいじゃん）を否定している間に、部屋の唯一の入り口が押さえられ、あっけなく囲まれてしまった。

「もう追っ手が来てるんだ。人質殺して逃げようぜ」
「したら今回は縁が無かった。つー事すかね？」

入り口を塞ぐリーダー格はもう投げやりだ。俺達を囲む実行犯の4人も同じ結論らしく、皆剣を持っている。

俺一人なら5対1でもなんとかなるが、ローエンを守りながらでは無理だ。

初めての实战でそこまで考えながら殺し合いなんて出来るはずが無い。

そもそも俺は人とか殺した事無いし、親族一同元気だから葬式に出た事すら無いんだ。

だが彼らは、躊躇う様子など微塵も感じられない。
俺とローエンは部屋の隅に追い詰められる。

「後が無いぞ！ なんとかせい！」

「どうしろってんだよ……」

今や俺は逃げ出さないだけで精一杯になっていた。

息が荒くなり、目に映る物から色が消え始める。

早く助けに来てくれバイツ、俺は限界だ。

「デメエら……」

リーダー格が右手を上げ、人差し指を立てて口を開く。次に出る言葉は『やっちまえ』とか『逃がすんじゃねえぞ』とか、そんな感じの言葉だったのだろう。

だが、言えなかった。

ボロボロのマントを纏った男に、背後から首を刎ねられたから。

リーダー格の異常に4人の男が目を向ける。

ソレは、その時には既にリーダー格の脇をすり抜けて、次の目標

に刀を振るっていた。

だから4人の内1人は、リーダー格を視界に入れる前に、首が飛んだ。

「……なっ!？」

続いて闖入者は、リーダー格の脇をすり抜ける際に抜き取っていた短剣を投げる。

首に命中、相手は頭から勢いよく倒れ、次の瞬間俺の目が床の認識を拒否し始めた。

「てっテメ……」

漸く敵と向き合った4人目の犠牲者に、ソレは大上段から刀を振り下ろし、受け止めようとした剣ごと相手を叩き潰す。俺はもう限界を突破した。

実に、10秒にも満たない時間だった。

最後の1人には最早戦意など残っているはずが無い。

剣を捨てて何かを叫ぶ最後の1人は蹴り倒され、その金属製の胸当ての上にソレの足が乗る。

そして、初めて口を開く殺戮者の男。

「他には関係者、居るか？」

「誰もいねえよ! 頼む! 助けてくれ!」

「残念」

男が僅かに足を上げ、力を込めようとするのが、解った。俺はとっさに顔を背ける。

次の瞬間、大きな金属音が、響いた。

「で、その男は黙って消えちゃった訳かい？」

バイツは照明魔法の光を頼りにメモをとっている。

「……らしいな」

魔法の光を眺めながら、バイツの問いに答える。

誘拐犯の殲滅後、俺達は皆の1階でバイツ達救出班を待ったが、バイツ達が到着したのはそれから2時間ほど後。日が暮れた頃だった。

ローエン氏曰く、マントの剣士は護衛として見張りをしてくれていたが、バイツたちと入れ違うように消えたそうだ。名前も名乗らずに。

俺は自分が1階に移動した事にすら気が付かないほど、ショックを受けていた。

なお、俺が突入前に倒した誘拐犯は何者かに止めを刺されており、出会わなかった最後の1人は馬車の脇で、『お腹と背中がくっついた状態』で発見されたそうだ。どちらも彼の仕業なのだろうか。

初めての实战はあまりに刺激的で衝撃的で、俺の又ルイ覚悟をへし折るには十分すぎた。

バイツは俺の事が気になるのか、心配そうなそぶりを見せながら、遠距離通信の魔法で何所かとやり取りをしている。

そんな目で見るなよ、やってる事は悪人の癖に。ますます凹むじ

やないか。

「お主、実戦経験が無かったのか」

いつの間にか、後ろにローエン氏が立っていた。

こんな爺さんにも気付かない有様じゃ、俺もつ無理だよ。

「……はい」

力無く答えると、ローエン氏は笑う。

「良い経験をしたのう」

何所がだよ。言い返す気にもなれない。

「お主が本気になれば、同じ事が出来よう？」

「……はっ」

思わず笑う。俺もあんな化物になれって？ 「冗談じゃない。

「今の気持ち、忘れるなよ？」

……成る程ね。上手い事言う爺さんだ。

隣町にて

初めての实战の後、慰めてくれたローエン氏にライターを見せたら、大喜びされた。

魔力を使わずにこんな面倒な仕組みで火を呼ぶ機械なんて、間違いないく現代人の発想には無い『遺失技術』だそうだ。

ライデさん達に出会った夜、俺はこのライターで火をつけた。

その時点で俺は、在り得ない事をしていたんだな。

ローエン氏はコレを欲しがったが、魔力の無い俺はこれを手放せないので仕組みを教えてあげると、礼として金一封を頂いた。誘拐犯も彼の懐探るだけにしておけば良かったのにつて額だ。コレで2ヶ月は遊んで暮らせる。

バイツの剣は頂いた。勿論追跡魔法は解除して、だ。

無駄に太い鞘は青地に金の模様が描かれた美術品だが、その無駄な部分に高価な魔石が隠してあるというトンデモ設計。流石お大尽様使用と言えよう。

……何だかライデさんから貰ったなけなしの金と、初期装備の錆びたポン刀の有り難味が消え失せちゃったな。

その後、最前線の町に帰るバイツとローエン氏に別れを告げると、何人かの護衛に送って貰い、隣町に無事到着した。

1人になった俺は自分の身の丈に合う宿を探し、1階が酒場になった、2階建ての宿に入った。

丁度安い1人部屋が空いていたので、宿泊手続きを取り、サーピスの概要も碌に聞かずに横になる。

宿の女将は『そんな事じゃいつか騙されるぞ』と言っていたが、色々と限界を超えていた俺にはその言葉も途中までしか聞こえなかった。

あ、鍵開けっ放しだったんで深夜に強盗が来たけど、窓から放り

投げたよ。

夜が明けて、酒場で朝の日替わり定食を食いながら（飯は全部別料金の非道な仕様だ）女将に聞く。

こつちが客なんだし軽い口調で話すよ？

「剣の道場とかつてある？」

命の取り合いを経験した今、生き延びるための技術が欲しくて堪らない。

それに、人が集まる場所で何でもいいから情報を集めたい。

「え〜と、2軒あつたね。キョウカイ公認の訓練所と我流の道場と。道場破りでもする気？」

そこまで豪気じゃないよ。ヒラヒラと手を振って否定する。

「まさか。2軒ね、解った。後で場所教えてよ」

教会とはお近づきになりたくないし、我流の方に決定だな。

「実践的な知識が欲しいなら道場だね。あんたも立派な剣持ってるんだし、基礎ぐらいいは出来てんだろ？」

「……基礎から学んだ事って、無いんだよね」

「ふうん。どつか別の勢力圏から来たんだ？」
「そこらへんは自由に想像してよ」

よく聞けば教会の義務教育には戦闘訓練も在る様だ。大変だな。
でも、教会の訓練で基礎固めつてのも……
とりあえず両方見るだけ見とくか。
俺はそう決めると、定食をかきこんだ。

「はあ…… そのお年で基礎訓練からですか？」
「いやあのそのあの……」

受付のお姉さんが困惑した顔で俺を見上げる。哀れむ瞳がハートに痛い。

そう、俺は公認訓練所で基礎の基礎から学ぶ事にした。俺に道場の訓練はちよつと早そうだったのだ。

…… 眼球も臓器だぞーとか、マジで今は無理。

「年齢制限はありませんから、止めはしませんけど…… コース変更は有料ですからね？ お名前はリュウジさんって。身分の方はそちらの剣でいいんですよね」

「はい？」

お姉さんは俺の疑問の声を無視して手続きを進める。

どうやらバイツの剣は身分証明書代わりになるようで『商組4種

より紹介アリ』と記入されているのが見える。商業組合第4種って事か？ 4種って事はガソリンが扱えるとかタクシーが運転できるとかそういう事か？

「訓練においてはそちらの刀をご利用ですか？」

「いや、こつちの剣で」

バイツソードをペチンと叩く。

錆びた刀で訓練しても意味はない。売ろうとしたら逆に処分費用を請求されたから持ってるだけだし。

「訓練では鞘を剣に固定して訓練を受けるのですが……その鞘、重いでしょ？」

「中はくりぬいてスツカスカなんですよ」

嘘だけだな。

「剣の登録変更もお高いですよ？」

何でも金取るな、ココ。

でも受講料はタダ。施設の維持管理は教会が持つてくれるので、訓練生が支払った金は全額遊歩費に消えるらしい。酷い。これが世界の歪みか。

「これで登録は完了、今日の午後から訓練を進められますが、いかがなさいます？」

「じゃあ午後からの開始をお願いします」

こうして、俺のこの世界での足場固めが、基礎から始まった。年齢一桁の子供達と共に。

宿と訓練所を往復する事一週間。

子供から『脳筋さん』との呼び名で親しまれながら集めたオモシロ情報をココに語ろう。

この世界では誰もが魔力を持っているが、その総量には個人差がある。

魔道士として身を立てたければ、魔石の魔力補助などに頼らず魔法を使う事が望ましい。

逆に言えば、一般市民でも魔石一つあればそれなりに魔法が使える。ライターも懐中電灯もスピーカーだっていらぬ。

ちなみに一般的な魔石のサイズは米粒が半欠片程で、誰もが魔石を埋め込んだ指輪を着けて生活している。指のサイズが変わったら、魔法で号数を変えてやればいい。魔力万能だな。

……だが、極稀に現れるのだ。魔力総量が低すぎて魔石を起動させる事すら出来ない『魔法弱者』『無力者』と呼ばれる存在が。

そんな日常生活にすら支障をきたす人間の未来は暗く、成人するのも難しいとか。

故に、自分の事を魔法弱者であると誤魔化した俺は蔑称として子供から『脳筋さん』と呼ばれる。

次に、人以外の存在について話そう。

先に言ってしまうが、この世界に魔物なんていない。

それなら最初の森の異形の群れは何って話だが、ソレは後述する。ゴブリンとか金のジュータンみたいなレベルアップや金稼ぎのために存在する雑魚敵がない。そもそもRPGみたいな雑魚退治でレベルアップしたところで、自分の技に変な癖がついちやうんじやないかと思うんだが、実際にどうなるか試したわけじゃないから深くは考えないでおこう。

では森で野生動物でもって？ はいアウト。

森は教会の大切な資産だ。中で何かをするには『教会』と『委託管理人』と『認可業者』と『森番』と『狩人』の許可が要る。

……収穫物は上記5業者にピンはねされ、残りカスは『認証無し』の違法商品なんてウチが買い取るハズ無いに決まってるじゃないですか』となり、卸値の8割引きでも売れば大成功だ。

森の外の野生動物を狩るって手も考えたが、皮を剥ぐとか俺は無理。どうせ買収かれるし血とか触りたくないし、何よりめんどい。そんな訳でレベルアップは訓練所、金が欲しけりゃバイトでもするしかない。

随分と世知辛いファンタジーだなおい。

続いて、亜人について。

この世界の亜人は、文明崩壊の際の戦争（子供達はラグナロクと呼ぶ）において創造された改造人間だ。

エルフ、フェアリーやドワーフみたいな外見的特徴は基本存在しない。

ネコミミ？ シツポ？ 夢見るのはファンタジーの中だけにしておけ。

亜人の一番の特徴は『基本的に食事を取らない』と言うこと。魔力をエネルギーに換え、疲労を知らず、睡眠も不要。彼等は理想の

兵士、無敵の壁だ。

そんな奴が簡単に見分けられたら各個集中攻撃をうけてお終いじゃないか。

だから、外見からでは絶対に解らない。

よって外見的特長があるのは、戦争後に誕生した雑種だ。

有名な雑種は現在も語り継がれる物語の英雄『死霊騎士』と、人との関わりを持って暮らす珍しい雑種で、今では町の名前にまでなってしまった『藍のお嬢様』。500年前に突如襲来して黄金戦士に討伐された最も有名な悪役『青の群れ』などである。

森の異形は、夜行性の雑種が在来種と戯れていただけって事になる。

……あれが亜人とか、無いわー！

だが、亜人にも繁殖力と言う弱点があり、今では見かける事は皆無になってしまったそうだ。

見つけたければ険しい山脈の上だとか俺が最初に居た森みたいな『人が24時間生き抜くことが出来ない場所』に行き、相手に自分から現れてもらう必要があるらしい。

確かにあの異形も、こちらから発見する事は出来ないし、あそこにしかならない希少動物だけど…… 納得いかね〜。

まあ、そんな亜人にも負けない筋力を持つ俺に、子供らは尊敬の眼差しで『脳筋さん』と呼んでくれる。

……ちよつとは馬鹿にされてる気もするがな。

最後は、皆大好き英雄の話だ。

子供の好きな正義の味方や、悲劇のヒーローなんか人々の記憶に残り、英雄譚となる。

だから英雄になるために必要なのは、実績や結果ではない。喜劇性と悲劇性。そして、歴史に残す傷跡の深さだ。

最も有名なのは500年前に活躍した『黄金戦士』だろう。

名前通りの黄金の鎧を身に纏い、虚空から黄金の剣を無限に創造して戦うと言う冗談のような人間で、余裕のあるうちは装飾の付いた黄金の剣を持って戦うが、追い詰められると刀身だけを矢継ぎ早に創造して投げつけシューティングゲームを開始するという面白キヤラだ。

無為な争いを続ける2大帝国（片方は明らかに教会だ）の戦争を数人で制し、疲弊した両国を急襲した雑種『青の群れ』と呼ばれ、無限に増殖を続ける巨人の、地の底に隠されたコアを破壊した、正にスーパーヒーロー。

……彼の創った黄金は何所に消えた？

次は前述の『死霊騎士』悲劇のヒーローだ。

若き君主と共に戦い国に平和をもたらずも、政敵の罠に嵌り死亡。その高潔な魂は、死してなお友を助けんとして死せる肉体に留まり、彼は元人間の雑種『死霊騎士』となった。

歴史の濁流に吞まれて国が滅びても、彼は親友の最後の領土である地下墓地を守り続けているという。

……それ、アンデットって、言うんだよね？

ちよつと斜に構えた子が教えてくれたが、死霊騎士の見た目は古くに発行された本ではスケルトンだったが、最近の絵では青白い肌の美青年になっているそうだ。こいつ、腐ってやがる……！

最後は2年前に教会を救った勇者様『白金の天使』

心技体全て完璧、15歳にして教会最強の武器を授けられた天才。人々を雑種に改造する遺失技術を利用して隣国を瞬く間に制圧、教会に宣戦布告した魔王を僅か半年で滅ぼした。

名前通りのプラチナムな装備を身に纏い、鎧から生える光の翼で空も飛ぶ、良い子の夢の具現化みたいな少年だ。

その途上にて魔眼の少女を救い、旅の中で彼に惚れたその少女はその恩を返すために、3年制の学園の2学部、つまり6年分を1年で学び自主退学、今は前線で経験を積んでいる。なんてサイドエピソードもあるそうだな。

……勉強なめんなよ、アイ。

そんな勇者様だが、少し前までは各地を放浪して人助けをして回っていたとか。

数ヶ月前にもデツカイ成果を上げて教会中央に戻り、最近は後進の育成を頑張っているらしい。

……18歳で教鞭を揮う『白金の天使』って、色々勿体無い話だな。

「脳筋さーん」

「どうしたレフィア」

訓練が終わると、わらわらと寄ってくる子供達。

「お話の続きを聞いたげよう」

一番前に立った娘が、両手を腰に当てて俺に言う。
無駄に偉そうだが気にしない。これは取引なのだ。

「よーし。昨日は浮遊大陸を脱出した所だったな。ちゃんと皆集めたか？」

「おつよー！」

こうやって俺は彼女達に『オリジナルのサーガ』を聞かせ、その代わりに彼女達からこの世界の御伽噺を教わる。

大人達には『子供の会話力を育てている』として納得してもらっている。

そして俺の話の元ネタは昔遊んだゲーム。

RPGの魔物の存在を上手く誤魔化してしまえば、ネタは無尽だ。

そして会話の合間に挿む世間話で、俺はこの世界の常識を覚えていく、て訳だ。

訓練所から宿に戻る頃には、日も暮れていた。

最近自分が託児所扱いされている様に思えてならない。

1階の酒場は程よく混み合っており、魔道士崩れのウェイターさんが、8枚位のトレイを背中で自在に操りながら注文を取っている。隅っこの定位置に座ると、女将さんが注文を取りに来た。

「お疲れさん、随分と楽しんでるみたいだけど、金は大丈夫なの？」

「もう3ヶ月は大丈夫」

「ならいいけど……」

何だか心配されているみたいだけど、大丈夫。大丈夫なはず。だ
といいなあ。

「……場合によっては働き口をお願いするかも知れないです」

ちょっと不安になってきたので、弱気になってみる。

「最悪ウチで雇ってもいいけど…… 安いよ?」

……おのれー

ツマ、名が売れる

訓練所に通って3週間が過ぎた頃には、子供達の目が変わっていた。

訓練の終了後、子供達が俺の前に集まる。

「脳筋せんせー」

「よし、今日は『大陸横断鉄道』に乗り込んだ所から始めようか」

「はいっ！」

子供達は真剣な眼差しで俺の前に座る。内何名かは手元にノートを持っている。

今、俺が話している御伽噺は『鉄と戦車の物語』で、はつきり言う、出だしでの食いつきは最悪だった。

なぜなら、俺が今回初めて『魔力の無い世界の物語』を話したからだ。

魔王が有れば、自分にでも倒せそうな敵に手間取る主人公。

魔王の指輪さえあれば、タダの銃弾など無意識の内に弾いてしまえるのに、魔力弱者の何ともどかしい事か。

そんな子供達に俺は教えてやった。

「今回の主人公、弱いと思ったか？ ハンタなんかはこう思ったんじゃないかな。『俺がそこに居れば楽勝なのに』って。だったら！作ってもいいんだぜ？ お前が主人公を助けて仲間から尊敬の眼差しで見上げられる物語をよ！」

主人公の隣に自分が居れば。否、自分が主人公であれば！

この世界において本といえは歴史、教育、教養或いは手垢の付いた英雄伝説しか無い。つまり娯楽小説が無いのだ。

僅か2週に満たぬ間に、各種名作ゲームのストーリーの洪水を浴びせられ、翻弄され続けた子供達に取って、この発言の与えたインパクトは想像を絶する物だった。

「まずは書き散らせ！ 次の日読み返せ！ そしてお前の活躍を更に格好よく！ そして華麗にするんだ！ ライバルも！ ヒロインもヒーローすらもお前を輝かせるための小道具だと知れ！」

俺はただ勢いだけで捲くし立てる。今の彼らにはそれで十分、理屈も説得力も不要だ。彼等は自分の黄金郷エルドラドを見つけてしまったから。後はもう情熱を紙に叩きつけるだけ。

荒削りながらも次々と湧き出すインスピレーションは、もはや自分にも止める事が出来ない。

そんな彼らは今やオリジナルの物語にまで手を伸ばし、仲間同士でお互いの物語を評価し合い、素晴らしい成長を見せている。

今の俺の仕事は彼らの物語の文章を批評し、彼らに閃きの切欠を与える物語を語る事だ。

一時は親御さんからクレームが来たが、識字率上昇のためとか、文章力を鍛えるとか言って誤魔化し、それでも食って掛かる小母様連中には、シンデレラストーリーとハーレクインロマンスの骨組みを教えた所、数日後には彼女達を中心に、町全体を巻き込む大きな流れが出来上がっていた。

ココまで大事になるとは思っていなかったが、それだけ娯楽に飢えていたのだろう。

大事になりすぎて町の偉い人に連行されたが、そこで俺はダメ押しに提案する。

「人気の作品を集めて短編集を作りませんか？ そしてソレを各町村に配布するんですよ、勿論有料で。作者に利益を還元すれば、それを目当てに更に良質な娯楽作品が集まりますよ。そして読者が増

えれば、後は……」

俺は、町おこしの英雄になった。

時刻は夜の書き入れ時が終わる頃。店の夜を任されているウエイターの魔道士さんがカクテルを作り、ウワバミのおっちゃんが出される側から美味しい美味しいとグラスを開けていく。一気です。

「おかしい」

「そう？ お客としては最高だよ？」

「じゃなくて」

「どうしたよ、リュウジ先生？」

遅めの夜の定食を食べながら呟いた俺の隣に、宿の女将が座った。彼女は俺の作ったビッグウェーブに乗らなかった人の1人だ。風の噂に、リアルハーレクインしてバッドエンドだったので、その気にならなかったと聞いた。

「剣で身を立てる予定だったのに」

「いくら脳筋先生でも魔力無しじゃあ盾にもなんないよ」

確かにそうなのだ。

一般人が日常生活の中において、魔力を伴わない拳銃位ならオー
トガードしてしまう世界で、本職の戦士は剣に魔力を込めて戦っ
ている。それも無意識の内に。

相手を倒したいと思うだけで、倒されたくないと思うだけで、武
具に溶かし込んだり、編み込んだ魔石の力が発動する。

お互いに同じ効果が発動して相殺し合えばプラマイ0だが、魔力
弱者の俺は魔石の補正が無いので圧倒的に不利になる。

これは訓練所で最初に学んだ、絶対に越える事の出来ない壁だ。

「いつその事ココにずっと居ても、いいんじゃないの？ アタシは
構わないよ」

「下手に大事に関わったから、逆恨みとかされそうで……」

俺は口元を引きつらせて笑う。

女将さんはソレを冗談だと思ったらしく、豪快に笑い飛ばしてい
るが、俺にとっては冗句で済まされる話じゃない。

短編集が軌道に乗ればいいが、調子に乗って大量の在庫を抱えた
り、流行の変化に乗り遅れたりしたら、誰かが責任を取らねばなら
ない。

発起人で根無し草の無能力者。俺が最良の生贄じゃないか。

弟子の成長が見られないのは悲しいが、俺の薔薇色になる予定の
未来には変えられない。

俺のトラウマもだいたい改善されたし、記憶喪失設定を使わずに旅
が進められる一般常識も獲得できた。

……そろそろ、塔に向かう事を考える時期だろう。

「……西の塔を間近で見たいんだけど、国境を越えるのって大
変なのかな？」

「南西最前線の町で商隊にでも頼めば行けると思っけど…… ソレ
もお話作りの糧にする気かい？」

「アレの魅力に気付かないのは、とてももったいない事だよ」

俺は静かに、だが熱く語る。

女将さんは俺の本気を感じたらしい。

「だったら、北の果てにある塔を目指すほうが安全じゃないかねえ？」

遙か北の極寒の地にも、巨大な塔がそびえ立っているらしい。

教会の領内にあるソレは、何所にも入り口が無く、歴史を紐解くに人の侵入を許した記録が残っていないと聞く。

恐らく、西の塔も同じなのだろうが……

「……西のアレが、俺の初めて見た塔なんだ」

「初志貫徹？ 一目惚れ？ まあ夢見るのは構わないけど、火傷じや済まないかもしれないよ？」

彼女は本気で俺を心配してくれている。だが。

「ココで腐るよりはいい」

「……アンタ、火傷した事無いだろ」

断言される。

違うと言いたい所だが、誘拐犯からローエン氏を助けたあの時、俺は何もかもを甘く考えていた。

俺は事態を混乱させただけだった。

助けが入らなければ、俺はココに居なかった。

俺が今、どれほど真剣なつもりでも、彼女から見れば間違いなく人生を甘く見ているのだろう。

だから。おどけた顔で、言った。

「咽元過ぎれば熱さ忘れる、って知ってる?」

彼女も、笑ってくれた。

「ま、アンタの好きにすればいいさ」

そう言うと、女将さんは席を立つ。

俺も冷めた飯を片付けるべく、スプーンを動かし始めた。

「あ、そうだ。もう遅いんだから食器は自分で洗っておくれよ?」

……おのれー

深夜、ガラスの割れる音で目が覚める。

おいおい、先日の強盗だってもうちよい静かに入ってきたぞ?

今の俺はどれだけ深く眠っていても、瞬時に全力モードへ移行可能だ。

はつきり言って、並みの人間に俺の寝込みを襲う事は不可能だと断言出来る。

が、目を開けた瞬間に視界に入ってきたのは、俺に飛びかかるうとする黒い影。

うっわ早え!

言った側から並の人間じゃねえぞコレ。

「うわっち！」

変な叫び声を上げながらソレを蹴り飛ばし、そのままの勢いで飛び起き…… ようとして、左肩を引っ張られてバランスを崩す。

肩に何かが乗っている。

何コレ、短剣の柄だ、痛てえ、貫通してる、痛い、どうしよう、凄く痛い、コレ抜いていいの？ 吐きそうに痛い、止血必要？ 痛い痛い、声出ない、いたい、目えチカチカ、いたいいたい、視界が、いたいイタイイタイイタイ！

「が。……い、……あ」

「すげえ飛んだな、無事か？」

「まあ、どうにか大丈夫です。早く済ませましょう」

イタイイタイイタイイタイイタイイタイ……

「手足はどうしますか？」

「右手があれば後は要らないんだろ？ 危ないからバラしとこうか」

イタイイタイイタイイタイイタイイタイ……！

「隣の部屋に動きがありますね」

「ナイフでも投げとけ」

「おい！ こんな深夜になヴィア……って殺す気か！？ 殺すぞ！」

いだい痛い！ 目の焦点が、痛くて、合わないっ！

「一度引くぞ」

「二度目は無いよ!」

「……なっ、貴様!」

状況が解らないが、声は男二人と後から来た口の悪い女声一人。女声が優勢らしいが、視界が涙で歪んで解らない。

「……クソッ」

誰かが窓から何かが落ちる音と、部屋の入り口から窓に走る靴音。

「……いやー驚いた、何事かと思っちゃったよ」

漸く戻った視界には、割れた窓から外を見下ろす黒髪ロングのお嬢さんが見える。

初めて見る顔だから、多分この町の人間じゃない。

全てが終わった後の様だが、自分の置かれた状況を整理する。

何だかよく解らないけど、殺されそうになって……助かった?

うわ幼女強い。でもそんな事より肩の短剣が凄く痛いよ。

ベッドに張り付けられたまま、必死に声を出す。

「ね…… おねあ……すえて」

あまりの痛みと言葉が出ないが、『お願い助けて』は通じたよう
で、彼女はこちらに寄ってくる。

「お? 汚染されていない生物なんてアタシ初めて見たよ」

バイツめ、この世界は魔眼の持ち主で溢れ返っているじゃないか。

「助けて……」

「汚染率0パーの個体なら……」

彼女は俺の声を無視すると、自分の指先に刺突用ダガー（ステイレット）って言うらしいよ）で傷をつけ、俺の口元に持ってきた。

ダメだ、コイツもヤバイ娘だ。

「はい、あーんして？」

ダメだこの変態少女。

階下でも騒ぎに気付いた様で、バタバタと階段を上って来る音が複数。

だが、彼女はそんな事を気にも留めずに、硬く口を閉じた俺の唇を、血の付いた指先でなぞる。

とても、やわらかい。そう、感じた。

まるで意思を持つかの様に、ヌルリと口腔内に拡がる彼女の体液を感じながら、俺の意識は刈り取られた。

目が覚めると、町の病院だった。

日の位置から考えるに、丁度昼飯時だろうと当たりを付ける。

既に左肩は完治しており、メンタルの部分に異常が無い事を確認して、その場で退院となった。

肩を直してくれたのは、宿で隣部屋に居た少女だろうか？ あのエキセントリックな黒髪ロング。

何のお礼もしてないから、まだ宿に居てくれればいいんだが。

宿の前に立ち、2階の様子を見る。

俺の部屋は窓枠が壊れたままになっており、道行く人の注目の的になっている。

眺めていても仕方ないので、中に入る。

「せんせー!!」

「だいじょーぶだったか、先生」

訓練所の子供達が体当たりで俺を出向かえた。

俺は全員をガツチリと受け止めてやる。

「おいおいお前ら、今は訓練の時間だろうに」

「そんな場合じゃないって先生」

後ろでは小母さん連中も笑顔で迎えてくれた。

「脳筋先生が無事でよかったですよ」

「先生は私等に娯楽を持ってきてくれた人だからね。これで終わりなんて事にならなくて本当によかった」

女将さんもホツとした表情だ。

「最悪『ウチの部屋ブチ壊しやがって』みたいな事を言われたらどうしよう、なんて思っていたので、ココまでの歓迎を受けると嬉しくなってしまう。」

何かこう、この町の人々に認められたんだなあ、って思う。

皆の歓迎に笑顔で答えながら女将さんの元に到着。

「この度はお店に多大な迷惑をおかけしてしまいまして、申し訳御

座いませんでした」

「やだねえそんな、畏まる事なんて無いさ。アンタは真夜中に襲われたんだから、無事に帰ってきてくれただけでも万々歳さ。何も気に病む必要なんか無いんだよ？」

「それで、俺を助けてくれた女の子は？」

「……へ？」

「俺の部屋に女の子、居ませんでした？ ロングヘアの」

空気が凍った。女将さんが、青ざめる。

想像が付いた。俺も一緒に、青ざめる。

「あの娘が、犯人じゃ、無いの？」

「……じゃあ、今、何所に？」

「……牢屋？」

俺は宿を飛び出した。

お礼に行こうよ

「いやー酷い目にあつたよ」

沈む夕日を眺めながら、隣を歩く彼女は笑う。

彼女の名はカグヤ。身長は俺より拳一つ下。

前髪自然な姫カット。腰に届きそうな後ろ髪が、彼女の歩みに合わせ、しなやかに踊る。

その笑顔を見るととても可愛らしいが、その実力は圧倒的だ。

俺が番兵の偉い人を説得して牢屋に辿り着いたとき、ソコでは地獄絵図が展開されていた。

具体的に言つと彼女は、ぐったりした見張り番を尻目に、牢屋の格子を魔法で曲げて伸ばして、無骨な扉を繊細な装飾門に作り変えていたのだ。

鉄が粘土のようになる高温を、周囲に撒き散らしながら。

半死半生の見張りを救出し、必死の思いで再突入。出してやるからこの熱気を何とかしてくれ、と叫ぶと『わーい』とか可愛い声を出しながら、自作した合鍵で外に出てきた。

「あんな簡単に出られたなら、捕まらなければ良かったのでは？」

「逃げ回つたら君に会えないじゃない」

「え？ 何コレフラグ？」

「フラグって何？」

そんな会話をしながら宿に到着。

彼女は平謝りする女将さんから笑顔で無料の食事券をせしめ、俺を自分の部屋へ誘った。

俺の部屋は窓が壊れたままなのでその好意に甘える事とする。

扉の向こうには、ベッドに腰掛ける和装の男が居た。彼は捕まる事を良しとせず逃げ回っていたのだろうか。

折角の和装なのに脇に置いた剣はどう見ても『ドラゴンを殺しうる質量を持った鉄塊』だ。

男に駆け寄りカグヤが泣きつく。明らかに演技で。

「イスルギい、何で助けに来てくれないの？」

男はカグヤではなく俺を見る。

「犯行グループの目処が付いた。報復するか？」

「無視すんなよう」

「報復、ですか？」

いきなりの進言に俺はどう答えたものか考える。

カグヤが一生懸命アピールしているが、男は適当に受け流しながらも、こちらを見る視線は揺るがない。

報復など考えもなかった俺は、とっさに答えを出す事が出来なかった。

「えーと。とりあえず自己紹介から始めませんか？」

先ほども言ったが牢屋に入っていた方はカグヤ。魔道士で、白いセーラー服に同系色のスカートを合わせたような服を着ている。服の所々に赤いラインのアクセントが入っており、バトル系魔法少女っぽい。

一般的な魔道士は、魔法威力アップのために魔石を組み込んだ触媒（杖とか指輪とか）を持つものだが、彼女は何も持っていない。

まーた才能だけで生きていける天才少女か。

年齢は『ひ・み・つ』とかほざいていたが、見た目から判断するに俺より年上と言う事はあるまい。

犯人を捜していた方はイスルギさん。丈が180cm以上有りそうな戦士で、持つてる剣も俺の身長（憶えてる？ 160だよ？）よりでかい。

ざんばら髪で、時代劇の用心棒みたいな地味な着物を着ている。

襷タスキで袖を捲くっており、襷の背中で交差した部分にフックが在るので、ソコに剣を掛けるのだろうが、ソレ絶対襷が持たないから。

……魔力でどうにでもなるのか？ 魔力マジ万能。

名前以外語りたがらないが、身た所20代後半といった感じだろう。

旅の理由は秘密らしいが、カグヤが『次は何所いこうか？』みたいな事言ってるので、見聞を広めるとか言って観光でもしているのだろう。

俺も自己紹介を終えると、イスルギさんはまた聞いてきた。

「叩き潰すなら手伝うが」

「そこまでする事も……ないのでは？」

自分でも甘いと思う。

ナイフで刺された男が『まあまあ皆さん落ち着いて』とかイカレてると思うが、俺はこれ以上面倒に巻き込まれたくない。

あまりの痛みにパニックっていたから見たわけではないが、死体が無い事から考えて襲撃者は逃げたようだし、俺がまた襲われる前に逃げてしまえばいい。

肩の傷も完治しているから、こちらから手を出して復讐の連鎖が云々って事になるのは御免だ。

「奴らはまた来るぞ。向こうも二人死んでいるからな。後には引けない」

おいおいマジかよビツクリだよ……

殆ど戦闘があった気配すら部屋にはなかったんだが、カグヤが2対1で圧倒したって事？

「いつの間にそんな事が？」

「リュウジを襲った奴らはアタシが殺っちゃったでしょ、見てなかった？」

カグヤを見る。

「どしたの？」

彼女も俺を見る。

あそこの自販機の下に10円玉が入っちゃったでしょ、見てなかった？

例えるならそんな感じ。

何故、こんなにも人の命が軽く扱えるのだろう。

「熟考するのはいいが、相手は既に次の手を打った後かも知れないぞ」

「もう少し、時間を下さい……」

俺は、甘いのか？

床を睨んで考えるフリをするが、俺の中の答えは決まっている。

人の命は重い。

「襲撃グループは2つの思想で動いている」

前置きも無くイスルギさんが語り始める。

「この町に瞬く間に流行を作ったお前が、何らかの方法で人心を掌握せんと呪いを振り撒いた。そう考えるのは町の将来を憂う一部町民達。冷静な判断力を失う前に、他の町に被害が出る前に、お前を処分したいようだ。もっとも、町を出たなら追う気はなさそうだな」

何だソレ。

『冷静な判断』で俺を殺すのか？ 確認もせず？

「彼らを煽ったのは、魔力弱者がアイディアの中心に居る事が気に入らない、町の権力者の1グループ。お前が持っているかもしれない他のアイディアを聞き出して、自分の名で発表したい。安全のために手足を奪って確保したいようだ」

ちよつと待つてくれ。何ソレ、何なんだソレ。

『名声が欲しい』ってだけで俺の手足を落とすのか？

「逃げるか、殲滅か。お前の選択肢は2つじゃないか？」

「……マジですか？」

俺は……

人の命は……

「ハイイ提案！ 間を取ってアタシを監禁した警察を襲撃するとい
いよー！」

「実行部隊の傭兵共で我慢しておけ」

そこは既に決まっているのかよ。空気読まない娘だな。

「イスルギさん」

「敬称は要らんよ」

「ではイスルギ。その実行部隊への襲撃は決まっていますか？」

「カグヤが牢屋に入れられた礼に、な。飯い食ったら殲滅に行く。」

終わったらそのまま町を出るつもりだ」

「派手にやるつもりだからね。君が苦痛の代償を望むなら、ついでに他の奴も潰してあげる」

こちらを見るカグヤは笑顔だ。善意の笑顔だ。

ソレを見て俺は決めた。

「俺はそう言った事は不要です」

カグヤの表情は『それでいいのか？』と問うている。

俺はソレでいいのだ。だが、二人を止める気もない。

よってカグヤを見ながら、俺はこう続けた。

「ですが、お二人のやり方を見せて頂けませんか？」

町外れの酒場。

初めて入ったその場所では、ごつい男達がゲハゲハ笑いながら酒を酌み交わす、テンプレのような光景が広がっていた。

ぶっちゃけマジで伝説のセリフ『ママのおっぱいでも飲んでな』が聞けるとは思わなかった。

俺はそんな煽りを無視してカウンター席に座り、足を組んで肘を付くと言ってやった。

『ミルクを』

『脳筋先生よう、ココソーユー店じゃねーから』

店長さんにはそう言われたが、テンプレのおっさんに気に入られ、今は彼等と相席のテーブルに移りジュースを飲んでいると言う現状に至る。

店長さんは俺の活動を知っていたので、取材と言って納得してもらった。

ジュースを飲んでいるのは、ココでもうすぐおきる惨劇を見学するため。

この世界で血やモツを見ずに済ますのは無理だ。

一度この目に焼き付けて、自分の中で感情を処理出来ねばならない。

そしてターゲットの傭兵は全員、俺と向かい合わせに座って楽しみに語るテンプレおやじの向こう側、隣のテーブルに座っている。

数は5人、リーダーらしき男が長テーブルの短い辺に座り、左右に二人づつが座る形だ。

襲撃の実行部隊は他には居ないと聞くが、どうやって半日足らずで全てを調べ上げたのかを聞くと、イスルギは黙り込み、カグヤは『ひみつー』とか言っていた。カグヤはそもそも牢屋で遊んでただ

けだるうに。

とにかく対象の位置が店の中心なので奇襲は出来ない。

イスルギ、カグヤ、どう出るつもりだ？

と、考えていると頭にカグヤの声が響いた。

《3、2、1》

0、のタイミングで、天井を破って『ボロボロのマントを頭から羽織った男』が、鉄塊としか思えないような両手剣を大上段に振り上げたポーズで降って来た。

ソレはそのまま大剣を振り下ろして実行部隊のテーブルを盛大にぶち壊すと、剣を水平にしたまま高速でギョルリと一回転した。

対して実行部隊はリーダー以外の全員が手元の武器で防御体制をとった。酒が入っているとは考えられない脅威の反応速度だ。が、鉄塊はそんなものを物ともせず、4人の男を引き裂き肉塊に変えた。

実行部隊リーダーは目測で鉄塊が届かない事を理解していたらしく、闖入者を見据えたまま動かない。撒き散らされた色々な物で赤黒く染まったまま、突如現れた男とにらみ合う。その度胸と判断力はイカしていると思えない。

リーダーが剣を抜きながら立ち上がるのと、両手剣の男が天井の穴にフワリと舞ったのは、ほぼ同時だった。

「な、おい待て！」

慌てて叫んだリーダーが一步前に出て、そして

落とした雪玉のように足元から砕けて、光になって無くなった。

そして、静寂が訪れる……

誰も言葉を発しない。

テンプレ親父がゆっくりと、背後を確認する。

親父の後頭部に引っ付いた挽き肉が、残った目玉で俺を見つめムリムリムリムリヤバイキモイマツテチヨットごめん吐く。

しばらくお待ちください……ぐえ。

次に親父は、店長さんに視線を向け、一呼吸置いてから、言った。

「コップ、変えてもらえる？」

「もう帰れよ！」

現場の混乱に乗じて店を抜け出した俺はイスルギ達と合流、碌に説明もされないままカグヤの飛行魔法で町を出ると、そのまま飛び続けて再び最前線の町に到着。今回はスラムの安宿の1室に入った。

「いやー飛んだ飛んだ、こんなに飛んだのは久しぶりだよ」

カグヤはベッドの上で満足げだ。

だが、俺には彼らに聞きたいことがあった。

「色々一体どうやったんです？」

「随分適当な聞き方だなオイ」

イスルギが笑うが、疑問が多すぎて何から聞けばいいか解らない。

「じゃあ今回何をやったかを、順を追って教えてあげよう」

ベッドの上に立ったカグヤが切り出してくれたので、そちらを見る。

「まずイスルギの襲撃位置。リュウジの視界をジャックして位置を割り出しました」

「ちよつと待って、俺は魔力が僅かほどにも無いから、視界ジャックどころかテレパシーも出来ないはずなんだ」

イスルギが目を見開く。

「ただ電波もらってもアンテナなしじゃ受信はできない。」

「そうだね、汚染率0%だったんだ。だからアタシの中の……」

そこまで言うてから、カグヤがちよつと考える。

「そう、魔力の元をリュウジにあげたんだ。体液の形で」

「ああ、俺の助けを無視してやってた変態行為のことですね」

「変態じゃないよ！……だから今リュウジは中級魔道士クラスの魔力がある」

「魔力の受け渡しって事？ そんな事出来るなんて聞いたことないですよ？」

「え〜と。これは汚染率が0だったから出来たことで……」

カグヤは物凄く言葉を選んでるが、多分もう破綻していると思う。

「全ての生命が魔力を持って存在する事を、俺はバイツから聞いてる。」

そして、その魔力が死後失われない事も。

カグヤの言う事が本当ならば、俺は今までこの世界で食べた食事で魔力を得ても、おかしくないのではあるまいか。

そこは引いてもいいが、俺の魔力を0と断言する魔眼を持ちながら何故、魔力無き生命と言うこの世界にありえない存在に驚く事もなく、対処法すら解るのか。

そもそも魔力の事『汚染率』なんて言う奴いねーよ。

「あ！ て事は汚染率が汚染率が言ってるお前俺の事汚染したのか！」

「いやあ、あまりに珍しい个体だったのでつい……」

「照れるトコ違うから！」

「カグヤは真実を語る気ないから、次いこうぜ次」

イスルギのそれは助け舟なのだろうか？

「はい次！ イスルギのやった事には疑問はないよね？」

「いや、ちよつと前にイスルギは老人と剣を抜けない俺を助けてくれませんでした？ 刀で」

「おう」

「あの時は有難う御座いました。どうりで先ほどもあのイカレた戦法なわけですね」

「もつと褒めてくれていいぞ」

「あの時の刀はどこに？」

「……俺も真実を語る気ないから、次行こうか」

折れたから捨てたって言えばいいのに、コイツら嘘のつけない奴らだな。

「はい最後！ 残った敵はアタシの魔法で木っ端！ あんなの見た

事ない？ 自分の不勉強を恥じるといいよ！」

カグヤにはもう説明する気はないようだ。

彼女はドスンとベッドに転がり、イスルギが後を引き継ぐ。

「今日はこんなトコでいいだろ。俺もお前に聞きたい事がある」

「何です？」

「お前の今後の予定。だ」

「片道1時間の距離を2人抱えて全力で飛ぶカグヤが在り得ない事については？」

「……そこは『流石カグヤちゃん！ 凄い！ 可愛い！』で済ませ
といてよ」

適当な奴らだ。

ゼロから覚える魔力の使い方

「俺の予定ですか？ 西の塔に行こうと思ってますけど」

ソレを聞いたイスルギは、うつ伏せに寝転がったカグヤの側に腰掛けると、彼女の頭にそつと手を置き、言った。

「へー。じゃ、俺達もついて行こうかな」

カグヤが顔を跳ね上げ ようとしたが、イスルギの手がソレを枕に押し返す。

「……カグヤは乗り気じゃなさそうですけど？」

「大丈夫、後で説得するから」

イスルギは笑顔だが、カグヤは手足をバタつかせている。

枕の向こうからくぐもって聞こえる声は『いやーぜったいいやー！』つばい。なんと言うDV。

「イスルギ達は国境の向こうに行ったことが？」

目指す塔は国内ではない。向こうの国で何かあったのだろうか。

「向こうは色々と自由なお国柄でな、まあなんだ？ 色々あってな」

すげえ齒切れが悪い。

向こうで賞金首だとか支配者に目をつけられてるとか、碌でもない問題を抱えている気配がする。

「あれだ、道案内とか護衛とか、タダでやってもいいぞ?」

カグヤは諦めたのかスンスン泣いてる。なんと言うDV。

演技? 演技だよな? 演技だと思いたい……

「向こうは初心者だと色々と騙されやすいし、一人旅は危険だと思うぞ?」

何この人なんでこんなに必死なの?

むしろお前の方が危険。

……視線で殺しにかかってきた。カグヤはまだ泣いてる。

「ええと、じゃあ……」

「決定だな? 日程はお前に一存するよ。いやよかった」

何が良かったのかは解らないが、こうして俺は塔に向かう事となった。

折角だしこの町を一日堪能しよう今日は自由行動にした。

必要以上に張り切っているイスルギをクールダウンさせるためでもあるし、カグヤとちゃんと話し合っただけ良かった事もある。

それに前回のこの町では、雲隠れの準備ばかりして楽しんでなかった。

バイツは俺がこの町に入った事について、報告を受け取っているだろうか？

ライデさんは元気でやっているだろうか？

アイは……おいといて。

とか考えながら店を冷やかして回っていたらノンヘルのおかつぱ虚無僧、アイに会った。

建物の影からこちらを伺うポーズで、口を大きく開けた驚愕の表情でフリーズしてる。

近づくと、その場でへたりこんでしまう。おいおい大丈夫か？

「アイさん、そんな場所で何やってるんです？」

「……嘘……なに……コレ」

俺を見上げたまま動かないアイさんを引きずって、近くの屋台のテーブル席に座らせる。

飲み物を持って戻った頃にはアイさんは自分を取り戻していた。

「あの……リュウジさん、で、いらっしやいますか？」

アイさんが凄くマイルドになってます。

「どうしました？ アイさんらしくないですよ」

とりあえず飲み物を勧めてみる。スルーされた。

「リュウジさんでは、ないのですか？」

ダメだこいつ。

「森で助けていただいた、リュウジですよ」

アイさんは一つ深呼吸をした。どうやら帰ってこれたようだ。

「まさか人間になって帰ってくるとは、思いもしませんでしたよ」

「なんか、酷い言い方ですが」

「それが私の素直な感想ですから」

帰ってこない方がよかったかもしれない。

「私にとっては戦場に転がる死体の方がまだ人間らしく見えたのです」

「これは酷い」

「御免なさい。でも、私にとってそこまで常軌を逸脱した存在が、当たり前のように仲間と談笑している光景を見る恐怖。それが、今のセリフで少しでもご理解頂けると助かるのですが」

納得は出来ないが、理解は出来た気がする。

俺だったらソコまで拒絶反応の出た存在の隣で意識を手放すなんて出来ないだろう。たとえライデさんが見張っていてくれてもだ。

所謂「殺人犯と一緒になんて眠れるか！ 私は部屋に戻る！」の状態だ。一緒に眠る相手が殺人犯なら意思疎通も出来ようが、アイさんにとってはエイリアンと添い寝するような気分だったのだろう。よく暴行を加える程度で抑えられたもんだ。

「でも、今のリュウジさんの魔力はとても純粹で美しい。量は平凡ですが相性が完璧みたいですし、何をしたのですか？」

「相性？」

魔力に相性があるなんて聞いた事ない。

「ご存知ないのですか？　なら『魔力と身体の相性しだいで燃費に百倍前後の違いが出る』事と、それが先天的なものであり生涯を通じて変わらない事。世間一般の平均的な相性が10%前半で、リュウジさんはほぼ100%の相性を誇る事をご理解頂ければ十分かと」

「俺が神がかっている事は解りました」

「凡人にはそれで十分です。それで、何故このような事になったのかは、ご教示いただけないのでしょうか」

魔力に関する知識が豊富っぽいアイさんが質問するのだから、カグヤは常識の外側にいるんだろう。

だとすれば、カグヤの事は話さない方がいいと考え、回答は控える事にした。

「御免なさい、ところで他の皆さんはどうしてます？」

「……次の指示を待って待機中ですが、バイツは事務仕事に追われていますし、ライデは国境警備隊の錬度向上のため今は出払っています。私は暫くはココでのんびりするつもりですが、リュウジさんは？」

「西の塔に行こうと思っただけです」

「あれがそんなに気になりますか？　進入できないと思いますけど」

アイさんは不思議そうに聞いてくるが、今の俺にはそれ以外の目的がないんだからしょうがないじゃないか。

と、そんな感じでライデさん達の無事を確認できた俺は、他にも適当に雑談してからアイさんに別れを告げようとして……

「ちょっと待ってください」

引き止められた。

「なんです？」

「リュウジさんは、模擬戦とかお好きですか？」

場所は変わって訓練所。所員に模擬戦の準備をしてもらい、俺はフィールド中央でアイさんを待っていた。

五十m四方のフィールドが準備され、周囲に被害が及ばないように四隅に防御結界と魔道士が配置されると言う物々しい中に一人で居ると、ちよつと緊張する。

アイさんは錫杖をもってなかったから、多分取りに行つたのだと思う。

対して俺が持っているのは例の錆びたポン刀。

力一杯鞘から抜かないと途中で引っかかり、相手に刃がぶつかる心配がないので訓練には最適だろう。

はつきり言つて負ける気がしない。魔力無しでも機動力だけで圧倒できる自信がある。

だが、せつかく手に入れた魔力の運用法も学ぶ必要があるから、彼女相手に練習させてもらう形になるだろう。彼女は既に俺の機動力も知っている筈だから、彼女自身も俺と同じ考えで

「お待たせいたしました」

耳元で囁かれた。

慌てて振り返ると、睫毛が触れ合いそうなトコにアイさんの顔があった。

俺は慌てて距離をとり　彼女がいつもと違う服装である事に気付く。

飾り気のない純白膝丈のキャミソールワンピース、その腰を太いベルトでキュッと締めである。

持つてる杖は錫杖ではなく……先生、ハルバードは杖に入りますか？

ふんわりおかつぱだった黒髪は腰にまで届く銀髪になっている。靴もライダーブーツみたいなゴツツイやつだ。

「……え？　マジで？」

「可愛いでしょ？」

頬をほんのり染めてクルリと一回転。輝く髪が、獲物を求めるかの如くざわめく。

「ないわー」

「……ファッションには疎くて……」

「じゃなくて！」

顔を赤らめてモジモジはじめたアイさんにツッコミを入れる。

「アイさんは変身とかしちゃうタイプなんですか？」

「変身は出来ませんが、封印解除は出来るんです」

成る程。よく考えれば教会の勇者による魔王退治の物語において、『魔眼の少女』が勇者パーティーを離脱するシーンはなかった。

「それにしても何を封印していたんです？」

「魔力の繊細なコントロールを覚えるために、自分の能力に封印をかけて訓練をしていたのです」

「じゃあなんで俺なんか相手に封印解いちゃうんですか」
「リュウジさんは自分の力を使いこなせていないようですし、腕慣らしのつもりで来て下さい。私も最初は抑えますし、魔眼は使いませんから」

そう言いながら構えるアイさんの長い髪が、風もなくゆらぐ。
今のは答えになっていない。だが彼女から見て、俺はそれほど才能を持っていると言う事なのだろう。俺はそれに答えるべく構え
そう言えば俺は魔力を考えながら戦った事がないから、どう構えればいいのか解らない。とりあえず腰を低くして刀を持つ手を引き、空の左手を前に出す。

魔力の制御は……よし、出来る。
アイさんを見る。彼女は初めて、優しい顔で俺に微笑んだ。

「さあ、どうぞ?」
「よし……行きます!」

そう叫び、一気に飛び込む。まずはお互いの実力の把握だ。
俺は矢継ぎ早に刀を叩きつけ、アイさんは全て斧槍で受け流すと、俺の最後の一振りをガツチリと受け止め、思い切り押し返してきた。

「うおっとお!」

俺は変な声をあげながら空中でバランスをとり、5mほど距離を開けた場所に着地。アイさんの周囲には既に光の槍が数本浮いている。

と、アイさんが手を上げた。

「ちょっと待ってください」

「なんです？」

「後ろを振り返らずに聞いて欲しいのですが、貴方の背後にも、この槍がある事に気付いていませんよね？」

自身の隣に移動させた光の槍を指す。

「……今もあります？」

「ええ。なのでその槍を魔力の目で感じ取ってください」

言われたとおりに感じ取ろうとするが、何も解らない。

「ゆつくりと。落ち着いて。額に第三の眼があるとイメージすればやりやすいとか」

ますます意味不明……いや、これは、俺のすぐ後ろに……

「アイさん」

「はい？」

「これは、壁では、ないんですか？」

多分、一〇〇〇本くらいある。

距離は、1mない。

「貴方にも、当たりますよね？」

「私は大丈夫です。防御の方法は解りますよね」

「なんと言うスパルタン」

「次は盾をイメージ。行きますよ？」

俺は振り返る。視界に広がる槍の壁。

ソレが一齐に、俺の方を向いた。

「うおおおおおおおおおおお……！」

シールド全開！ ソレにあわせて殺到した光の豪雨がシールドを削る！

せめぎ合う光と音に世界が満たされる。槍の1本1本が砕ける衝撃が全身に響く。

でも、これは……重いが………止められる！

現状を維持したまま周囲を感じ取る余裕がある。

アイさんが俺の背後、手の届く距離に1本だけ光の槍を置いた。俺は振り返る事無く槍を掴み、霧散させる。

「お見事です、警戒と防御はバッチリですね！」

アイさんの嬉しそうな声が聞こえる。

ここまで上手く出来ると俺も嬉しい。

漸く尽きた槍の雨に一つ息を吐いて振り返る。

「ありがとうよば」

頬にアイさんの斧槍の刃のない方、石突きが当たって変な声が出た。

いつの間に近づいていたんだろう。最後の最後で油断した。

だがアイさんは満足げだ。

「いきなりでココまで出来るのは十分凄いですよ」

笑顔のまま斧槍を振り上げる。俺は慌てて刀を頭上に掲げ、刀身にも手を添える防御体制をとって盾を展開。

振り下ろされた斧槍の衝撃が、身体を突きぬけ地面を砕く！

「ぐっは………」

思わず膝をついた俺の頭上から斧槍が退くが、俺は立ち上がれない。

何この娘の力パネーぞ？

「ですが、身体能力に頼りすぎるくらいがあります。今の攻撃でしたら腕で弾けるはずですよ」

「ちよつと……待って……」

「ちなみに私は二年前後衛でした」

後衛でこれなら勇者様はどんだけ強いんだ？ そんな勇者が半年かけなきゃ倒せない魔王も洒落になってない。

だが、俺なら出来るんだろ？ 出来るからここまでやってくれるんだろ？ だつたら期待には応えてやらないとな！

俺は呼吸を整え立ち上がる。斧槍が再び振り上げられる。

「次は身体の内側を流れる魔力を感じ取ってください。行きますよ？」

「おつよ！」

そして衝撃！ ドスンと腹に響いたが、上手く防御できた！

何コレ、さつきより威力が上がってるのに受ける衝撃が全然違う！ ヤバイ、これ何度も続けたらマジ腕で弾けるようになる。

この世界にきた最初の日、自分の身体の優秀さに感じた全能感と同じ気持ち湧き上がってくる。

「俺の成長ぶりがヤバイっすねこれ」

「楽しくなってきたでしょう？ 攻撃方法にも魔力を織り込む事を考えながら、色々と試してみてください」

アイさんはクルリクルリと回りながら距離を離し、再び構える。

「貴方のタイミングでどうぞ」

彼女のセリフが終わった瞬間に一気に接近、先ほどと同じように、だが魔力をこめて刀を叩きつける。

アイさんはそれを受け流しながら全周囲より光の槍を乱射してくるが、俺の盾は貫けない。

何度か繰り返して距離をとる。さて、どうしたものか。

貴方にも、当たりますよね？

私は大丈夫です。

そんなやり取りを思い出し、試す事にする。

再び接近、攻撃を続けつつ俺の背後からアイさん直撃コースの槍が迫るのを確認、彼女が俺の攻撃を流した勢いを利用して、アイさんの横をすり抜け背後に回り込めずに斜め後ろに行ってしまうが、左手から衝撃波を発生させ、彼女の背中を押す。フワリとスカートが舞った。お、眼福眼福。

バランスを崩して右足を前に出したアイさんの眼前、槍は回避不可能な距離に迫る。

勿論彼女はソレを防御魔法で弾くが、体勢を立て直す前に俺はアイさんの背中に刀を振り下ろす！

「ふっ！」

吹っ飛んだ。俺が。フィールドの端まで。

また石突きか！ まーた石突きだよ！

「後ろに回り込んで来るのかと思ったたら随分離れちゃったので、驚

きましたよ」

それ、褒めてるのか？

立ち上がると、結界を維持している魔道士のおじちゃんが声をかけてきた。

「兄ちゃんもまだ立てるってだけで十分凄いから。自慢していいぜ？」

苦笑で応えるとアイさんに視線を戻す。

威圧するようにゆっくりと斧槍を回しながらこちらに歩いてくる。歩く毎緩やかに広がる銀髪は、彼女の自信と力強さを強調するかのようだ。

うっわ笑顔なのにすげーこえー。

「そろそろ武器攻撃を織り交せてもよろしいですか？」

「石突きは武器に入らないんですか？」

「入りません」

アイさんは優しく微笑んだ。成る程、武器じゃないなら仕方ない。

「アイさん魔道士なんだから打撃は勘弁して下さいよ」

「私は自衛のために武器を手にした非戦闘員です」

「……ないわー」

こうして、俺とアイさんの模擬戦は、二時間にわたって続いたのである。

国境越えの時間

「おかえりリユウジ。なんか疲れてる？」

宿に戻った俺を迎えたのは、ベッドに転がって本を読むカグヤだった。

「訓練所で……模擬戦を……」

声を出すのもしんどい。

アイさんとの訓練によつてだいぶ魔力の運用法は身に付いたと思う。実際最後の方は俺の方が押す展開もあった。

もつとも彼女は最後まで他の魔法を使わなかったし、魔眼も使っていないから、最後まで俺の訓練に付き合ってくれていたんだと思う。

でももう俺の魔力と気力と体力は限界だ。

アイさん曰く『無駄が多すぎる』らしいが、それを言ったアイさん自身は常に光の槍を生成し続けていたのが納得いかない。

「明日は国境を越えるんでしょ？ そんなんで大丈夫？」

「……頑張る」

俺は自分のベッドに倒れ込んだ。カグヤが俺の方にやって来て、マッサージをしてくれる。出来た子だ。でも、なんか、きつくね？

「待ってカグヤ、それ痛い」

「でもコレがね、姿勢の、矯正に、おりゃ」

「ちよ、おふう」

「背筋、伸びる、らしい、よ？」

「待って、痛てえ」

背中の方が凄く痛い音を立てる。

背筋がピンとするとか今関係なくね？

でも、慣れてくると……痛てえ。

そんな事を考えながらも、いつの間にか俺は眠りについていた。

翌朝、心身ともに無事回復した俺は出店で朝食を取りながらイスルギに聞いた。

「ところで、国境の警備を抜ける方法はあるんですか？」

「正面突破で余裕だろ」

即答……ダメだこいつ。

「カグヤは正面突破とかどう思う？」

「国境線上で暫らく暴れて、追っ手の可能性を排除してから進んだ方が安全だよな」

や……役にたたねえ。

でも、他に方法があるかと問われれば俺にも案はない。パツと思いつくのはバイツくらいだが、アレに貸しを作ると後々面倒を呼び込む気がする。

かと言って今から闇ルートを持つ人間を探して信頼を勝ち取るに

は、相応の金と時間も必要だろうし……

「イスルギはやった事あるんですか？ 正面突破」

「何度もな。遠距離からの狙撃なんざそうは当たらんし、精密射撃は威力がないから弾いちまうよ」

「訓練して来たんでしょ？ ならリュウジも大丈夫じゃないかな？」

2人がそう言うなら、もうソレでいいのかな。

「運動能力には自信があるんだろ？ 100m辺り3秒ペースで走れば問題ない」

小学校時代50m走で9秒台だった気がする。いやでも今は馬より早いし……そもそも100m3秒つて、時速何kmだ？ むっ……とか考えながら適当に相槌をうっていたら、いつの間にか賛成した事になっていた。

「もうどうでもいいや。なにか準備はありますか？」

「荷物は少ないほうがいいだろ？」

手ぶらですね、判ります。

「朝御飯も食べたし、そろそろ行くっか？」

気軽に言ってくれるなあ……

国境近くまで行くと、後進に指導中のライデさんに遭遇した。そう言えばアイさんも彼がこっちに居るって言ってたっけか。
ライデさんなら相談が出来そうだ。

「おひさしゅうございやす、アイ様から聞きやしたぜ？」

「それでその、ちょっとお願いがありました」

「皆まで言わねえでも解りやす。俺の手の届く範囲の部下には既に言い含めてありやすんで」

流石ライデさん口調以外かつこいい！ でもアイ様とか言ってるから色々あったのかな？

折角だからちよつと聞いてみたりしよう。

「ところで俺が消えた後、バイツやアイさんにはどう対応したんです？」

一生懸命隠そうとしてたのに2人とも普通に気付いていたとか、結構キツイよね。

ライデさんも困ったような笑い顔になる。

「新人の引率だと思つてやしたら救国の英雄とその護衛を相手に講釈たれてたなんて、もう真っ青になっちまいやしたぜ」

あれは反則だよー。

「アイさんって別の偽名でも使つてたんですか？」

「勇者様と旅してたところに『アンプリファイア』ってえ名乗つていらっしやして」

アンプちゃんとかスピーカーの付属機器みたいな名前だ。
その他にも軽く話したが、長話は訓練の邪魔だろうと切り上げる。

「そいじゃ、よい旅を」

「ありがとうございます、ライデさんも頑張ってくださいね」

色々な意味でな。

ライデさんと手を振って別れる。

さて、上手い具合に別れの挨拶も出来たし、そろそろこの国ともお別れの時間だ。

「準備はOK？」

カグヤに問われる。

イスルギとカグヤは本当に手ぶらだ。もっともイスルギの背中には両手剣と言うにはあまりにも大きすぎる鉄塊がついているが。

俺は背負ったリュックの左右に剣と刀を引っ掛け、全力疾走中にリュックがぶれないようにベルトで背中に固定してある。

「いつでも大丈夫」

「あんま気張るなよ」

イスルギの言葉に笑顔で応える……ちょっと引きつつてるかもしれない。
作戦はこうだ。

カグヤが先行、俺が追いかけて、イスルギがソレに続く。

国境向こうの森に逃げ込めば終了。

それだけかよ。とは言いたいが2kmほど全力疾走するだけだし、彼らはいつも他に対策を考えたりしないそうなので、俺がゴチャゴチャけちをつけても不確定要素が増えるだけだろう。

「ちゃんと付いて来てよ？」

そう言っただけでカグヤはフワリと浮かび、次の瞬間解き放たれた矢の如く超低空飛行に入る。

「ちょ、おま、いきなりトップスピードとかありえん！」

俺は慌てて追いかける。カグヤはそんな俺の様子を見て減速してくれたので、すぐ後ろ、スリップストリームが感じられるほどの距離につく。スカートの中が普通に見えてるけど緊張で突っ込みいれる余裕もない。後ろにはイスルギも付いて来ているはずだ。

カグヤは徐々に加速して行き、俺もそれに釣られてペースを上げていく。

「まだまだ加速したいけど、いける？」

「大丈夫、行ける！」

カグヤは更に加速を続けながら国境を隔てるフェンスをそのままぶち抜き、俺もソレに続く。

次の瞬間各種魔法攻撃が殺到。各々既に防御展開を済ませているので問題ないが、降り注ぐ魔法攻撃を見ると、メンタルに何かこう、来るものがある。

確かに俺の盾を貫く攻撃はないし、そもそも当たる攻撃の方が少ない。確かにコレなら回避行動を取る必要はなさそうだが、避けられる攻撃をあえて避けて走り続けるのは楽しくない。

時々地雷を踏んでいる気がするが、爆発の衝撃も十分に軽減されているし、反応する前に次の一步を進んでいる。魔力マジ万能だけど、イスルギは大丈夫だろうか。

「地雷は避けろって、目の前で起きた爆発に突っ込むのはちょっとキツイ」

タイミング良く後ろから非難の聲が上がるが、文句が言えるのは無事な証拠。そもそも俺にそんな余裕がない事もご理解いただきたい。

「つか防御魔法がガリガリ揺さぶられる中でそんな事言ってもらえる余裕が凄いよ。」

「そろそろ森に入るよ。木にぶつかんないでよ？」

「了解」

「追っ手はまだ出てないから森で様子を見るぞ」

「おう」

なんで2人共そんなに余裕なんだと疑問に思いながら減速なしで森に突入、暫らく様子を探るが追跡部隊もすぐに撤収して行き、国境越えは無事成功に終わった。

「意外と……あっけないですね」

「向こうも俺達との実力の違いが解るんだよ。正面突破しちまうよ。うな奴は構うだけ無駄だっとな」

「成る程」

「つまり下手な考えは時間の浪費って事だ」

「……ぐっ」

「誰だって最初は怖いんだよ、仕方ないよねー」

「……ぐっ」

さて、遂に『教会』の勢力圏の外に出たわけだが、こちら側を支配する勢力は『キコウ』と呼ばれている。キコウの掲げるスローガンは『荒廃した世界に新たな秩序を打ち立てる』だが、それってぶっちゃけると教会と言ってる事が同じだ。

よつするに皆自分が世界の支配者になりたいだけなんじゃないかな。ホントに世界平和を目指すなら隣国とは協力関係を造るはずだろ？

キコウの特徴は現場へ委譲した権限の多さである。町ごとに法律の細部が違うので、部外者は下手な事をすると思われられる危険があるらしい。

何故このような事になっているのかと言えば別に深い事情がある訳ではなく、中央の独立都市に擦り寄った周辺の町が『俺に喧嘩売ると親分が黙ってねえぞ！』て言ってるんで『キコウ都市国家群』を名乗ってるだけで、防衛線の死守以外は殆ど連携を取っていないからだとか。

よくそれで独立を保っていられるもんだと思うが、逆に言えばその独立都市が教会をも脅かすに足る戦力を独自に抱えているって事でもある。

といったような話をイスルギから聞きつつ、キコウにおける最初の町『オオクニ』に向かった。

「うっわ何ですかあの警備体制」

「キコウの主要な町は大体あんな感じだ。出入りするだけで金がかかるし、中心部に入るには結構な金を積まなきゃなんねえ」

オオクニの町に着いたのは丁度日暮れ間近の頃だった。

外観を説明すると、中心部が高い塀に囲われており、その足元に広大な城下町が広がっている。塀の中に城があるかは知らんが、偉い人が塀の中にいる事は確かなんじゃないだろうか。

で、その城下町も結構な高さのフェンスで覆われており、教会の地方集落とのやる気の違いを見せ付けている。ありや教会も本気で攻めなきゃ落とせんわ。

「フェンスにも日替わりで色んなモンが流してあるはずだから、触るんじゃねえぞ？」

日替わりとか斬新過ぎて笑うしかない。

「リュウジは身分の証明が出来る物ってある？ 無いならここで証明書作ってもらった方が自由に動けると思っよ？ 幾らかお金がかかるけど」

「証明書？……教会の訓練所ではこの剣でどうにかなったんだけど」

バイツソードを見せてみるが、カグヤは判らないようなので、イスルギに見せてみる。

イスルギは鞘に描かれた模様を確認すると、感嘆の声を上げた。

「これは……！ すげえな！」

「え？ そんないい物なんですか？」

「キヨウカイ十二氏族が1つ、シオウ家の家紋、しかも不名誉追放印入りだ！」

「不名誉って……」

それ凄いの？ と聞くカグヤにイスルギが続ける。

「追放されたとしてシオウ、最高権力者の血族に関わる人間だから、国内じゃ誰もないがしろに『出来ない』。そして国外ではシオウ商会の関係者として映る。誰もないがしろに『しない』」

「商会……ですか？」

「十二氏族は国外へ出られねえんだ、何かあったら大事だからな。だからシオウは優秀な血族を追放つてえ名目で国外に出した。で、そいつらが法の網目を掻い潜るネットワークをつくつたんだ。他の氏族が気付いた時にゃ手も出せないレベルのな。そのネットワークの表の名前が『シオウ商会』で、噂じゃもう世界規模に拡がってるとも聞くな」

バイツの家すげえ。

「シオウの血族はプライドよりも実を取るんだろうな。だからシオウの追放印付きは証明としては究極の一品、選ばれた人間の証だ」

コレを気軽によこしたバイツさんすげー。

ライデさんはソコまで知らなかったみたいだし、英雄の護衛とか言つてたからバイツの正体までは辿り着いてないんだろうな。ホント色んな意味で頑張つて欲しい、ライデさんには。

「キコウの町でも外周部ならフリーパスだと思つていい。コレ見せたら中心区画にも入れる町はあるかもな」

「じゃあアタシ達はリュウジの従者つて言つといた方が安くあがるのね」

バイツソードすげー。

シオウ関係者とユカイな従者達、との名目で町に入った。
宿を探していると、イスルギが小声で聞いてきた。

「つけられてるな」

「この剣でも狙ってるんでしょうか？」

「んな事してばれたら消されちまうから、それはないと思うんだが
……」

気にしながら歩いているうちに人気の無い場所に迷い込んだこと
に気付く。

わき道に入ったりして撒こうとしたつもりが、逆に誘導されたの
かもしれない。

既に相手は隠れる気がない様で、まるで影から湧き出るように一
人の男が真正面に立つ。

上から下まで黒ずくめの戦闘服を身にまとった、どこから見ても
怪しい奴だ。

「相手は他に10人くらいいるけど……魔法でやっちゃっていい？」

「まてまて、極力騒ぎは起こしたくない」

どう対処するか考えていると、正面の男が話しかけてきた。

「リュウジ様でいらっしやいますか？ バイツ様より伝言を預かつ

ております」

なんだよ敵じゃないのかよ、それなら堂々と来いよ。

緊張の解けた俺は「はあ」と気の抜けた返事で先を促す。

「バイツ様よりのお言葉は『いつ頃からつけてたと思う?』です」

……おい。

「まじで?」

「はい。ご回答頂ければ幸いなのですが」

何コレ意味わかんない。

「この町に入つてすぐでしょ? リユウジも気付いてたよね?」

俺の代わりにカグヤが答えたので、俺も頷く。

イスルギはだまって天を仰いでいる。身長差から表情は見えないが呆れているんだと思う。

「『町に入つてすぐ』ですね。ご協力感謝致します。それとイスルギ様」

イスルギが視線を戻す。

「キョウカイは今のところ静観するつもりですので、事が動き出してもすぐに対応出来ないでしょうが、個人が独断で動く分には別でしょう」

「だろうな。解つてはいたが、一応礼は言っておこう」

「いえ、出すぎた真似だったようで」

イスルギは何に対して礼を言ったんだ？
彼の表情からは窺い知る事は出来ない。

「こちらからは以上です。よろしければ、宿の案内などいたします
が」

「え？ これだけ？」

「はい」

宿の案内はお断りしました。

オオクニの町 序

黒装束の案内を断った俺達は、今回も1階が酒場になった宿に泊まった。この世界ではこの形の宿がテンプレートのようなようだ。

ひとまず飯を食ってから今後を話し合う事にする。

「ウオツカ、ストレートで」

「ホワイトルシアンのリキユール多目お願い」

「カルアミルク、カルアぬきで」

三者三様に酒と料理を注文、待ってる間に今後の予定を話し合う。

「せっかく町に入ったんだから1日は自由行動にしたいよね」

「まあ俺も焦る旅じゃないから、それでいいのかな？」

「お前らの好きにすればいいんじゃないか？」

とまあ、そんな感じで話が進む中、頼んだ飲み物が運ばれてくる。てか普通に通じたけど、この世界のカルーアってホントにコーヒーリキユールなんだろうか。

と、カグヤがテーブルを叩いてウェイトレスを呼び止める。

「ちょっと！ なんでミルク2つ？」

「お嬢ちゃんに酒は早いよ」

ウェイトレスさんが笑って言う。

「いやいや地元では普通に飲んでたし！」

「はいはい」

食いつくカグヤを適当にあしらって移動してしまった。

「これだから……これだからキコウ都市国家群は……っ！」

カグヤさん涙目。

「涙拭けよ、俺のミルクやるから」

「アタシのと同じじゃん……」

もしや彼女は酒が飲めなくなるからこっちに来たくないと言っていたんだろうか。とか思ってたら隣の席の見知らぬマッチョさんが話しかけてきた。

「お譲ちゃんもあんまり小さいうちから酒飲んでつと、悪い奴らにさらわれっちまうぞ？」

そう言いながらそつと自分の酒を差し出す。ビールっぽい香りがフルーティーだ。

てか悪い奴らにさらわれるなら飲ますなよ。

「おっちゃん……あんたいい人だね！」

カグヤは両手を組み、しなをつくって礼を言つと一息に酒をあおった。いい飲みっぷりだが物凄くオヤジ臭い。

「くっはあー……あ後味につがいぞコレ？」

カグヤさん更に涙目。マッチョさんの酒は個性的なタイプだったようだ。

マッチョさんは俺とイスルギにも勧めてくれたけど俺は飲まない。

イスルギは礼を言って受け取ると、カグヤ同様一息であける。こちらもまたいい飲みっぷりだが、イスルギがやると凄く様になる。見ていて思ったのだが、イスルギは俺の夢見た『カッコいい大人』を体現した存在なのかもしれない。

俺はバイト先なんかではおばちゃん達から可愛がられる『可愛い大人』になっちまったから。

……まあ女性に媚売って力仕事を任せる全く新しい男の形を追求していたから、自業自得なんだけどな。

「……ほう、これはたまらんな」

イスルギはマツチヨさんの酒が気に入ったようで、ウォツカをかるくあけて自分でもそのビールを頼む。

ソレを見ながら漸く復活したカグヤは、

「ありえない……」

と、驚愕の表情で呟く。

俺は、そんなやり取りを見ながらチビチビとミルクをすすっていた。

俺は酒を飲まない。

この世界に来てから一月足らずのうちに暗殺されかけたと言う事実が、常に身構えると、ささやきかけてくる。

寝込みを襲われた理由は、俺が無能力者を自称しながら表舞台に立ったからであり、今は魔力を持っているし、今後は大それた事をしようなんて思わないから、同じような理由では襲撃を受ける事はないだろう。魔力がある今であれば、アレと同様の襲撃に対処的

確に対応する自信もある。

だが俺は、自分を超越した存在が幾らでもいる事を知った。そして血を見る事が苦痛であると言う、この世界において致命的であろう弱点を未だ克服していない。

だから、酒に酔った状態で襲われる事を考えてしまい、絶対に飲めないんだ。

深夜。眠っている2人を起こさないように部屋を抜け出した俺は、宿の外に出る。

1階の酒場は、残っている客が殆どいない状態だった。

どこかで酔っ払いが喧嘩をしている雄叫びが聞こえるが、気にしないでおこう。

「黒装束さんって、俺を監視しているんですか？」

虚空に呟く。

反応がなかったらどうしようなんて考えたが、すぐ側に何らかの魔法力が集まるのが解った。

「現在リュウジ様とお話させていただいております我々は、主からは蜥蜴と呼ばれております。以後、お見知りおきを」

僅かなハウリングの後、中性的な声が聞こえてくる。

蜥蜴って確か、バイツが誘拐犯を追わせようとした時にちょうど

居なかったあれか。

我々って事は複数存在しているんだろうか。

「監視と言うわけではありませんが、我が主はリュウジ様が考える以上に、貴方の周辺を気になさっておられます」

応えるセリフの発生場所に人の姿はない、そこからは漂う魔力が感じられるのみだ。

姿無き彼もまた、俺の敵わない存在なのだろうか？

「なぜ、それほどまでに？」

「お答えいたしかねます」

「俺が男に惚れられるくらい可愛いからかな？」

「お答えいたしかねます」

「冗談の通じない奴だった。」

まあ世間話が目的って訳でもないのでさっさと本題に入ろう。

「ところで、俺は貴方達に頼る事を許されるんでしょうか」

もうバイツの掌の上で踊るのは諦めようと思うのだ。世界規模の情報網を持つ相手に、何の後ろ盾もない俺が対抗できるはずがない。それならいつそ利用してやるほうがまだ。

その後どうなるかは判らないが、どうせ俺が元の世界に戻れば全てチャラだ。

最悪の場合でも奴の間者にしてもらう方向に交渉すれば、命までは取れないだろう。

そのためにまずは、相手がどの辺りで線引きをしているのかを確認しなければ。

「我々はあくまであなた方の動静を主に伝えるのみ。ですが、シオウに害を成さない事案であれば、手際の折に家紋の所有者のため、情報を提供する事が許されております」

「うーん、ホントに頼っていいとは思わなかった」

それだけでも十分すぎる。

他に何を聞くべきかと考えていると、どこぞでの喧嘩の叫び声が、悲鳴に変わった。

俺は通りの向こうに眼をやる。ちょうど喧嘩に負けたと思しき奴らが、悲鳴を上げながら路地裏より這い出てきたのを確認してしまつた。切り傷がありそんな奴もいるし、喧嘩の範疇を超えている。

「ところで、やりすぎてる喧嘩の仲裁を手伝ってくれたりは、しないですよね？」

「アレに関わる事はお勧め致しかねます」

「ですよー」

とはいえ見てしまったからには何とかしてやりたい。今の俺は一般人に殴り負けるほど弱くはないはずだから。

俺は喧嘩の現場に 向かおうとして、這い出てきた男達が背後より伸びてきた触手に絡めとられて路地裏に消えるのを見てしまった。

「えーと……化物とかがいる世界観でしたっけ？」

「アレに関わる事はお勧め致しかねます」

そんな事言われても流石にあれを見なかったことには出来ない。路地裏に駆け込む。

「……おおっ」

ヤバイ血がいっぱいある。ひとまずココは深呼吸して落ち着こう……って臭いやバイ！

「生きているのが危険因子です」

それってつまり被害者は全滅って事ですね。

蜥蜴さんのありがたい忠告に気を引き締めて周囲を見回す。ちょっと吐き気がするけど俺は大丈夫、大丈夫、大丈夫だ。

『……………』

血の海の向こうでうつ伏せになっていた男が身体を引き起こす。他に原型の残ってるのはいないしコイツが犯人か？ それにしちゃボロボロなってるが。

男は四つん這いのまま悲壮な顔でにじり寄ってくる。ゆっくりと助けを求めるように右手をこちらに上げ、バチャリバチャリと水音を立てる。聞き取れない音量で何か言っている。多分『助けて』的な事言ってるだろうが、むしろ俺が這い寄るお前から助けて欲しい。俺は彼が前進するのと同じペースでジリジリ後退。やだよアレ俺触りたくねえ。

と、彼の手が滑り顔面から地面に　　ゆおお足飛んできたなげえ！
頭上に生成した盾に男の踵が突き刺さる。踵から出た骨っぽいピツクが高速振動して盾の表面をガリガリ削る。

「何コレ！？ 何コレ！！」

男は四つん這いそのまま顔はこちらを向いており、彼の右足がその背中の上を通って俺に踵落しを繰り返してきた訳だが、当然人間の身体が出来る攻撃ではないし、奴と俺との距離は4mは空いてい

る。

どうしたものと手を出しあぐねていると、彼の身体が脈絡無く崩壊。

「ちよ、え？ おい！」

どさりと音を立てて落ちた身体は、細かい砂となって散る。

『俺……何で……』

が、彼の辞世の句でした。生存者はなし。犯人は塵となって消失。何コレ？

「ここって化物とかがいる世界観でしたっけ？」

まともな反応は期待していなかったが、予想に反して蜥蜴さんは答えてくれた。まともかどうかは疑問が残る物言い。

「プレートが1枚落ちています」

犯人だった砂山に確かにあった。拾う。

何かの略称と思しき単語数文字と、NO 298と言う数字が刻んである。

「これは……ID？」

「内容を知りますか？」

言い方がおかしくないか？……いや、蜥蜴さんは全て知っていて俺に『首を突っ込む気か？』と聞いているのだろっ。

それ誘い受けて言うんだろ？ じゃあ突っ込むっ。

「お願いします」

「遺失技術研究所、亜人化実験室、実験番号298号」

「えーと、何？」

聞かなきゃよかつたと思うが、口は自然に疑問を訴えていた。

「研究所から脱走した改造人間のプロトタイプです。298号は変形タイプとしては珍しく精神面が破綻しなかつたのですが、細胞の劣化が激しく長時間の単独行動は不可能でした」

「……何故、そこまで詳しいんです？」

「シオウは全てを知っている。それだけの事です」

「あんたらのやってる実験の被害者なのか？」

「いいえ。シオウは出資していない案件、関わりのない案件です。このような研究成功するはずがありませんし、成功しても国民感情を考えれば公表がためらわれます。先の読めない愚かな連中が自分から弱みを作っているにすぎません」

「それなら！……それなら……」

止めさせるべきだ。と、言いたかつた。こんなイカれた人体実験即刻止めさせるべきだ。だが、返ってくる答えが予想できてしまつて……

「シオウには害を成さない事案ですから」

そうだよな、解つてたよ。君子危うきに近寄らずって、言うもんな。

わざわざ何の得にもならない事に首突っ込んで、痛くもない腹探られるのはむかつくしな。

でも言うなよ。

「……もしも俺が、その研究を叩き潰してみたいって言ったら、どうします?」

「何もしませんが、貴方はシオウの剣を持っている。シオウの名に害となるような失態をされた場合、目撃者を含めて全てを『なかつた事』にするでしょう」

「成る程。バイツの剣を持たずに行けばいいって事ですね?」

ちよつと考える気配がする。あれ? 違つのか?

「……我々の手助けは期待しないでください」

OK許可が下りました、さあ行くつうすぐ行くつう。

たとえ神が許しても、俺はこつ言つゝの絶対見逃しておけないし、俺には十分な力がある。

勇者になりたいなんてもう思つてないが、力があるのにこんな不快な話を見過ごすほど、この世界が嫌つて訳でもないから。

手ぶらで出てきていたので部屋に戻つて準備をしようかとも考えたが、寝ている2人を起こしては面倒なので、例のポン刀を魔法で手元に『転送』してみる。

簡単に成功。なんだかんだでこの世界に来てからずっと一緒にあった物なので、相性がよかつたらしい。これで中身が錆び付いてなきや最高なんだが……

「リュウジ様、武器はそれだけでよろしいのですか?」

「俺、どうしても血だけはダメなんですよ。他に持つてる武器もないし」

「……それでよく殴り込みなんて考えますね」
「なーに、いざとなったら撲殺ですよ！」

闇に紛れて施設の研究設備をぶっ壊すつもりだから、精々警備員が数名いるだけだろ？

国境警備の兵隊と民間施設の警備員、どっちが怖いかなんて考えるまでもないだろう。

国境を越えた際の経験から考えると、一般的な兵隊は確実にライデさんより“かなり”弱い。

そして、俺はあのライデさんと戦ったのなら休憩なしで100戦全勝する自信がある。

これでライデさんも実は隠された力を　とか言われたら俺は泣くが、流石にそれはないだろ？……ないと思いたい。

大体初めての戦闘は見てただけだし、暗殺されかけたときは肩にナイフが刺さった状況からのスタートでもうどうしようもなかった。アイさん本気モード戦は、ラスボス倒した後の勇者パーティーのキャラと戦うイベントバトル、エクストラステージだからむしろ善戦したほうだ。

訓練後に真っ白になって燃え尽きてたら、バトルフィールドに境界張ってたおじちゃん達に『アンタマジですげーよ！』って囲まれて握手まで求められたから間違いない。

なんか思い返すと勝ち星が1つも無いが、俺は別に弱い訳じゃないんだ。

そりゃこつちに来た頃に考えてた『ヒーローになりたいな』なんて夢はもう丸めて捨てたが、それは流石にそこまでは上手くいかなかったってだけで今は魔力も身体能力も優秀なんだ！　だから俺は

「リュウジ様？」

「……はい？」

ちよつと冷静さを失つてた。
落ち着くために深呼吸をしておこう。

「気が逸るのは解りますが、今から貴方が行おうとしている事はオクニへの逆行行為になりますから、失敗は許されません」
「……申し訳ない」

気を引き締めなおそう。よし、大丈夫。

「最悪の事態を想定せねばならないので、我々が案内できるルートは最良の物とはなりません」

「解ってます」

「また、リュウジ様の侵入後、我々は『貴方ごと消し去る』以外のあらゆる関与をいたしません。よろしいですね？」

「はい」

「では、こちらへ」

俺は、蜥蜴さんの声に導かれるままに移動を開始した。

オオクニの町 フリーフィンゲ(前書き)

うじっ?

オオクニの町 ブリーフィング

俺は蜥蜴さんの声に従い、人気のない裏通りを進む。これはもしかすると、もしかしちゃうのかもしれない。なんて考えていると、予想していた物が見えてきた。

「ちょっと待ってもらえますか」

「いえ、ココが目的地でしたから。何かありましたか？」

目の前にそびえ立つ壁を見上げる。都市中央と外周部を分けるこの巨大な壁は、ざっと見たところ高さ10mくらいか。

「もしかして、この中に進入するんですか？」

「そうですね」

蜥蜴さんは当然のように言う。

……もしかしちゃったよ。

「この壁を越えて？」

「勿論ご自身の手で越えていただきます。脱出の際は全ての手はずをご自分で整えていただきますから、侵入ともなれば尚更です」

そりゃそうだよな。それが出来なきゃ間違いなく失敗に終わるんだから。

「壁を登って右手をご覧頂けば3階建ての建物が一つだけ見えます。そちらが目標の施設となっております。鍵はかかっておりませんので正面より入っていただければよろしいかと」

鍵がかかってないとか随分と無用心だな。

「地下に研究施設が隠されておりますが、リュウジ様は地下へ入るための認証を突破出来ませんので床を破壊していただきます」

「……何か凄い解決策を提示された気がする」

「床を破壊する際は所長室の中でお願ひします。それ以外の場所で破壊活動を行うと警報が作動しますので、脱出に支障をきたす恐れがあります」

「何でソコまで調べ上げてんの？」

「シオウは全てを知っているのです。所長室の場所は正面玄関より入ってすぐの場所に地図がありますから、それで確認してください」

すげーマジすげー。今後シオウさんとお付き合いをする際には、まな板の上の鯉の境地で向き合おう。

「地下1階は研究施設。文書やデータは全てこの階層にありますので、危機管理マニュアル通りに破壊してください。その破壊方法ですが、メイン研究室入って右手の緊急用ボタンを、3回連続して押してくださいさるだけで十分です」

「なぜ3回も押すんですか？」

「1度目は地下2階の危険を排除します。2度目で資料室内部の緊急焼却、3度目はデータクリスタルの緊急破壊用プレス装置を作動させます」

成る程、重要度の低い物から順に証拠を消すシステムが置いてあるって訳だ。わざわざテメエで用意する辺り自分が何やってるかよく解ってるって事か。

「地下2階は被験者の隔離施設。緊急用ボタンを押してから15分待ってから侵入してください。全ての処置が終わった後ですので

「ちよつと待つて？ 被験者つて」

さつき塵になった男みたいな奴がまだいるつてのか？

「既に全員が実験を受けた後ですから」

「だから待つてつて！ そうだよ、地下2階を安全にするボタンつてどんなボタンだよ？ おいおいおいおいちよつと待つてくれよ……」

そうだよな極秘研究だもんな、生きた証拠なんてあつても邪魔なだけだもんな、でもだからつて俺にそのスイッチを入れさせるのは勘弁してくれよ……

「……よろしいですか？」

暫らくの沈黙の後、蜥蜴さんが聞いてくる。

言いたい事はよく解つてるが、それを真正面から俺に叩きつけてもらわないと、今の俺はダメだ。

自分で好き好んで余計なトコまで頭突つ込んで、揚句の果てに機密情報聞いてから全力で逃げに入ろうとしてる。

悪い事は許さないとか言つてからソレはないだろう？

「お願いします……」

「緊急用ボタンを押すと地下2階では被験者を抹殺するための設備が作動します。その中には各種神経に作用するガスも含まれておりますので、リュウジ様ご自身の身の安全のためにも、換気が終わるまでの15分をお待ちいただきます」

俺はそつと手を上げる。質問していいですか？

「どうぞ」

「何人が救出する訳にはいかないですか？」

もし、それが許されるのであれば、せめて1人だけでもいいから

「現在生存している被験者は52名」

この入り方、蜥蜴さんは俺のささやかな希望を打ち砕く準備が万端なようだ。

「内38名は殺戮衝動に飲まれ理性を失っており、回復の見込みはありません。彼らが外界に解き放たれた場合、少なくとも一人頭10名前後の“正規兵”が命を失うでしょう。民間人の犠牲は想像もつきません。貴方はソレを望むのですか？」

その中性的な声は、俺を諭すように、優しい口調で現実を突きつける。

「残り14名中5名は肉体が理性を支配しており、回復の方法はありません。彼らは誰かにその身体を止められるまでの間、泣きながら知人を殺して回るでしょう。貴方を襲った脱走個体を見ましたよね。貴方はアレを望むのですか？」

救いようがない。救いようのない話だ。

「最後の9名は特殊な薬剤により肉体を強引に維持しており、回復の方法はありません。救出後3日で全員が塵に還るでしょう、貴方も見たように。ご理解いただけましたか？」

本当に皆救えないんだな。もうどうしようもない、碌でもない話だ。

「よく解りました、ありがとうございます。俺の手で悲劇を終わらせることが出来る事を、喜ぶべきですよね」

「これは本来リユウジ様が背負う必要のないものです。その気がなくなつたとても誰も攻める事はありませんので、あまり無理はされませんように……」

とはいわれても好き好んで首突っ込んだからなあ。ココまで知ってからやっぱいいやで済ますのは俺のアイデン……何だ、まあアレが許さない。

そんなつまらないプライドに、しがみついたためって理由で積極的に関わるのもどうかと思うが。

「では説明を続けさせていただきます。地下3階には亜人『狂王の娘』と初代研究所長が確認されておりますが」

「ちよちよちよちよつともう一回待ってもらっていいですか!？」

いきなり出てきた名前に俺は驚きを隠せない。

狂王の娘。

遙か昔、小さいながらもそれなりに暮らす平和な国があった。

王には優しく勇敢な息子と見目麗しき娘達がいたと言う。

その平和はある日、突如王が狂った事により崩れ去る。

狂える王は自分の末の娘を生贄として邪神を召喚した……のだと伝えられるが、この世界に生贄使って邪神が呼べるなんて魔法があるかは怪しいので、実際は何か別の理由だったのを後世に書き換えられたのだろう……話を戻す。

邪神は狂王を喰らうと、生贄であった末の王女以外の全ての人間

を襲い、国は一夜の内に蹂躪された。逃げ延びたのはただ一人、狂王の息子である王子のみであった

で、この王子様が七難八苦の末に邪神と相打ちになって終わりなのだが、あんまりハッピーエンドじゃないこの物語は、はつきり言っただけで人気がない。

『邪神』とか『生贄』とかの単語が物語から重みを奪っている子供達は言っていたが、俺からすれば黄金戦士も死霊騎士も同じ穴のムジナだ。

末の王女様は邪神から呪いを受けて『滴り落ちる血の1滴毎が邪神の眷属として生を得る』と言う女王蟻のような存在となり、更には不老不死にまでされてしまい、物語の最後に王子様同伴の勇者が聖剣で彼女を刺し貫くまで、ずーっと絞られ続けている。

本当に最後だから兄貴が邪神と相打ちになったのを見届けた後だよ？

更に言えば邪神が消えて呪いが解けたのに絞られ続けてんの。死ぬ前くらい止めろよ。

この最初から最後まで救われない末の王女様が『狂王の娘』である。

「狂王の娘って、勇者に刺されて成仏したんじゃないんですか？」

キラキラ光って消えたのが最初で最後の見せ場だったのに。

「聖剣の力で無に還ったのですが、無に還った程度では彼女の不老不死は打ち破れなかったのでしょうかね」

その程度じゃ死ねないってどんだけ不幸に見舞われてんだよ王女様。

「その後、無力かつ不老不死であり天涯孤独と言う大変使い勝手の良い王女は、高値で売られてまわり、現在は研究材料としてココにおられるのです」

「……もう『何でソコまで知ってるんですか』とか言いませんよ？」

「シオウの手元には必要のない商材であったと記されております」
「関わっても得のない案件ですもんねー」

なんかもう蜥蜴さんの考え方も慣れた。

「狂王の娘と初代所長への対応はリュウジ様におまかせしますが、我々に関与を求める事はご遠慮ください」

そついや王女様の他にもう一人いるんだっけか。

「その所長さんとやらは一体何なんです？」

王女に惚れて退職後にラヴラヴ新婚生活を満喫中とかだと助かるんだが。今ならお爺ちゃん相手でも安全に抱えたままこの壁越えられるよ？

「100年ほど前に自らを最初の実験台とした元人間です。最初で最後の成功事例であるものの、結局は破壊衝動に耐えられなかったとか」

はい手遅れでした。王女様マジ不幸。

「暴れる初代を狂王の娘と共に最下層に閉じ込めてから、肉眼で中を確認したものは居りません。判っている事は『2つの生物が存在

している』、ただそれだけです」
「じゃあ……ソコは近寄らない事にして」
「ソレは困ります、この壁の向こうには商会のお得意様も大勢いらつしゃいますので、お客様に万が一の事でもあれば取り返しが付きません」

こいつらホントに職務に忠実だ。

「よって最下層の2人の亜人、特に初代所長に対して何らかの決着をつけてください」

「どうやって?」

「人類最強のハルバードを受け止める今のリュウジ様でしたら、雑種の1匹ぐらい問題ありません」

だよね! そーだよ俺強いんだよね? 今までいいトコなしたつたのは相手が悪かっただけ! 魔力を手にした今この世界の上位1000位くらいには

「リュウジ様?」

「……大丈夫です」

何かもうトラウマになってるっぽいよ。

「我々からの説明は以上で終了となりますが、疑問点などございましたでしょうか」

「一応聞いておきますけど、壁の向こうで呼びかけても応えてはくれないんですね?」

「完全に手詰まりだと仰っていただければ、いつでも研究所ごとリュウジ様を『なかつたこと』にすることが出来ますが」

それ以外はオールスルーなんですよね、とてもよく解りました。頭の中で今のブリーフィングを反芻する。

……うん、そんなに難しい“行動”は求められていない。

「そつだ、ボタンを4回押すとどうなるんですか？」

「地下施設を崩壊させます」

……おおう。地下が崩壊って事は上の施設も崩れるって事じゃん？
流石に生き埋めは勘弁して欲しいな。

「他に質問がないのでしたら、我々はおいとまさせていただきますが……」

ま、俺一人でも何とかなるだろ。強引に軽く考えると頷く。

「では、ご武運を……」

ソレを最後に蜥蜴さんの魔力は霧散した。

……って人類最強？ え？ …… ああ、元気付けてくれたのか。いい人だな。

ひらりと弧を描き壁を飛び越える。弧の頂点に達した辺りで右の建物を確認。

2階建ての建物が並ぶ中で、2件ほど先に3階建ての建物がポツリと1つだけ建っているのが見える。あれがターゲットか。

続いて下を確認、下に人はいないようだ……念のため重力を軽減して落下軌道を制御、側の建物の屋上に着地。

もう一度下を確認、やっぱり誰も通らない。周りの建物を確認し

てみると、どうやらこの辺りはオフィス街的な場所らしい。今の時間は午前1時位だからもう皆退社した後なのだろう。

……こつちの世界にはデスマーチとかないよね？

安全を確認した俺は建物から飛び降りると、研究所に向かって走る。

走りながらも周囲を警戒する事は忘れないんだが、本当に誰もいない。こんなに簡単だと拍子抜けしちゃうな。

目的の建物は広大な敷地の中心にポツンと1つだけコンクリの建物が建っており、周囲をフェンスで囲われていた。敷地内には池や運動場なども整備されており、心身共に充実した研究ライフをサポートしてくれそうだ。過剰な敷地面積がそのまま地下施設の規模を表しているのだとすれば、探し物は結構時間がかかるかもしれない。

俺は正門を探してフェンス沿いを進み……お、ココの正門にだけは警備兵が立っている。やっぱり後ろめたい事やつてる奴は違いが出ちゃうんだな。

警備兵のすぐ後ろの看板には確かに『遺失技術研究所』と書いてある。ココで間違いはないようだ。だが警備の士気はかなり低そうだ。

国を挙げて遺失技術を研究する教会の研究者が、ライターを見て新発見といって大喜びするのだから、都市国家群の一つでしかないオオクニの研究所など、なんの成果も挙げられまい。

それでも教会の最前線の町と違って、彼はちゃんと外を向いて立っている。これは凄い事だと思う。彼のプロ意識があればこそ、俺は立ったまま眠ると言う高難度の職人技を眺めることが出来るのだ。……そう、彼は眠っている。目の前に立っても気付かないくらい熟睡している。

めっちゃ膝かっくんして！。

すぐ側の詰め所にいる交代要員も眠っている。

フェンスの上にセンサーなどが仕掛けられている様子もないし、

監視カメラ系アイテムも作動していないことを確認すると、真正面から侵入。正面玄関のドアを押し開け、中に滑り込んだ。

オオクニの町 プリーフィング（後書き）

次で決着。

オオクニの町 研究施設襲撃

当然の話だが研究所内は静寂に包まれていた。

俺が照明魔法で辺りを見渡すと、所内の見取り図はすぐに見つける事が出来た。

見学コース案内なんかもあって、大手企業の自社工場っぽい感じだ。『過去の解明が未来を作る』とか『明るい会社を作る5つの力』とかそれっぽいスローガンが張り付けてある。

社会人は大変だな。

とりあえず所長室を確認すると直行、ドアを開け……鍵かかってるよ？

流石にドア破ったら警報が鳴るだろうし、どうしたもんだらう。

………閃いた。

ドアの周囲に魔法的防御機構があるか確認………ない。

鍵穴から魔力を流し込み内部構造を確認………へえ、鍵ってこう言う仕組みで動いて………あ、開いちゃった。

………魔力マジ万能。

もうちょっと手順を踏んでかつこよく開けるつもりだったんだけど………見てる人もいないしまあいいだろう。

所長室に侵入。まずは危険因子の有無を確認する。本棚の裏に地下への扉があり、それには強力かつ隠蔽性の高い結界が仕込んであるが、それ以外は何もないようだ。

高級そうな備品とかあるけど、下手に持ち出して足がついたらシオウさんに消されかねないので諦めよう。

カーペットを引っぺがして床を露出させるが、ノリと勢いでぶち抜いたらバッドエンドになる気がするので部屋に細工をする。と言っても周囲に真空の壁を作っただけなんだが、音が伝わらないようにするのって、コレでいいのかな？

大丈夫だと信じて床に刀を叩きつける。勿論魔力コートで一撃必

殺の破壊力を持たせた痛恨の一撃だ。

轟音と共に侵入可能なサイズの裂け目が出来る。その向こう側に光は見えない。成功したけどなんかメツチャ響いた気がする。何が悪かったんだろう、それとも気のせい？

何とか警報は作動しなかったようだし、どっちにしる後戻りは出来ないんだから、さっさと裂け目から地下に突入しよう。

俺は暗い穴に飛び込んだ。

地下に降り立った俺は手元の照明魔法で周囲を照らす。

どうやら通路の一路のようだが明かりが点いていない。これがココに誰もいないことを意味してくれていれば助かるんだが。

道なりに歩く。それぞれの扉に部屋の名称が書かれているので、一つ一つ確認していく。

連絡室、上下階段、事務室、立会室、会議室、資料室！

資料室の扉も鍵がかかっていたが、所長室と同じ方法で開ける。

中には大量の紙が積み上げられていたが、手近の1枚を見るだけで十分だった。

実験番号619号は、実験番号501号との共生実験中に、501号に襲い掛かるも反撃を受け死亡、捕食されました。やはり2階施設の拡張工事が

OK、とりあえず部屋ん中の物は紙粉になるまで刻んでから次行こう。魔力マジ万能。

資料室、休憩室、仮眠室、研究室C、B、A……メイン研究室。

鍵はかかっていたいなかった。中はアニメや漫画の作戦指令室のようになっている、奥が大きなガラス張りになっている。ソコに立てば何が見えるかは想像がつくので近寄る気はない。

左に眼を向けると、記録用と思しきクリスタルが箱詰めになされており、ソレの周辺の機械の形状から察するに、プレス機能を持った

箱なのだろうと推測する。

右に眼を向ける。壁から小さな赤い鉄製のボックスが突き出しており、『キケン！ 接触厳禁』と書いてある。この世界でも注意を喚起する場所には、黄と黒の虎柄が使われているのか。

俺はそのボックスをこじ開けると、中を確認した。ボタンがあり、その下にタイマーがついている。

表示は1500。

一つ、深呼吸してから、迷わずに、3回殴った。後ろから、クリスタルの碎ける異音が響いた。

タイマーがビープ音を鳴らした。

表示は0000。

あっという間の出来事。

ソレを確認した俺はメイン研究室を出ると、階段で地下2階へ移動した。

階段自体は地下3階まで作られていたようだが、途中でコンクリートの海に沈んでおり、侵入が出来ないようにになっていた。

見取り図によると、3階に到達するにはこの階層を縦断して、向こう側の階段を使う必要があるらしい。

警告表記のあるドアを押し開け、中の様子を窺う。

異臭がきつい。中は真っ暗で、何も聞こえない。

照明魔法を使い、周囲を確認する。

左右に檻がある一直線の通路は、俺の照明では先を見通すことが出来ない。

俺は檻の中を、一つ一つ確認しながら前進。

それぞれの檻の上にナンバー付きのプレートが掲げられている。

この施設では、老若男女の区別はしないようだ。

「つぶつぶ……ふう……」

人がいる！ 生きてる！ あそこだ！

俺は全力疾走！ 声のした檻に NO・501 急停止した俺の目の前で又メったアイスピックが（いや、これは腕の骨だ）踊り狂う。

中にいたのは、俺と同じ年齢くらいの女性だった。

地に倒れ臥したその背中からはえた腕が、俺を捉えようともがく。俺の事を見上げて笑みを見せると、ポツリと言った

「お腹が……すきました」

彼女は伏したまま後退する。背中腕が抗議するように床を叩く。俺は彼女の前にしゃがみこんで聞いた。

「……お姉さん。貴方のお名前は？」

「ふふふつ。こんな格好じゃ、恥ずかしくて言えません」

おっとりとした優しい声。

背中腕が振り回される。彼女はどこまで正気なのだろう。

「何か出来る事、ありますか？」

「よく、燃えるんです」

「燃やしちゃって、いいですか？」

笑っちゃうよな？ 笑うしかないよな、このふざけたやり取り。

彼女もずーっと微笑みっぱなしだ。

「ふふつ……助かります」

地下3階。

扉が硬化したゲルみたいな何かに覆われていたので、ポン刀のフルスイングで扉ごとぶち抜く。

中は想像していたものとは違い、照明が稼動した明るい小部屋だった。

この小部屋の向こう、反対側の扉を開けた先が終着点のはずだ。壁には隙間もないほどびっしりと細かい文字が書き記されており、ところどころに殴りつけたと思いき穴があいている。

読めるのかと思つて壁の文字を確認してみるが、達筆が過ぎる上、書いた文字の上に更に何度も書き重ね続けたらしく、解読不可能な物となつていた。

初代はココに閉じ込められてなお、独自に研究を続けたのだろうか。

破壊衝動を抱えながら1部屋全ての壁に何重にも書き記すほどの研究を？ そんな馬鹿な話があるものか。

見取り図によれば、この部屋の向こうには広大なホールが広がっているらしい。研究材料として流れてきた王女を、せめて広い部屋で飼つてやろうと言つ心遣いだつたのだろうか。

どんな考えがあつたにしても、全て無駄だつた事には変わりはない。俺は、ホールへの扉を開く。奇襲を警戒していたが、杞憂に終わったようだ。

ホールの最奥に置かれた玉座にポロポロの服を纏つた初老の男性が座り、明らかに不機嫌そうな顔でこちらを見つめていた。俺との距離は20mくらいだろうか。

初老と判断したのは白髪の色からだが、顔つきをよく見ると非常に若々しい。亜人化の影響つてやつなのだろうか。

「貴方が初代の所長さんか？」

男の足が苛立たしげにリズムを刻む。

彼の隣には100年もの間監禁されていたとは思えないほど鮮烈な、真紅のドレスを着込んだ女性がいる。

足を投げ出して地面に座り、首を傾けて虚空を見つめるその視線は、何も認識していないように見える。まるで人形だ。

と、男が肘掛を叩き、勢いよく立ち上がった。

「わしの研究を奪いに来よったか！」

どうやら所長で合っているようだが、交渉は出来そうにないな。

「違う。処分しに来たんだ」

俺の答えを聞いているのか判らないが、所長は髪を振り乱しながら叫ぶ。

「貴様らに何が！ 何が！ 何が解る！ わしがおらねば何も解せぬ屑共が！」

彼がいなくなって100年間成功事例がないって事は、まあ所長さんのセリフは正しいんだろうな。そんな所長は天を仰ぎ、室内を揺らす勢いで雄叫びをあげている。

「わしの成果を奪う事は許さん！ 殺す殺す殺す！」

所長は一人でテンションを加速させて行く。

その隣で虚空を見つめる女性との対比が、ますます彼の滑稽さを際立たせる。

最早言葉にならない感情を奇声としてあげる所長は、頭を掻き筆りながら足を踏み鳴らし 前動作なしで飛び掛ってきた。

彼は20mを一飛びで詰めてきたが、俺はソレをかわして、その

背に、鞘を抜かないままの刀を思いきり叩きつけた。所長は壁まで吹っ飛んだが、壁を足場にまた飛んできた。馬鹿正直に飛んできたソレをまた避けて、刀を叩きつける。

避けて叩く、避けて叩く、避けて叩く、避けて叩くだけの単調な作業。

やがて所長は力尽きたのか、ごろごろと床を転がって動かなくなつた。

「絶対にやらんぞ……コレはわしの……」

這いつくばつたまま呟く所長に、俺は真つ白いアイスピックを放る。地下2階で『お土産にどうぞ』といただいた特別製だ。

「あんたの研究は誰にも奪わせないからさ、それで自分を一息にやっちゃつてよ」

この状況でも血が怖いとか考えてる俺は、相当馬鹿だと思う。

だが確信した。俺はこの男を余裕で撲殺出来る。

だからコレは、俺なりに慈悲をかけているんだ。

選ばせているんだ。永い時間をかけて殴り殺されるか、自らの手で一思いに命を絶つか。

「……殺してやる……殺してやるぞ！」

だが、所長には理解出来なかった。

俺が同じ立場でも理解出来ないと思う。

アイスピックを拾いもせず突っ込んで来る所長を、避けて、叩く。

ごろごろと転がり、玉座にぶつかって止まる。

俺はアイスピックを拾うと、所長の前まで歩いて行き、その眼前

にピックを突きつける。

「ほら、さっさとやってくれよ」

無感情に告げる。この距離でも負ける気がしない。

「ゆる、許さんぞ！」

所長はそう言いながら払いのけるように右手を振るう。

俺は一步下がってソレを避け 彼の右手が女性を掴んだ事に気が付いた。

勢いよく引き寄せられた女性の鎖骨に左手が沈む。

「おい！」

そして右手が彼女の腰を掴み、高く掲げられる。

「待てっ！」

俺の伸ばす手は虚空を掴む。

そして彼の腕に力が込められ。

捻じ切った。

視界が真っ赤に染まる。

目の前から何かを嚙下する音が聞こえる。

俺は全身ずぶ濡れになっている。

叫び声と、笑い声が聞こえる。
目を拭おうとするが、手もドロドロで上手く拭えない。
ああ。これは、俺の叫び声だ。

鈍い衝撃を受けて俺の意識が覚醒した。
多分所長に殴られたか何かしたんだと思う。世界がグルグルまわ
ってる。

魔力で強引に意識を覚醒させて現状を把握、俺は今、壁に叩きつ
けられてずり落ちてる最中だ。

所長が何か言ってるが、衝撃で聴覚が吹っ飛んでいるので理解で
きない。

彼は両手にもっていたモノをポイと背後に投げ捨てると、こちら
に悠然と歩み寄ってくる。なんかアイツ2回りくらいでかくなつて
るな。それが『狂王の娘』の血の力なんだろう。だとすれば不死で
ある彼女自身もあの状況から復活するわけか。

自分の身体を見下ろす。
血に塗れて真っ赤になってる。一張羅だったのに。

でも何だろう、コレは。今の俺は、何でこんなに血塗れなのに
視界に影がかかる。見上げると、所長が勝利を確信した顔で右腕
を振り上げていた。

ソレを見ながら思考をまとめていく。

「俺さ、多分ホントに馬鹿だったんだよ」

振り下ろされる腕を、俺は両手でキャッチ。うっかり離してしま
わないよう、バキバキと音が鳴るまでしっかり握る。

「血が怖いんじゃないんだ」

右足を所長の肩口にかける。

「信じられる？ 服を汚したくないだけだったなんて」

引っこ抜く。所長が驚愕に目を見開く。なら俺は、どんな顔してんのかな？

「そうじゃなきゃ、こんなに落ち着いてる理由が、説明出来ないんだ」

引っこ抜いた右腕を捨てると、刀を持ち、ゆっくりと鞘を抜く。

「でも、ココまで汚れちゃったら、何やっても同じだよな？」

鞘の中でねじくれ曲がった錆びだらけの刀身が、強引に引き抜かれる事を抗議するように、耳障りな悲鳴をあげた。

一仕事終えた俺は王女に駆け寄る。彼女の傷は、既に服ごと修復されていた。

流石にダメージが残っているようで腹に手を当てている彼女の顔を両手で押さえ、強引に視線を合わせる。

「……………あ」

混濁した眼に意思の光が戻り、徐々に焦点が合ってくる。

「ああ……」

彼女の眼から涙が溢れる。その手がまるで割れ物を扱うように、おそろおそると言った感じで背中に手を回してくる。

俺もそれに応えると、彼女の背をそつと撫でてやった。

彼女は今、何に対して泣いているのだろう。

目の前の血まみれの男への恐怖か。

100年の永きを共に過ごした男の死か。

100年の永きに亘り自分を支配した怪物のからの開放か。

或いは自分が人であった頃の記憶が、彼女を泣かせるのだろうか。

彼女の人ならざる体温を感じながら、俺はそんな事を考えていた。

落ち着いた王女様を玉座に座らせると、彼女は漸く口を開いた。

「私を、殺して、いただけませんかでしょうか」

「……なぜ、そんな事を？」

想像もしなかった彼女の第一声に、俺は驚きを隠せない。

そんな俺をまっすぐ、だが寂しそうに見つめて、彼女は続ける。

「お父様もお兄様も、祖国の人間も、皆、私が殺してしまいました」
「今に伝わる伝説は、真実ではないと？」

「思わず尋ねてしまう。」

「その伝説がどのようなものか、私には解りませんが、コレが私の真実です。全てが終わってしまった後、私は勇者様をお願いして、この身を滅ぼしていただいたのですが、勇者様のお力を持つてしても、私を完全に消し去る事は出来なかつたのです」

「……では、何故俺にソレを頼むんですか？」

「勇者様の魔道の輝きは、例えるのなら、全てを押し流す濁流でした。いかに他を圧倒する力でも、濁流で私を滅ぼす事は、かないませんでした」

彼女の言いたい事が解った。

「貴方は純粹で、穢れのない輝きをお持ちです。そのお力をお貸しいただければ、私も再び迷う事は、ないでしょう。コレは恐らく、最後の好機なのです。どうか……」

彼女にはもう頼れる相手はいない。この先を生きたところで、世俗との接触が少なすぎた彼女はまた売買されるのがおちだろう。

だからと言ってもしココで『俺が面倒を見る』と言ったとしても、永遠を生きる彼女の支えにはなりえない。

俺は場合によっては彼女を捨てて元の世界に戻ってしまう……いや、もう戻りたい。

だとすれば、俺は彼女の願いを叶えるべきだ。

「……分かりました。俺と……私とこの刀でよろしければ、貴方の力にしてください」

そう言って俺は、彼女の前に膝をついた。

ツマ、疑問を抱く

夜が明ける頃に無事外周へと脱出した俺を待っていたのは、黒装束のお兄さんだった。蜥蜴さんは精鋭であり忙しい身なので、俺に長時間付き合う訳にはいかないそうだった。

「じゃあお兄さんの事はなんて呼べばいいの？ って聞くと『シユバルツシャドウとかいいんじゃないですか』と言う答えが返ってきた。

絶対こんな時のために夜なべして一生懸命考えた名前だろうから却下したのは言うまでもないが、このセンスは今までのいなかった夕イプだ。

蜥蜴さんみたいのばかりだろうと思っていたが、彼らとは意外と上手くやれるかもしれない。

斑に染まった服の処分と身体が洗える場所を教えてもらい、身綺麗にしてから宿に戻ると、イスルギとカグヤは朝食を終えたところであった。

「リュウジ！ どこか行くなら書置きの一つもしていきなさいよ！ 心配でどうにかなっちゃうところだったわ！」

カグヤはテーブルを叩いてご立腹だ。イスルギは朝ビール中。昨日飲んだビールが相当気に入ったらしい。

いくら怒られても、人に話したいような事は何もなかったから、適当に誤魔化す。

「夜の闇を堪能してまいりました」

「意味解らんわ！」

テーブルを叩いて絶叫。カグヤは元気でいいなあ。

ひとしきりお説教をいただいた後、俺は散策に出かける2人を見送り、自身も町へ繰り出す。

町は平和そのもので、ただ歩くだけでも楽しくなってくる。様々な店を見て歩く内に、ナイフの持ち手、柄の部分を販売する店を見つけた。

俺は柄を一つ手に取ると、懐からアイスピックを取り出し聞いてみる。

「これ、繋げらんないかな？ 刀身の方は無加工で」

「見せてみな……出来るけどよう、兄ちゃん趣味悪くねえか？」

「もう会えない人からの頂き物なんよね」

店主はピックと柄を並べ、魔法でサイズを微調整する。

「なんだ、聞くも涙、語るも涙つてえ話でもあるのか？」

「うーん、どちらかって言えば、笑い話でいいんじゃないかな」

彼は興味なさげに『へえ』と言って、作業に没頭していった。

俺はその作業をボーッと眺める。話題振ってきたのに投げられた時はどうしてくれようと思ったが、丁寧な仕事してくれてんな。

「……出来たがよ、コレは鞘も作ってやったほうがいいんじゃないかな。隣の店でサービスするつてよ」

「バカヤロウ、なあに言つてやがんだこのボンクラ！」

水を向けられた隣の店主がダミ声で怒鳴るが、慣れっこのようでお互い顔は笑っている。そんな光景に笑いながら、俺は鞘も作ってもらったのであった。

その日の夜、宿の食堂にて、俺は1人考える。

「……何かがおかしい」

夕食を食べながら、気付けば俺はボソリと呟いていた。

「突然どうした？ 自分が夢遊病だとしても気付いたのか？」

他人に言ってるつもりじゃなかったが、ジョッキ片手にイスルギが聞いてくる。

イスルギはホントにこのビールが好きなんだな。

「いや、人に言えるような話じゃないんだ」

今日一日1人でウィンドウショッピングした結果湧いた疑問点を整理する。

事例1。3人パーティーで女1人。ヒロインは主人公とくつつく訳だが、カグヤはイスルギと長く旅をしているから、俺に出来る事は狂言回しくらいだ。

事例2。4人パーティーで女1人。勇者と共に戦ったヒロインがスピンオフ主人公と仮定すると、アイは基本的にバイツと行動していたから、俺とライデさんは彼らの偉大さを引き立てるための添え物だ。

結論。俺は主人公じゃない。証明完了。

……なんと言う事でしょう。異世界から飛んできた俺の配役は『

世間一般の常識から外れた奇妙な時空遭難者』だったのですか！

「何考えてんだか知らないけどさ？ 人生楽しまないと損だよ？」

食事の手を休めないまま、カグヤがにじり寄って来る。口の中が見えないように気は使っているが、あんまりお行儀がよろしくない。

「カグヤは悩みがなさそうでいいなあ」

「何て事言ってくれちゃってんの？ 世にアタシほど悩みを抱えて葛藤の毎日を送る乙女はいないんだよ？」

「ほほう、例えば？」

「……………甘いお酒が飲みたいです」

「ジューズでも飲んでろよ」

今日もマツチヨさんはイスルギとビールを酌み交わしている。カグヤに酒を恵んでくれるのはマツチヨさんくらいなのだ、マツチヨさんは絶対に他の酒に浮気をしないのだ。

と、イスルギが俺の腰に差してある短剣に気付き、徐にソレを抜いた。

「あーちよっと、酔っ払いは刃物持ちっちゃ危ないですよ」

イスルギは俺の制止を気にも留めずにソレを眺める。

「……………コレは何の骨だ？ かなりの業物だが」

あの娘さんは業物だったのか。

「形見分けで貰ったピックに柄を付けたんですよ」

カグヤも寄ってきて、イスルギが掲げたソレを見る。

「これは……魔法剣の軸に使うと最適なタイプだね、長さ形を思うがままに操れる素直な刀身を発生させられるんじゃないかな」

カグヤの鑑定スキルすげえ。

試しに刀身に触れ、アイさんのハルバードのイメージを送り込んでみると、光の粒子に包まれた短剣は、俺の記憶と完全に一致した光輝を放つ斧槍を形成した。

……魔法剣ハルバード？ ちょっと何かが違うよね。

「……ほう」

イスルギは感嘆の声を上げながら立ち上がると、ゆったりとした動きで僅かに揺らぐ、槍の穂先を中指で弾く。

いつの間にか静かになっていた店内に、風鈴を思わせる涼しげな音が響いた。

「これは、芸術品だな」

そうやってイスルギは斧槍を霧散させると、短剣をそつと鞘に戻した。店内に喧騒が戻るのを感じながら、俺はその柄に触れて言う。

「これは多分大事な物なんです。実戦で使う気はありませんよ」

「お前のもんだからどう使うかなんて知らんが、大切につかってやれよ」

「……そうですね」

俺はそう言って、笑った。

自由行動日も無事終了。今日もオオクニの町はこともなし。
出立の準備が整った俺たちは、今後の予定を話し合う。

「次は南西のアズマに行こうよ」

「南西なのに東アズマとはこれいかに」

「ゴメン、意味解んない」

何で『カルアミルク』が通じるのに『東でアズマ』が通じないんだよ!?

俺の心の叫びをスルーしてイスルギが異を唱える。

「このまま山脈を越えて行ったほうがいいんじゃないか？」

「え〜？ そっちは未開拓だから観光名所とかないんだよ？」

2人は本当に旅慣れているようで、地図も見ないでそんなやり取りをする。

「リュウジはどうなんだ？」

ふいにイスルギが振ってくる。

「いや地理なんて全く解らないから突然振られてもサッパリですよ」

俺が振れるのはかぶりだけ。今俺上手い事言った。

2人は各々意見を述べる。

「アズマに行ったらベッドで眠れるけど、山脈越えなら森の中で夜営するハメになるんだよ？ アズマは結構栄えてるから美味しい料理もお酒もあるよ？」

「ココからアズマまでは1000？以上あるけどな」

1000？は無理じゃね？

と、言う事で俺達は山脈越えルートを選択、オオクニの町を後にした。

森の中での夜営と言っても、旅なれた2人がいるから全く苦にならない。こんな深い森の中でも襲ってくるのようなのは精々が熊くらいだ。

ヒヤッハー、熊鍋にしてやんよー。

問題は鍋がなかったと言う事くらいだ。

そもそも俺は熊の解体方法どこるか食える部位についても知らなかった訳だが……

『いやちよ、ま、嘘！ 無理無理無理無理！』

『リュウジは好き嫌いが多いなあ……そんなんだから大きくなれなかったんだよ？』

『ソレ絶対人の食うもんじゃないって！ 生でなんてそんなの絶対おかしいよー！』

『美味いんだがなあ』

……思い出すだけでもつらい。

まあ結局料理は2人に任せてどこだかよく判らない部分を焼いてもらったのだが……まあ、何だ？ うん、アレだよ。そう……俺に野外生活は無理だ。

そもそも保存食とか荷物が増えるからいらないうって話が出た時点でおかしいと思うべきだったんだよ。100？頑張ったほうが良かったんだよ。

だって普通“未開拓”が“獣道すら途切れる”って意味とは思わないだろ？

明日は町に着くのかな？ 着くよね？ てかこっちのルートは直線距離で何キロなのかな？

カグヤは距離とか考えた事ないって言うし、その部分だけイスルギが返事をしてくれないんだ。

そして今は丸まって眠る魔力の炎を囲んでイスルギと見張り番中。因みに火元はヒューマントーチモードのカグヤ。魔力マジ万能。

この恐るべき技によって彼女はどんな場所でも安全に眠る事が可能なのだ！

寝ながらこんな高度な魔法の維持調整が出来る人間は物語の中にさえ存在しないけどな。

「イスルギ。質問しても、いいですか？」

「何だ？」

「貴方達は、一体何者なんですか？」

カグヤもイスルギも規格外が過ぎる。

この世界の人間は『魔力の行使が可能』と言う事意外、間違いない地球人類と同程度の身体能力しか持っていない。出来るはずのない事が出来るのは全て魔力の恩恵。

対して俺は、明らかに常軌を逸した身体能力を持っている。普通の人間は熊を殴っても一撃じゃしとめられない。

だが、イスルギとカグヤは間違いなく俺をはるかに超越した存在だ。

カグヤに関しては判りやすい。俺に魔力を与えた行為は、学術機関が解明していない知識を持つ証拠。

高難度の魔法を長時間使ってもため息一つで済むのは、人外クラスの魔力総量と相性を持っている証。

イスルギは、勇者クラスの戦闘能力を持った普通の人間の範疇にあるのかもしれないが、カグヤの全てを知っているように見受けられる。

彼は人類の到達していない知識の行使を、当たり前のように眺めているのだ。

「なありユウジ」

イスルギの声に身が強ばるのを感じる。

「今は塔に行くのが目的であって、俺らが何者かなんて考える必要はないんだ」

そう言っつてイスルギはカグヤに向けて小枝を放る。

枝は炎に触れた瞬間、音を立てて消滅した。

「スタッフフロールが流れる頃には、ちつとは謎も解明されてるからさ」

この世界の娯楽に、映像作品は存在しない。

……いや、流石にコレは自動翻訳の首輪がファジーなだけか？

「まあ、待つとけ」

そう言うと、イスルギは笑った。

「……………投げっぱなしは勘弁してくださいよ？」

「投げっぱなしも味の一つさ」

そして、夜が明けた。

俺達はイスルギ先導の元、殆ど道とは言い難い山道を進み続ける。そして、空が赤みを帯びてきた。

まだまだ人里には遠い。

「今日には町に着くって」

「言っていないな」

俺の泣き言にイスルギのセリフが被さる。

心が折れそうだが、ソレを見たカグヤが慰めてくれる。

「明日には町に着くからさ、これで涙ふきなよ」

「……………これ木の皮じゃん」

受け取った皮を、カード投げの要領で前方の木に向けて投げる。

緩やかな曲線を描いたソレは、小気味良い音を立てて目標の木に刺さった。

「そうだ、カグヤに質問があつたんだ」
「酒はアタシの活力の源なんだよ」

別にそんな事は興味ねえよ。

「魔眼持ちの人に『俺の魔力が綺麗だ』って言われるんだけど、カグヤが何かしたのになって」

「下戸のリユウジにアル中の気持ちは解らないんだよ……」

「ならビール飲めよ」

「俺はな、全てが終わつたらどこかの田舎町であのビール飲んで余生を過ごすんだ」

「アタシ、もうイスルギの事が解らなくなっちゃったよ……」

下を向いたままククツと笑うイスルギを見て、カグヤはその目に涙を浮かべる。

「だ・か・ら！ 俺の魔力について教えてくれって」

漸くまじめな顔に戻ったカグヤは人差し指で涙を弾きながら考えるそぶりを見せる。

「んー……そうだね、例えるならリユウジの魔力は、徹底的に品種改良を重ねたブランド物なんだよね」

「ブランド物って……じゃあブランド物の俺にしかにしか出来ない魔法とかつてあるのかな」

悲しみに暮れる王女を救う高級ブランド、とか収まりが良くないんだが。

「それはないよ、自分だけが特別だなんて夢を追う姿は、応援する事は出来てもお勧めする事は出来ないんだよ?」

「バツサリだー!」

「え〜? でもでも……」

俺は狂王の娘さんを救う事が出来なかったって事? そりゃあんまりだ。

ちよつとシヨックの表情が顔に出てしまったようで、そんな俺を見たカグヤはもう一度考えてくれる。

「……まあ、強いて言うならプロセスの最適化がされてるから、ナノセコンド単位でよければ発動が早いとか。後は侵食効率が物凄く高いから、適当にやっても隅々まで魔法効果が行き渡るとか?」

今はその侵食効率とやらが、彼女を救った事を信じよう。

「ナノセコンドなんて誤差の範囲内だし、侵食効率が重要になるシビアな状況なんて、狂王の娘を消滅させるとかのあり得ない話でしか関わってこないよ」

「ビンゴー!」

「は?」

カグヤさん最高! 空気読める娘! もう愛しちゃう!

思わずカグヤを抱きしめる。なんかパニックってるけど気にしない。間違いないあの王女様は救われたのだ。俺は彼女の期待に応えられた!

「ちよ、ちよ、ええ? おおお落ち着いてリユウジ?」

「ああ、悪り。ちょっと興奮しちゃって」

そつとカグヤを開放する。カグヤは乱れてもいない服を整えるしぐさをして、クールダウンすると俺に聞いてきた。

「いやおつどろいたよ。で、なんで急にそんな話を？」

「最近魔眼持ちとか人外とかに興味を持たれてる気がして……」

そう言いながら、先ほど木の皮を投げた先を見る。

「お前判つてて投げたのか……それは良くないぞ？」

イスルギが咎める。

俺の視線の先、木の陰で腰を抜かしていた何者かは、既に自分が気付かれている事を理解して

「……つく……えつく……」

「脅すにしても相手を考える。めっちゃ泣いてんぞ」

「心の傷はちゃんとフォローしたげなよ？」

「え？ でもそんな……え〜？」

こんな深い森で単独行動する相手が、ちょっと威嚇しただけで泣き出すとか、思わないだろ……

人間の食事

木の陰で泣いていたのはショートカットの女の子だった。

「どどどうすればいいの!？」

「考えてこそ人は成長できるもんだ」

イスルギは観戦モードに入った。

「…………ごめ…………いつ…………わ、わた…………」

彼女の方は何か言葉も出せないっぽいんだが、どうすればいいの？

「よし、もう大丈夫だからね」

カグヤがそう言って慰めてくれている。右往左往する俺を見かねたのだろう。

俺はとりあえず2人の前で正座して待機。平に反省しております。と、徐々に落ち着いてきたようで、彼女はこちらの方を向いて謝ってきた。

「あの、こっさりつけるような真似をして、すいませんでした」

「いえこちらこそ、突然の凶行お詫びいたします」

now土下座合戦ing。

ショートちゃんの外見年齢はカグヤと同じくらい。活発さを演出していきそうなツリ目がこちらを見つめる。

濃紺に白いアクセントが入った浴衣を山吹色の帯で締めているのだが、丈がミニスカートみたいに短い。

野山を駆けるお嬢さんだろうし機動力アップのためなんだろうが、立っただけでも目のやり場に困ってしまいそうだ。

そんな服装の娘が正座……が崩れて女の子座りしちゃ色々つまズイ訳だが、俺はもうどうすればいいの？

「それで、なんでアタシ達を追いかけたりしてたのかな？」

土下座バトルに飽きたカグヤが尋ねる。少女は俯いて両手の指を絡ませながら頬を赤らめていたが、覚悟を決めたのか、俺をチラリと見てこう言った。

「彼の血が、美味しそう……だったの……つい」

「俺はどう反応すればいいの？」

「ほら、リュウジの血には私の最高傑作が流れてるから」

「お詫びに指の1本もくれてやれよ」

カグヤは無駄に自慢げで、イスルギは本格的に投げている。

「いえ、そんな……私、人はもう食べないんです！」

『もう』って言ったよこの娘。

「じゃあ何で……」

ついてきてたの？ と聞くカグヤ。

「その、そちらのリュウジさん……ですか？ が、お食事ですらい思いをされていたのを見て、私の家に招待なんかしてみようかな……って？」

そう言つてカグヤを窺う。何故最後が疑問形なんだ？

「でも、何て声をかけたらいいのか判らなくつて」

「ますます何で？」

カグヤの追及は止まらない。

俺にも春が来たつて事だよ言わせんな恥ずかしい。

「貴方に利する部分がないよ」

「いえ別に喜んでいただければいいんです。あわよくばお礼として血の一滴でもとか、そんなんじゃないですから！」

……おおう。真剣な眼差しで語ってるけど本音が隠せてないよ。

崩れ落ちる俺に、イスルギが声をかける。

「素直でいい娘じゃないか。どんな料理がでるのか興味もあるし、お誘いに乗つてもいいんじゃないか？」

「本気？ 朝には骨も残つてないよコレ」

カグヤのそんな声に少女がちよつと怒つた顔で応える。

「そんな事しませんよ！ お肉が美味しい人間なんて結局いないんですから！」

「だから血だけ吸い尽くしたいって？」

「そんな事したら嫌われて、次のチャンスを期待する事も出来なくなつちやうじゃありませんか。私そんな先の読めないダメな子じゃありません！」

ダメな子だ。

「くくつ……素直でいい娘だろ？ 裏はないだろうし俺達も一緒に行くんだ。お前もそろそろ普通の飯が恋しいみたいだし、問題ないだろうよ」

笑いながら言うイスルギの言葉に、俺は一つため息をついて立ち上がる。

彼女の物言いから察するに、俺の命を危険に晒すつもりがないのは本当だと思う。

亜人雑種であろう彼女にとって食は娯楽でしかないから、無理はしてこないだろう。

「イスルギ、ちゃんと守ってくださいよ」

「まかせとけ」

「え……本気？」

カグヤは乗り気じゃないようだが男2人が言うなら自分の意見を固持する気はないようだ。

俺は状況が飲み込めてないダメな娘に手を差し伸べて言う。

「じゃあ、君の家に案内してくれるかな」

「は？……は、はい！」

慌てて立ち上がった彼女は胸の前で両手をギュツと握り締め『よっしゃ！』みたいな表情でこちらを見上げる。

「ところで君の名前は？」

流石に呼びづらいからな。

ところが彼女はキョトンとした表情になった。

「ないですよ？ 強いて言えば、2番」

……おおう。

「亜人にとって名前なんて、呪いを引きつけるための標識でしかないからな。集団になってから暗号名をナンバリングするだけなんだ。数字以外の名乗りをあげる奴は基本変人だ」

イスルギさんのありがたい解説が入る。

「じゃあどうやって平時の個体識別をするんですか？」

「しらんがな」

ないわー。でもそう言われればこの世界で語られる物語の主人公達も皆、二つ名でしか語られていなかったな。どうせ名前が出ても偽名だし、戦場を移動する度名前を変える奴もいたらしいから、自然に二つ名のみで語られるようになったのだろう。

「もうどうなっても知らないから、さつさと2番ちゃんのお宅拝見にいきますよ」

カグヤが言う。

「それで、どこに住んでるの？ 近くなら私と2番ちゃんが1人づつ運べば早いよね」

おいおいさつきまで泣いてたような娘がそんな事

「そうですね、じゃあ私がこちらを運びますのでついてきてください」

あれ？ と疑問をはさむ間もなく2番が俺を背後から抱きしめる。
え？ もしかしてその持ち方で高速移動とかするつもり？

「じゃあ行きますよ？ 苦しかったら我慢してくださいね」

ソコは我慢させるトコじゃないだろ？

だが、やはりそんな事を言う間もなく僅かに身体が沈み

「ちよつと、え、うひょおえああー……」

俺は空を舞った。

空気を蹴って森の上を全力疾走すると言う、とんでもない移動法で2番に連れられて辿り着いたのは、でかい湖の中に浮かぶ小島だった。

陸地からは距離があるし、小島といっても4〜500m四方はあり、亜人が仙人暮らしをするには十分な環境なのだろう。

島は中心が切り開かれて広場になっており、その周りに背の高い木々が立ち、島の形状も手伝って上手くカムフラージュされている。と、俺のすぐ後ろにイスルギが落下、その上にカグヤが降り立つ。何だろう、カグヤの機嫌が……ああ、イスルギが2番のパンツみたとか、そんな痴話喧嘩か。

せっかくだしイスルギに直接聞いてやろう。

「イスルギ？ 一体、何があつたつて言うんです！」
「ぱんつ、はいてない」

それは許されない。

「見るだけならまだしも考察まで始めるんだよ？ 信じらんない！」
「……考察はないわー」

てか一緒に見るだけならいいのか。カグヤもなかなか寛容だな。
そんな俺達の話を知つてか知らずか、2番が可愛らしくお辞儀を
する。

「ようこそおいでくださいました」

その背後には、日本人感覚からすると結構な大きさの平屋が建っ
ている。

彼女一人では維持管理に疑問が残るので、恐らくどこかに1番が
隠れているのだろう。

「じゃあちよつとお魚捕つて来ますね！」

今から捕つて来るのかよ。

一生懸命な2番にツッコミを入れるのも気が引けるので、その漁
を観察しようと思つたが、彼女はおもむろに口の側に手を当て、大
きく息を吸うと、俺の可聴域を超えた声で叫ぶ。

カグヤが「パパってオイ」って呟いたから間違いない。

僅かなタイムラグの後、地面で塵が一齐に浮き上がる。パパの返
事もパネーな。

カグヤが「随分と仲がいいんだね」って言つてたから間違いない。

「えへへー」

空を見ながら嬉しそうに笑う2番の視線を追うと、空の彼方から『パパ』がゆっくりと降下して来た。

S Fロボちっくなでっかいドラゴンに乗って。

「……あのドラゴンも、亜人だからーんだよって事で丸く収まるんですか？」

「……『ドラゴン』って、ラグナロクで『暗き翼持つ巨大な化鳥』に殲滅された空飛ぶ亜人軍団の事か？ どっちかと言えばアレは化鳥の方だろ」

認識の齟齬は訂正するのめんどくさいので、未だ下降を続けるドラゴン……化鳥と言っとくか。まあソレを観察する。

まず目に付くのはその体色。内側から淡い光を放ち、エメラルドグリーン、消えかけたケミカルライトのような感じの無機質な肌を持っている。

顔には、目のすぐ上からスラリと伸びる騎乗槍のような一本角が伸びており、当然頭の後ろに胴体があるのだが、まるで各部位をジョイントするために仕方なくつけたように小さい。とは言え1m以上はあるだろうから、それが小さく見える化鳥のサイズも相当なものだろう。

左右に広がる巨大な翼は向こう側が透けて見えるほど薄い虹色で、夜空に長く伸びる黄金の軌跡を描いている。翼を支える骨格は頼りなく思えるほど薄く平べったいが、その頂点部分に衝角らしきものが付いているので、見た目と違い頑強なものだろう。

次に足だが、例えるなら『2mくらいありそうな三角錐』だ。足裏と思しき部分からもキラキラした何かが控えめに吐き出されているから、あの輝きが推進剤なのかもしれない。

でもあの脚で着地したら地面に顔が届かないし、常にバランス取り続けなきゃダメだろうし、1度倒れたら絶対立てないよ。

と、化鳥が減速し、フワリと着地した。虹色の翼が光の粒子となつて消えていく。

足に隠れて見えなかったシツポは翼を縦にした感じか。

化鳥の外に人が張り付いているようには見えないので、中に操縦席でもあるのかもしれない。ちょっと乗ってみたい。

「パパー！」

2番が化鳥に駆け寄る。

「おかえり、こちらのお客さんは？」

化鳥が応えた。

「……マジか。」

化鳥さんはヤジロベエみたいに揺れながら2番に話を聞いている。ソレに合わせて各々自己紹介しながら、俺はイスルギに囁く。

「アレからアレが生まれるって、ありなんですか？」

「亜人はなんでもありだ。覚えとけ」

「多分全部聞こえてるよ？」

カグヤが口を挟むのに合わせて、化鳥さんがこちらを見て歯を見せた。笑ったんだと思う。思いたい。

化鳥さんは自分を3番と名乗った。すげえ適当だ。

多分1番は嫁さんなんだろうと思うが、今は二人暮らしたそうだ。

2番は「ちよつと待つてて」と言つと平屋に駆けて行く。
うわあ……普通に走つてるだけでも見えちゃいそうだが、親御さんは何考えてるんだらう。

と、3番を眺めていたイスルギが耳元で囁く。

「守るつて言つたが、多分無理だ。見て判るくらい地力が桁外れだ」
「ちよ」

「まあ素直でいい娘さんを育てたんだ。きつといい人だろ」

家から出てきた2番は木を編んで作った魚入れ、でっかい魚籠ひくを持っていて。そして3番に言った。

「じゃあパパ、調味料はいい感じに色々あるから、今日は無難に鰻と鮎あじでいこう！」

「100匹くらいでいいかな？」

「多くないすか？ パパも食うの？」

でもこの親子がどうやって漁をするのか興味があるから見学しよう。

2番はその場で駆け足しながら、固定した空気を蹴つて高度を上げていく。

3番はソレを見上げて　ぱんっはいてないって話じゃなかったか？

「行くぞー？」

3番がそう言つと彼の周囲に大量の光の球が現れ、ソレが僅かなタイムラグをおきながら、1つつつ長い尾を引いて森の向こうに飛んでいく。

これはアレだ、ホーミングレーザー！

かけえ！ めっちゃかけえ！ 使い方しょぼいけど。

2番はその光を追いかけ、そのまま追い抜いていき……周囲に炸裂音が響きはじめる。

時折2番の調子に乗った掛け声なんかも聞こえてくる。

「これは……凄い漁の仕方があったもんだな」

イスルギは楽しげに笑う。

「演出過剰な魔法をこんな大量に同時操作して、魚と娘さんに怪我させないって事？ 凄いね」

カグヤは苦笑中。

夜空を青白い軌跡が彩り、まるで花火大会のようで、俺達はその幻想的な光景をただ見ほれていた。

そして2分ほど経って戻ってきた2番の魚籠には、大量の魚が詰まっていた。

「えへへー」

「……こんなに強いのに、何でさっきはあれだけで泣いちゃったの？」

「ビックリしちゃって、つい……」

まあ可愛いからなんでもいいか。

今日の夕飯は、夜空を見ながらいただく鮎の塩焼きと鰻の蒲焼でした。

3番氏は物理法則に干渉して料理を作るので早い早い。最早魔力万能どころの騒ぎじゃじゃない。

2番が杓ですくった米が陶器のお椀に入るまでの間に炊けてる。水分は空気中から生成するそうだが、その影響で島の周囲に強風が吹き荒れていたのだろうか。

魚もそんなノリで料理されるから待ち時間はほとんどなかった。そして俺は久々に手の込んだ料理を食う事ができた。

カグヤも甘味の強い梅酒があつたのでご満悦。

珍しく酒を控えたイスルギは、なにやら熱く語る2番の相手をしている。

「……むっ」

「どうした？ 考え事か」

3番氏が話しかけてきた。

「いや、人生に疑問を感じているんです」

なぜ、俺に、お色気イベントがないの？

2番は最初、俺に興味を持ったんじゃ、なかったの？

イスルギと話す2番を見る。

「だから皆戦士か魔道士になってしまっただけよ？ 脂肪と筋肉のバランスがいい人は自分で育ててもしない限り存在しないんですよ」

「成る程。それに一般的な魔力による味の渋みが加われば……」

「……天然物は絶望的です」

「難しいな」

2人の表情は真剣そのものだが、あいつら一体どんな話してんだ。たとえば友好度アップに必要でも、あの話題に入るのは難易度が高いな。

「うちの娘は人との接触が少ないから一般常識が壊滅的なんだが、あの話にあそこまで付いてくる奴は初めてだよ。彼は、大丈夫なのか……こう、色々な意味で」

表情は読めないが3番氏の声は心配そうだ。

「多分世界が俺達と全く別物に見えてるだけで、仲間思いのいい奴ですよ」

「それならいいがな」

俺は3番氏に顔を向ける。

「てえ事は3番さんは、人と暮らした事とかあるんですか？」

「遠い昔に、ちょっとな」

彼は笑う。多分笑ったんだと思う。

「世界を賭けた大一番を、我が主と共にひっくり返してやったのさ」

「その主ってのは？」

「最早肉体は滅んだが、魂は永遠のものとなった」

「……成る程」

「主がその本質を誰からも忘れ去られて永遠となったときに、いただいた名を捨てた。最早誰にも名はつけさせぬ」

きつとその主は、凄くいい奴だったんだな。
そんな奴がつけた名前って、どんなものだったんだろう。

「てのは少なくとも、私からすれば幻想にすぎないんですよ。
結局処女だろうが童貞だろうが味に変化なんてないんです。肉質を
決めるのはそんなつまらない概念じゃなくて、何を主食として食べ
たのかって部分なんですよ」

「なら、肉でも野菜でもなく、魚のみで育てた人間はどうなるんだ
？」

「私も抜け道を考えた時期がありました。でも、なんであれバラン
スよく食べてないと、今度はタダでさえ期待の出来ない魔力の味が
更におかしくなっちゃうんです」

「じゃあどうすれば……クソッ！」

そろそろアレは止めたほうがいいんだろうか。

人外の食事

深夜。

ふと目が覚めて辺りを見回す。

この平屋は、例えるなら寺の本堂のようになっており、仕切りが存在しない。

広い室内にぐるりと視界を廻らせるうち、カグヤが起きている事に気付いた。

彼女は平屋の入り口に座り、こちらに背を向けて何かしているようだ。

だいぶ飲んでたから調子が悪いのかもしれないと思い、後ろからこっそり近づき……まだ飲んでやがる。

「カグヤ……明日大丈夫なのか？」

「アルコールは幾らあっても多すぎるって事はないんだよ」

カグヤは笑った。そして酒瓶を掲げながら続ける。

「イスルギが何考えてるのかも、考えたいしね」

「イスルギが？」

ツーカーの関係かと思っていたんだが。

カグヤが真面目な顔になる。

「今日の2番ちゃんとの話、聞いてた？」

「カニバ談義の事？」

人外ハーレム作成のハードルの高さに衝撃を受けたものだ。

「イスルギは、何であんなに頑張つて、色々な提案をしていたんだろっね」

だが結局2番が全ての提案を彼女なりの論法で否定していた。俺としては彼女に人を襲う理由がないと判明してむしろ良かったと思うのだが。

ガラス瓶の中の液体を眺めながら、カグヤは俺に尋ねてくる。

「彼女がイスルギの提案に折れていたら、イスルギはどうするつもりだったのかな？」

「……カグヤは、どうするつもりだったと思う？」

ちよつと迷つてから言うと思つたが

「多分、切つてたと思う」

即答だつた。

「そんな目茶苦茶な」

いくら何でも強引に誘つてきて、仕方なく乗つたら叩き潰すなんてありえないだろ。

「イスルギつて時々そう言う奴なんだよ。あと、人が人であるために大切な部分を、どこかに置いて来ちゃったんじゃないかって、見てると思うんだ」

まさかソコまで言うとは思わなかつた。

俺としては逆にカグヤが心配になつてくるが。

「飲みすぎてないか？ らしくないんじゃないかね？」

そう言うと、カグヤは苦笑する。

「だね。最後に一つだけ聞かせて？ リュウジは何故、塔に行くの？」

「……あそこに行けば、全てがうまく納まる気がして」

「……………で？」

「それだけ」

カグヤの顔から何かが抜け落ちた気がした。

その場にコテンと転がってこちらを見上げる。

「それだけって……………うそん」

ちよつとおどけた言い方だ。

「俺の考える事なんて、そんなもんだよ？ ぶつちやけ一目惚れと勘だけが理由だよ」

カグヤはそのままの姿勢で静かに笑い、やがて眠ってしまった。

俺は彼女にそつと薄手の上掛けを掛けると、自分も眠る事にした。

目が覚めると、すぐ上に2番がいた。俺が目覚めた事には気付く

様子を見せない。

「なあ、お早う」

「んあ、おひゃようお」「ケフンケフン

むせた。

「何してんの？」

とりあえず聞く。

2番は俺の上から降りると口元を拭いながら答える。

「リュウジさんの体液って美味しいんですよ」

「だからって何してんだよ！」

俺は真っ赤になって怒鳴った。

そりゃ怒るだろ？ ビックリだよ！ イスルギは一体何を

すぐ横にしゃがんで観察してやがる……カグヤも一緒に。

「えへへー」

人懐っこい笑みを見せる2番。

「お前の魔力がブランド物って言ってただろ？ 肉に興味はないけど特別性の魔力のこもった体液はやっぱり美味いってよ。別に甘噛みされる程度なら構わんだろ」

しゃがんだ膝と肘を合わせて頬杖をついた姿勢で、イスルギが言う。

「まあアタシの最高傑作だから、しょうがないよね？」

カグヤは言った。

顔を覆った両手の、指の隙間からこちらを見上げて。

「満喫しましたー」

2番は満足そうだ。

「これくらいの礼は構わんだろうに」

「新しい技を覚えてしまった……」

「じゃあ朝御飯にしましょうか？ 私は十分いただいたんで……つてイスルギさん！ 床えぐれてるじゃありませんか！」

「おっとすまん。カグヤ、直せるか？」

「このカグヤ様にまかせろー」

三者三様に好き放題やりながら、揃って出て行ってしまいった。

「……えー？」

静かになった屋内で、俺は手早く着替えを済ませると、建物を出る前にもう一度中を確認する。

俺達は殆ど手ぶらだったから、荷物は何も残っていない。

俺達のいた痕跡は、イスルギの背負う鉄塊がえぐった床を、カグヤが魔法で修繕した跡だけしかない。

あんな物を背負ったまましゃがめば、床に傷が付いて当然の話だ。昨日だって『床がぬけそうでは持ち込めないな』とか言っつて、外に立て掛けていたくらいだったのだから。

なら、それなら何故、今回は持ち込んだんだ？

昨日のカグヤとの会話を思い出す。

彼女の言った事が全て真実であったのなら。

イスルギは、俺を使って2番を試したのか？

俺の体液以外は人肉食に興味がないと言っていた2番が、本当に俺を自由にして『ソレ』だけで終わらせるかどうか、確認したんじゃないか？

だとしたら、もし彼女が甘噛みの先にいつてしまった時、彼はあの鉄塊を、どこまで振り下ろすつもりだったのだろうか？

「リュウジさん！ 朝のご飯はひつまぶしですよ〜！」

「ひつまぶしと蒲焼って、何が違うんだ？」

「なー！！ イスルギさんは人生の3割を損してますよ!？」

2番とイスルギの頭の悪い掛け合いに、俺の意識が引き戻された。しゃもじ片手に熱く語る2番と、ソレに聞き入るイスルギを眺める。

仲良くしゃもじを持って笑う2人を見るうち、俺は自分の馬鹿な考えが笑えてきた。

酔っ払いの戯れ言に、素面の俺が惑わされてどうするんだよ。

今1番気をつけないといけないのは、ネガティブになった俺自身の勘違いだな。

朝食を終えると、旅の準備を整える。

と言つても、現地調達が主である俺達に持ち物なんて何も無い。森の外までなら、3番氏が送ってくれると言つ話になったので、ヤジロベエみたいに揺れている彼の下に向かう。と、ふと思いついて3番氏に聞いてみた。

「俺の血は、3番さんにとつても美味なんですか？」

「最高効率のエネルギーとしては実に魅力的だが、生憎味覚を持つてなくてね」

「じゃあお礼に1滴いかがですか？」

短剣を持って聞いてみる。

「いや、気持ちだけで十分。良かったら、代わりに娘にやってくれ」

3番氏が角をしゃくる。

角の先に目をやると、2番の目が輝いている。貪欲な娘だ。

まあ最初から『あわよくば』とか言つてたしな。

短剣で指に傷をつけて2番を……呼ぶ前に彼女から寄つて来た。

彼女は俺の差し出した指先をチロリとなめると、指全体を口に含んでいき、ゆつくりと頭を前後に揺らす。

何コレちよとエロイ。

口の動きを見ているだけで心臓が高鳴るのを感じる。ちよつと腰が引けちゃいそう。

そして彼女と目が合うと……

なんか彼女の目がアウト。

目がもうグルグル渦巻きみたいになつてる。明らかに正気じゃない。

「ねえこの娘大丈夫？俺もしかしてヤバイの？」

2番は力が抜けたようにしゃがみ込むけど俺の手を離さない。
身体全体でハアハア息しながら時々ビクンビクンしてる。
3番氏は……ああやっぱアレは笑顔か！

「まあ、血が1番濃厚に魔力を蓄えるからね……」

カグヤはもう正視出来ないようだ。

俺の身体の回復力によって血が止まると、2番はもごもごと口を動かす。

「まずは俺の指を離して？」

指をそつと引き抜く。

「……つぶあ、ごめんなさい。ところで私を貴方の所有物にしてみませんか？」

「おい」

「ご主人様と呼ばせてください！」

「展開速いなおい！」

「だって美味しいんだもん！」

「落ち着け！」

眺めている連中に助けを求めてみる。

何とか彼女に冷静さを取り戻させる事が出来そうなのは……

「2番よお。まあおちつけって」

イスルギ！

「毎日飲めちまったら飽きるだろう？ また今度のお楽しみに取っ

ときな」

イスルギ……

なんとか2番には諦めてもらい、3番氏の背に乗る。

まるで何もなかったかのようにブンブン両手を振っている2番に俺達も手を振り返して別れると、3番氏はあっという間に森の外まで移動してくれた。

別れ際に聞いてみる。

「父親的には娘さんの、あの短絡的性格はよろしいんですか？」

「若い内なんてそんなものだよ。その時にどう思ったとしても、思いつくようになる頃には笑い話になっているのさ」

「3番は包容力のあるいい親父だな」

「そうなの？ アタシには理解できないよ……」

まあイスルギと俺では歳の差が大きいから、考え方の違いがあるのだろうと納得しておく。

だが、聞きたい事はもう一つある。

「あと、3番さんに聞きたいんですけど、ココからオオクニの町まで直線距離で何キロくらい離れてるか、解りますかね？」

驚愕の表情と共に、イスルギが1歩下がった。

「そうだな、ざっと200km以上はあるだろうが、300kmには届かない」

なら、山脈を越えるには倍以上の距離を移動する事になるんじゃないか？

「そうですか。ところでイスルギ？」

「いやアレだ、目的地が決まってるなら、早く着いた方が……」

「旅の予定は、何日ぐらいを見込んでいたんですか？」

イスルギは黙り込んでしまう。
代わりに3番氏が答えてくれた。

「お前らの機動力なら、強行すれば1週間もかからんだろうな」

「成る程。ところでイスルギ？」

「……すまん」

くっ！ もう少しゴネるかと思ったんだが。

「まあ、今回は手早く目的地に到着できたから、良しとしますよ」

俺は笑った。ココで無駄に文句つけても時間の無駄だしな。

……そう。もう塔と最後の町はすぐ側なのである。

塔に寄り添う城塞都市にて、昔語りを思い出す（前書き）

エロが書いてみたい時期があった。
あくまっこ捕縛みたいな。

塔に寄り添う城塞都市にて、昔語りを思い出す

キコウ都市国家群の切り札と呼ばれる町の前で、俺は立ち止まった。

都市国家群において最大の領土を誇るのが、この『城塞都市ライゼラン』である。

もっともその領土の半分は、いつ誰が、何のために建てたかも判らない巨大な塔の産み出す影に、殆どの時間を隠されているため、住人の生活圏自体は窮屈な部類（せうくつ）に入るはずだ。

都市国家群の町としては珍しい構造をしており、何より目を引くのが富裕層と貧困層を分ける壁の薄さであろう。

通常であれば、内部に通路がある巨大な壁がそびえ建つものであるが、ライゼランにおいては1枚のフェンスがあるだけである。

風の噂に聞くところによれば『維持費が安いから』であると言う。また、自前の防衛戦力を持っておらず、それどころか治安維持のための“人間の”警備部隊さえも恐ろしく数が少ない。

よって本来防衛費となるはずの予算を全てインフラに回せるため、非常に文明レベルが高く、出回る商品も良質な物が多い。

その外見だけを見た者は、なぜこんな町がどこからも攻められる事なく存続出来るのか、疑問に思う事だろう。

だが、それは間違いだ。

そもそも、都市国家群などと言う脆弱な基盤が、この戦乱の時代に生き残れるはずがないのだ。

民度も練度も士気も常識も違うキコウの都市が手を取り合ったところで、完全な統率の下1つの生命であるかの如き戦闘を行う、他国の正規軍と対等な戦いが出来ると思う事が、愚かであると気付くべきなのだ。

ではなぜ、周辺諸国はこの無力な集団をのさばらせておくのか。簡単な事である。

ライゼランには最強の亜人『藍のお嬢様』がいるのだ。

500年ほど前の事である。

2つの大国が全面戦争をした。

どちらも多大な犠牲を払った揚句、最後は和平で決着したと言う。東の大国は80年と言う永い時間をかけて持ち直したが、もう片方の国は瓦解を免れる事が出来ずに、同じ時間を内乱に費やした。

西の戦乱は激しいものであったが、それ故に戦略的価値の見出せない、東の敵性国家との隣接地域、そこに向かうルート上にある未開の山脈、そしてその前に立ちはだかる手出し不可能な塔は、百年の長きにわたり放置され、ソコに集落がある事も、いつしか忘れ去られていった。

塔の防衛圏のすぐ側に小さな村があった。

大きな戦争が起こる前は調査機関や駐留舞台が立ち寄り、それに栄えたと言うが、今を生きる最高齢の老人でさえ、ソレが真実であったのかは判らない。

間違いなく言えるのは、この数十年村に立ち寄ったのは盗賊の類いばかりであった、そんな先のない寂れた村である。

そんな村に、小さな事件が起こる。

村の若者が、半死半生の亜人を拾って帰ったのである。

その姿は、まるで絵画より現れたかのような美しい女性であり、

清らかな鈴の如き声色で慈悲を請うが、その肌の色は病的なまでに白く、染め上げたような藍の長髪をなびかせるその頭からは、その細腕と同じ太さの、闇夜の如き黒さの中に鈍い輝きを放つ、1対の角が生えていた。

涙ながらに助けを求めるその亜人の女を見た村の長は、こう言った。

『人でないのであれば、どのように扱っても構うまい』

こうしてライゼランと名乗る亜人の女は、村の隅の朽ちかけた廃屋の地下に繋がれ、負の感情のはけ口として、人の道にもとる扱いを受ける事となる。

彼らは気付くべきだったのだ。

鉄の鎖で繋げるような無力な亜人など、皆無である事を。

自ら名乗るような亜人の常識からも外れた存在に、人の世の常識など通るはずがないと。

そんな事件の数カ月後の事、村が野盗の群れに囲まれた。

村の者は抵抗する事無く食料を差し出したが、野盗はそれだけでは足りぬと言つて剣を手に襲い掛かり 突如火達磨になり、1人残らず灰となった。

なぜ、こんな事が？ 何とも説明のつかぬ事態に村の者達は訝しがったが、地下の片隅で折れた角を胸元に抱え泣いている“はずの”亜人の事など、頭には上らなかつた。

またある時、戦乱の果てに傭兵崩れに落ちぶれた一国の軍隊が、村の全ての物資を奪わんとして襲い来た。

村は慈悲を求めたが、傭兵達は『もはや我等にはこれしか出来ぬのだ』と嘆きながら襲撃の構えを整え、空より降って湧いた巨大な化鳥が放つ一条の光に飲み込まれ、消えた。

まさか、あの亜人の女が？ いや、今も水に沈んで意識を失い痙攣している“であろう”アレが、我等を助けるはずがない。

その後も同じような事が起こる度、村の人間は自らの心に滲んだ疑問を黙殺した。

だから、亜人が徐々にその力を回復している事実を見落とした。

そして、ライゼランが繋がれてより数年後、村に重大な問題が発生する。

唯一の水源が涸れたのである。

もはやこの地を捨て、別の場所に移住せねばならない。

ならば、不要な亜人も処分せねばならないが、まずは身の回りを整えねば。

翌日、遙か彼方、名も知らぬ大河よりの支流が、村の側に現れた。

もはや元凶は明らかだ。この村には地形を変える大規模魔術の使い手など、あの亜人以外に存在し得ない。

村の長達は廃屋の地下へと向かい、若い衆に腕を切り落とされて震えているライゼランを見つける。

なんと言う事を！ 詰め寄る長に、剣を持った若い男が答えた。

この程度なら、夜には治っているのだ……と。

若い男達を追い出すと、困った顔で落とされた腕をもてあそぶ彼女に、長は問いかけた。

『なぜ、ここに留まっているのか』

ライゼランは微笑むと、瞬く間に腕を繋げ、囁くように言った。

『皆様が楽しませてくださるので、失った力を落ち着いて癒せました。ですから、お礼をさせてほしいのです』

長は彼女を誰とも接触出来ぬよう、牢に隔離した。

村の意見は完全に割れた。

穩健派曰く、彼女に非礼を詫びて、その助力を受けながら生きべきである。

どうせ彼女の力がなければ死んでいた身、彼女に全てを委ねれば、我々を悪く扱う事はないのではなからうか？

過激派曰く、彼女が我々を許す道理がない。殺される前に殺すべきである。

我等の行いを思い返せば許されるはずがないのだ。たとえ一時彼女と共に過ごす時期があろうとも、いずれ彼女は何らかの方法で復讐を果たすに違いあるまい。

どちらも自分の命が懸かっており、引く事は出来ない。このまま村は、2つに分かれるかと思われた。

そんな時、状況を一変する事態が起こる。

村民の苦悩など知らずに牢を抜け出して、若い衆の下に遊びに行

ったライゼランが、過激派に捕まったのだ。

彼らはライゼランが2度と復活せぬように、原形をとどめぬまでに破壊する。

その際に本性を現した彼女のセリフがある。

『挽き肉になるまで、ですか？ わぁ、何だか楽しそう！』

3分で復活すると、鈍器を持ったまま固まる男達を見て、困った顔で尋ねた。

『あの……再生が早すぎましたか？ それとも、すぐ再生して何度も繰り返す方が、お好みですか？』

穏健派は彼女を自由にさせる事とし、過激派は次なる策を弄する。

聖剣と呼ばれる剣を持つ者が彼女を封印せんとするも、無抵抗の彼女を相手に何一つ有効な攻撃を繰り返す事がかなわずに倒れた。疲労であったという。

大賢者と呼ばれる魔道士が5人の弟子の生命を持って封印を取り仕切るも、ライゼランを僅かに揺らがせる事も出来ず、彼女の力で蘇生させた弟子を引き連れて逃げ帰った。

大戦より立ち直った東の大国が師団を引き連れやって来るも、彼女の全面協力のもと、半年の試行錯誤の末に出した声明は『ライゼランなる亜人はそもそも存在していなかった』である。

東の大国が撤退し、過激派が彼女の抹殺を諦めた頃であろうか。

ライゼランは、村の側にある塔の防衛機構を掌握し、ラグナロクにおいて亜人原種と対等以上の戦闘を繰り返した機械人形の群れを

支配下に置いた。

ライゼランが村に求めた事はたった1つ『ここで静かに過ごしたい』と言う事であり、防衛も自分と塔が勝手に行うので安心して良いたとも言った。

長は彼女の要求を呑み、その証として村の名を『ライゼラン』と変えた。

彼女を知らぬ野盗の群れや、ライゼランを否定せんとする国家が攻め寄る事もありはしたが、彼女は包丁1本で相手方に乗り込み、その絶望的な力を見せ付けるだけで引き上げさせた。

彼女の交渉手段は単純明快である。

敵対勢力の実動部隊を相手にはせずに、首魁、為政者、王の前へ突如現れ、こう告げる。

『貴方の側で1日待ちます。その後、貴方の意思が変わらないのであれば、戦争しましょう』

それだけを言って、彼女は刃物片手に相手の側に立つ。決して離れない。何をされようと抵抗せずに、ただ側にいるだけ。

当然相手は、あらゆる手段を使って彼女から離れようとするが、いずれ不可能と知る。

排除せんと武器を振るえば、更なる無力感を思い知る事となる。無言のまま笑顔で寄り添う、彼女の眼球にすらも傷が付けられずに東の大国が半年の時間を費やして全てを諦めた存在が、意思を持って相手の全てを拒絶すれば、有効な手段など何もあるわけがないのだ。

彼女を無視して村を攻めようにも、次の瞬間村は光が歪むほどの防壁に囲まれてしまい、視界に入れる事すら叶わなくなる。

半日諦めなければ、日光を閉ざすほどに上空を埋め尽くす、機械人形の群れを見る事が出来るだろう。

その先を見るまで耐えた人間は、少なくとも記録の上には存在しない。

やがて周辺諸国にとってライゼランの村は、下手に潰せば彼女自身が侵攻を開始しかねない火薬庫と映るようになり、その恩恵にあずかろうとする周辺の町に対しても、手出しを躊躇われるものにならなかった。

その後も彼女は主に抑止力として村とその周辺の発展に多大な功績を残し、400年後の現在でも、今や都市となった町の飲食店でタダ酒飲んでくだを巻いているのだ。

3番氏はこの町の近くに俺達を下ろしてくれたので、まだ昼も回っていない。

そして、目の前に広がる町の、更に向こうを見上げる。

そこには、おそらくこの旅の終着点であろう白磁の塔がそびえている。

遠くから見ても巨大であった塔は、今や壁にしか見えない。

ついにココまで辿り着いたぞ、と感慨にふけている俺を、入場門に並んだイスルギとカグヤが呼ぶ声が聞こえた。

どいつもこいつもデリカシーってもんが解らん奴らだ。

「リュウジの剣がないと入場料取られちゃうんだから、ちゃんと一

緒にいてよね？」

「解りましたよーっと」

2人の横に並ぶ。

「しっかし本当に警備が少ないんですね」

ちょっと肉体強化の魔法を使えば簡単に不法侵入出来そうだ。

「それでもないぞ？ 上を見てみる」

イスルギに言われ空を見る。カグヤも一緒にだ。

「何もないよー？」

「見えないか？ でっかい羽付けた箱が2つ、ここいら辺を監視してる」

「……ホントにい？ そんなん見えないよ？」

………衛星？

「もしかして、金色でシワシワの箱に黒くて四角い羽が付いてるんですか？」

「いや、全然違うけど……お、手え振ってきた」

一体何が見えてるんだ。

青空に手を振るイスルギを諦めて前を見る。

入り口では警備の機械人形が未恐ろしいスピードで列を裁いている。

慣れてる人は笑いながらハイタッチとかしてるけど、そうじゃない人はビビりまくってる。

だって警備員さんの身長3mくらいだぜ？ 俺も既にちよつと怖い。

「ところでカグヤ？」

「んー？」

「ふと思っただが、ライゼランって、味覚あるのかな？」

「昼間っから酒飲んでるって話だから、あるんじゃないかな」

そうか。そうだよな。

「俺の魔力は、美味しそうに見えるのかな？」

「……………アタシの最高傑作、だからね」

おいおいおい、そこは否定してくれよ。

1 国相手に無双出来る亜人が、2 番みたいに正気を失ったら洒落になんねえぞ？

「下手に気に入られて搾り取られるなんてないよな？ 勘弁してくれよ？」

カグヤは目をそらす。

「ま、まあ大丈夫なんじゃないかな？ 腐っても町の象徴的存在だし」

「目を見て話すんだ」

「……………くっ！」

ライゼランの2つ名として有名なのは『藍のお嬢様』だが、それ以外は碌でもない呼ばれ方が多い。主に性的な意味で。

子供が知っていたのが『万人切』『両刀使い』『ハードM』等な

ど。

彼女が本格的な無敵ぶりを発揮し始めるのは、隔離された牢屋を抜けるところから始まるが、その時に向かおうとした行き先は自分を切りつけた『ご主人様』の下で、理由は『もつと遊んで欲しかった』からだと言う。

自由の身になって虐めて貰えなくなつてからは、夜な夜な思春期の少年少女の部屋に忍び込んで、夜の勉強会をやっていたとか。いや、やっているとか。

そんな面白超人に捕まったら何されるか判つたもんじゃない。それこそ『わたしの ぼうけんは ここでおわつて』しまう。

「もしもの事があつたら、俺の事助けてくださいよ？」

「俺とカグヤじゃどうにもならんよ」

「イスルギい……じゃあ町に入らないで直接塔に向かつたほうが……」

「ソレも無理だろうな。単体で原種の亜人と真正面から殴りあえる防衛機構が、連隊組んで阻止に来るんだぞ？ それをいなせる生物なんてお嬢様本人ぐらいだ」

「なんでそんなのが性格破綻者っぽい噂ばら撒かれてんですか……」
「名前持ちの亜人なんて、そんなもんだろ」

イスルギは気楽に言う。

まあ確かに、こんなところでグダグダ言つても始まらないけどさあ。

「気をしっかり持ってつて、お嬢様が今まで攻勢に出た記録はないんだ。エロと町が絡まなきゃ意外と無茶をする性格じゃなさそうだ」

イスルギから見てもエロは譲れないラインなのか。

でもライゼランにとって無茶じゃない事が、俺にとっても同じよ

うに思えるかは、別だよね？

全力で後ろ向きになっている俺にイスルギが止めをさす。

「一般人である俺らがあの塔に近づくには、お嬢様の防衛機構に許可をもらわなきゃならん訳だ。2日3日は覚悟しておけ」

「ですよねー……」

俺は絶望的な気持ちで町に入った。

塔に寄り添う城塞都市にて、昔語りを思い出す（後書き）

性格が穏やかっぽくなったら逆にヤバイ人になった。

違う魔が時の雑踏に紛れ、世の深遠と遭遇す

「黒装束さーん！」

町に入ったのでとりあえず呼んでみた。

「うーす」

何だこの軽い挨拶。

影から滲み出てきたのは浴衣のお兄さんだった。

「リュウジ様？ もう少し場所を選んで呼んでくださいよ」

「まさか本当に来てくれるとは思わなくて……」

ここは素直に謝る。

「それで、何かご用ですか？」

「藍のお嬢様は今どちらにおられるのか解りますか？」

せつかく早い時間に到着したのだから、今日1日を自由行動にして明日お嬢様に会いに行きたい。

「ええと……レストランの窓際席で飲んできてますけど」

「すげえ、伝説は本当だったのか。」

「だがそれを聞いて俺のなすべき事も判った。」

「彼女に会わないようなお勧めの宿を教えてください！」

酔っ払いがちよっかい出してくる前に町を堪能してしまおう作戦。完璧だ。ついている隙のないパーフェクトな作戦だ。

「お前も必死なんだな」

「そこまで怖がる必要もないと思うんだけどねえ」

お気楽2人組が何か言ってるが気にせず、俺は黒装束お勧めの宿に向かった。

今回も酒場に宿屋が乗ったテンプレート構成のリーズナブルな宿である。

イスルギはメニューに例のビールを発見すると、おもむろにカウンターに座る。

あのアル中はもうダメだ。

流石にカグヤは日の高いうちから飲んだりはしないと云うので、カグヤと2人で町に出る事となった。

そして町の中央に向かい、適当に飲み食いしながら店を冷やかに回った。

そして日が暮れる頃に

「リュウジ様！」

黒装束浴衣の人の声に振り返る。

彼は通りの向こうで誰かに背中を押されて、つんのめっていた。

おいおい、凄腕者集団の中で自分のスタイルを通せるレベルの人間を不意打ち出来るって、どんな奴だよ。

たたらを踏む彼の後ろで、上半身を思いっきり前に倒して、更にソコから両手を伸ばした女性が見えた。彼女が押したのか？ だとすれば、あんなふざけた動きでシオウの影から背後を取れる超凄腕って事だ。

その女の顔は見えないが、フワリとなびく長髪は深い海の色。耳

の上から伸びるのは

女性は顔を上げる。真つ青どころかスカイブルーの顔の中で、煌めく黄金の瞳がまっすぐ俺を見ている。そして、驚きの声をあげた。

「わぁお」

あれがライゼラン。

俺は慌てて隣のカグヤを見る。

「ちよ、えつて……えええ？」

カグヤの後ろから抱きついた格好のライゼランが目をキラキラさせて俺を見ている。

そんな馬鹿な。俺が首を90度捻るより、彼女が雑踏を避けてカグヤに奇襲を仕掛ける方が速いつてのか。

カグヤもマジでびびってる。スピードがどうかそんなレベルじゃない。

「すごいー！」

お嬢様感嘆。だがお前が凄すぎる。どうやって移動したんだ。瞬間移動か。

「ちよ、何なの突然！」

慌てて俺の後ろに逃げるカグヤ。俺もどこかに隠れたいんだが。通りの向こうに視線をやるが、浴衣の兄さんは既に消えていた。

「凄いね貴方！ 養殖物を入れてる人って初めて見ました！」

養殖物って言い方はどうかと思うが、今までのどの魔眼持ちより適切な言い方をされた感じがする。突然の出現に驚かされたが、その見識から察すると伊達に長生きしてないようだ。

俺は一つ深呼吸をすると、営業用スマイルでお嬢様に向き直る

「こんにちは、ライゼラン様でいらっしやいますか？ 私どもに何かご用件でしょうか？」

「そんなに堅苦しくなさらずに。タメでOKですから」

笑顔でパタパタと手を振る。軽いノリだな。

「はあ、さようで……」

「某商会の裏方さんが急に活動を始めたので、ちょっと指揮系統と観察しちゃいましたよ。良い物を見せていただきました」

「あはははは」

湯いた笑いを響かせながら、彼女の全体像を見る。

ほんのり青い肌に藍色の髪、黒光りする角。ゲームやアニメから出てきたんじゃないかと疑いたくなるような、強烈にメリハリをきかせたグラビア体型。

彼女はその男受けする体型つてのを、着丈が脇腹まで届かないエリ付きの白いノースリーブシャツと、無駄にローライズしたデニムのホットパンツ？ ショートパンツ？ まあそんな感じの衣装に押し込んでる。

この世界に來た当初の俺以上に、世界観から逸脱した服装だ。

一言で言い表すなら“エロ衣装”だろう。

どんな罰ゲームだ。首輪までしてるし……俺も翻訳機着けばだつたな。

「ところで貴方のお名前は？」

「あ、リュウジです。こっちはカグヤ」

揃っておじぎする。

「これはご丁寧」

向こうも頭を下げる。そして真面目な顔で聞いてきた。

「ところでカグヤさん。ちょっとよろしいでしょうか？」

「どうぞご自由に」

カグヤが俺を押し出す。何だこのテンポの良さは。

「え？ ちょっと！」

「わあい！ じゃあ明日の朝には返しますね？」

お嬢様は嬉しそうに言うのと抱き付いてきた。優しくつかまれているのに全然動けない。

この人、純粹な筋力だけで魔力ブースト全開の俺より遥かに強い！
気楽なノリに油断したけど、コレが本物の規格外ってやつか！

「ちょっと待ってください！ 俺にも心の準備が！」

慌てる俺の耳元で悪魔が囁く。

「大丈夫、夜はまだ始まってもないんですから」

「ちょ、カグヤ！」

「……グッドラック」

クソッ！ 幸運を祈って何で敬礼すんだ！？

だが、それ以上のセリフが口から出る前に、お嬢様が俺を転送してしまった。

その後色々ありまして、今はお嬢様と二人っきりでお話しております。

状況は割愛する。

「楽しんでいただけました？」

横たわったまま、不安げな表情で見つめてくる。

「いや、400年は伊達じゃないって思い知りました」

「嬉しい！ そう言っていたら、この仕事してて良かったって思えます」

パアツと笑みがこぼれる。

まさか、個人での国家防衛が副業だとも言うつもりだろうか。

「まあ、寢床から始まる関係ってのはいかなものかと思いますが」「ええっ？……ごめんなさい。最近はいつもこんな感じだったもので……」

困ったような顔。

表情がクルクルと変わる人だ。これも400年と言う永い時間を

かけて、つちかって来た技術なのだろうか？　そう、400年もの時間。

「400年ずっとこんな事を続けて、その……飽きないんですか？」
「そうですね。でも変わらない日常って、とても素晴らしいものなんです」

彼女は微笑むが、俺とは正反対の考え方だと思う。

無限に続く平穏なんて、緩やかな死に至る病でしかない。
俺の思いに気付いたのかは判らないが、お嬢様は続ける。

「この身体になる前は、毎日が生きるか死ぬかって感じだったんです。そんなことを永く続けている内に心までおかしくなってしまう、大切な人の命を奪って仲間達に封印された事すら理解出来なくなつて、その封印から助け出してくれた人まで殺めてしまつて……」

なかなかどうしてへビーな話だな。

「でもそんな時に、恐らく彼にとっては実験でしかなかったとは思いますが……私に知性を取り戻させるプログラムを組んでくださった方がいたんです。私が心を取り戻した時にはすでに他界されていたんですけれど、彼のくれた身体と知識を使えば、魔力は元々無限に持っていましたから」

無限って……気軽に凄い事言ってくれるなあ。でも

「それで付いた2つ名が『ハードM』ですか？」

お嬢様の顔が真っ赤になる。

「そ、それはっ……その、仕方なかったんです！ 封印の外に出て立ち上がる事も出来ないときにいきなり捕まっちゃってあんな……あんな地下室で強引にされちゃったら……楽しくって」

俺の事をギュッと抱きしめて蕩けたような、期待するような瞳でこちらを見つめてくる。

「やりませんからね」

「そんな……何事も経験ですよ？ このチャンスを逃すと獵奇プレイとか出来ませんし、皆さん私が良い声で泣くって、とても褒めてくださるんですよ？」

そのピーラーを使って、どのようなプレイをするんですか？

おおっ……ちよつと背中がゾクゾクするよ。

獵奇プレイだけは何としても諦めてもらわないと、俺のメンタルが持たない。一生懸命語るのを、はいはいと強引に流して諦めさせる。

「じゃあ、試したくなったらいつでも言うてくださいね？ で、何のお話でしたっけ？」

「取り留めのない話ですね」

お嬢様は「そっかー」なんて言いながら俺の背に指を這わせる。まだやる気が。と、俺は今更ながら違和感に気付いた。

「そう言えばライゼランって、本の中だと真っ白い肌じゃありませんでした？」

今、お嬢様の素肌は澄んだ空の色をしている。

「ああ、様子見の時はお肌の色をいじってるんです。初体験で変な性癖持たせちゃったら可哀想でしょ？　そもそも髪の色だけで『藍の』なんて呼ばれる訳がないとおもいませんか？」

「実は俺、俺……」

「……………ええ!？」

背中の指がぎこちなく動き、離れるのを感じる。ほんの少しの間をおいて戻ってきた手は、そつと優しく俺の背を叩いた。

「きつといい事ありますって」

軽いなあ。

「今更お肌の色を変えたところで……ううん、その方が新鮮味があつて滾たぎりますよね!？　お望みでしたら日焼け跡だつて作れちゃいます!　リュウジさんはどんな感じがお好みですか？」

「も、もうちょっと休みませんか？」

「うっふふー、夜はまだ長いんですよー？」

翌朝、ライゼランを連れて宿に帰る。俺は意外と元気だった。

『今夜は寝かせてあげないぞ?』みたいな事を言いながらも、うまい具合に俺の体力を見極めて楽しませて来るその技術力は、ただ情性で生きるだけではけして身に付かない物であろう。

世界が恐れる力の持ち主が、なぜそこまで他人への奉仕を極めよ

うと思うのか。

……まあ、ただでさえ亜人の、それも名前持ちの異性が考える事なんて、俺の理解の範疇にはないのだろう。

部屋に入ると、イスルギとカグヤが待機していた。

「リュウジ！ 本当に心配したんだよ？ 無事でよかった……」

涙目で近寄ってくるカグヤ。の、肩をつかみ、じっと目を見る。

「……………くっ！」

俺の勝ちのようだ。

「せっかくライゼラン殿が来てくれたんだから、バカやってないで話を進めるぞ」

互いに自己紹介を済ませると、イスルギがさっそく本題をきり出した。

「それでライゼラン殿、リュウジから話は聞いておりますか？」

「いえ全然」

あまりの急展開で忘れていたが、そんな話もあつたな。

イスルギがため息をついて俺を見る。そして俺をかばうお嬢様。

「許してあげてください！ 私が無理矢理あんな事をしてしまったから……罰なら全て私が受けますので！」

おもむろに脱ぎ始める。

「脱がないでください」

「え……」

彼女の服を直しながらお嬢様に説明する。

要約すると、塔に行きたいんで防衛機構を操作して？ だ。

「私も楽しませてもらいましたし、守備隊の操作程度ならたやすい事です。でも、そんなところに行つて何するんです？ 起動中の塔は自分が認めた者にしか侵入を許しませんよ？ 私の権限では入り口を開ける事も出来ませんし」

元の世界に帰れるか試してみたいです……なんて言えないから適当に答えてみる。

「俺が行けば入れるんじゃないかと思ひまして」

「それはないと思うよ」

カグヤの厳しいツツコミが入る。だがお嬢様の答えは違った。

「まあ、実際に皆さんが行けば開くんですけどね」

え？ 嘘、全力でツツコミ待ちだったんですけど？

カグヤもビツクリしてる。

「嘘お？ 何で？」

「三者三様に理由がありますから」

口が開いたままのカグヤに、当然であるかの如く答える。

俺はまあ理由があるのは解る。

カグヤはその知識が塔に関わるのかもしれない。

イスルギも……成る程、全員訳ありって事か。と言うかココに来て正解だったようだ。

「ほう。ならいつ頃許可をいただけますかな？」

「準備が終わるまで少し時間をいただきますから、午後には」

動揺を見せないイスルギと、笑顔で話を進めるお嬢様。

お嬢様はいいとしてもイスルギの余裕はおかしい。一体彼は何者だ？

「でも、皆さんの実力を確認しないでお通しするのもつまらないですよね……」

悪戯っぽい笑みで俺達を見渡すお嬢様。

「なら、いくらでもお見せいたしましょう？」

ニヤリと笑い返すイスルギ。

……もうイスルギとライゼランの2人で話し合えばいいと思うよ。

『お昼ご飯が終わったら西の入り口に来てください』

ライゼランはそう言って帰っていったので、宿の食堂で各々昼飯を頼みながら作戦会議をする事となった。

とは言えメニューが少ないから、個性が出るのはドリンクのみだ。

「昨日のエールを」

「ガリバルデイ」

「スクリュードライバー、ウォツカ抜きで」

すぐさま運ばれるジョッキとオレンジジュース2杯。

「くっ……これだから、キコウ都市国家群は……」

カグヤが悲しみに震えている。

「何するか判んないのに酒なんて飲むなって」

俺がカグヤを慰める間にジョッキを空けたイスルギが断言する。

「実力を見たいって事はやっぱり、戦いぶりを見たいんだと思っていいんだよ」

ならますます酒なんか飲んでる場合じゃなくね？

「じゃあ機械人形とやり合う事になるのかな？ アタシ、あれとは戦った事ないんだけど」

「それならまともな実戦経験皆無な俺はどうなるんだよ」

「……訓練したじゃん？ 余裕余裕！」

バンバン背中を叩いてくる。人事だと思いやがって。

「まあ向こうもそんな凶悪なのを出してはこんだろ。2人共気楽に行っとけ」

「イスルギの余裕はどこから来るんですか……」

「人生ダメなときは何やってもダメなんだろう？　なら出来るときは何もしなくても出来るんだよ」

前向きなのか後ろ向きなのかよく解らん。

その後も会議と言うにはあまりにも適当な雑談と精神論が繰り広げられ、結局作戦は『現場の柔軟な判断で臨機応変に頑張る』でまとまった。

世界を揺るがす2人の戦士、天の使いを圧倒す

食事を終えて指定場所に向かうと、当然ながらお嬢様が待っていた。

その周りには彼女が何かする事に気付いたのであるう、暇な奴らが観客として数名。

「はいお待ちして……って、イスルギさん？」

俺に背負われたイスルギは、多分顔面蒼白になっているはずだ。

「……飲み過ぎた……」

調子に乗りすぎたとしても程がある。

いつもよりだいぶペースが早かったから、じつは緊張してたのかもしれないが、それでもコレはないだろう……

お嬢様が、イスルギを膝枕で介抱しながらルール説明をする。

「皆さんには塔の兵器と一対一で戦っていただきます。破壊して構いませんし周辺に被害は出させませんので、全力でやっつけちゃってください」

「『出させません』って凄い自信だけど、どこまで大丈夫なの？」

カグヤが聞く。彼女の戦法は魔法主体だろうから結構重要ところだろう。

うっかり町に被害が出たら洒落にならないし。

「カグヤさんご自身が町の中に入ったりされなければ、魔法効果は全て私がどうにでも出来ます」

「え〜と……じゃあ半径数キロにわたって更地にしちゃうようなの使っても？」

「その程度でしたら問題ありません」

お嬢様は笑顔で答える。まるで問題にしていない。

だが、そんな事を聞いたと言う事はカグヤも一撃で決める気のないのだ。

「……酒……抜いて……」

アレはもう頼りにならない。

「じゃあ俺からって事で」

「ああゴメンなさい、リュウジさんの相手は準備がありました」

おいこれは、また俺がトラウマ作成する展開じゃないだろうな？

「なら、アタシからだね？ 国を挙げて子ども扱いされる悲しみを叩きつけてあげよう」

カグヤが前に出る。

手を組んでバキバキ指を鳴らす 仕草をするのに音が鳴ってないのが微笑ましい。

「では、カグヤさんの相手はこちらになります」

お嬢様が手を向けた先に、等身大デッサン人形が落ちてくる。

どこから降ってきたのかと上を見上げると、デッサン人形の飛行機が飛んでいる。あそこでずっと合図を待っていたのかよ。

人形は華麗に着地すると簡単な演舞を披露、ビシッと構えて静止する。

観客から拍手が飛んだ。

「機動力重視の格闘タイプです。カッコいいでしょう?」

もしかして、彼女の趣味か。

「カグヤ、いけそう?」

俺が聞くと、カグヤは余裕の笑みを浮かべる。

「本気になった私に機動性なんて意味ないんだよ」

まあ確かに彼女の魔法は底が知れないから、範囲攻撃で一撃かもな。

俺はお嬢様の後ろに下がる。

「では、開始してください」

合図の後カグヤと人形は動かない。

「何？ こつちからやっていいの？」

カグヤが右手を人形に向ける。掌に光が集い……
ふっとんだ。

カグヤは地面と平行に20mほど飛んで行き、ゴロゴロ転がって止まる。

彼女がいた場所にて、蹴りぬいたポーズで止まった人形の、頭の向きだけが彼女の動きを追っていた。

お嬢様が言う。

「試作機なのでリミッターが付いてないんですよ」

どんな格闘漫画かと。

カグヤはゆっくりと上半身を起こして呟く。

「何今の……」

アレで傷一つないってのも凄いなと思うが。

だが、彼女の愕然とした表情は、俺の考えとは別の意味を持っていた。

「3回蹴られたんだ。寸止めされて、防御が残ってるか確かめられて、最後に当ててきた」

彼女は震えながら立ち上がる。

「何なんだろう、凄くなめられてる気がする」

カグヤはかぶりを振って気を取り直すと、再び右手に魔力を集中させながら前に飛び、同じく一瞬で間合いを詰める人形と交錯する。

人形は大振りな回し蹴りをするが、彼女はソレを潜ってがら空きの腹に右手を伸ばす！

「消いえてなくなれっ！！」

その手からあふれ出す闇の奔流！

爆音と共に周囲が土煙と闇の粒子に包まれ、二人の姿は見えなくなる。

こちらにまで届いた衝撃が、観客を守る巨大な防御結界を僅かに揺らしている。

「……すげえ」

てか黒い光つて発想がなかった。

どんな効果があるのか知らないが、それがなんであれ、あの量が当たったらお終いだらう。

そんな事を考えていると、お嬢様が軽く手を横にふった。

土煙が割れていき、戦場の中心が見えてくると

黒い光を打ち出した姿勢のまま動かないカグヤと、伸ばされた彼女の腕に乗って逆立ちしている人形がいた。

人形はヒラリと地面に降りると、バク転しながら距離をとって、構えた。

両者の距離は、3m程度か。

カグヤは無表情でパンパンと頬を叩き、大きく深呼吸する。そして

「おい、ふざけてんのか？ アタシをおちよくって……ああ、駄目だ、殺す」

もつ言葉にならないって感じでキレた。

それに対して人形が示した反応は1つ。

右手を前に出し、掌を天に向けると、指を揃えてこう……クイク
イット。

……アレだ、『御託はいいからかかって来いよ』のポーズだ。

「ふ……ふふふ……殺して殺す」

カグヤさんめっちゃ怖いわー。

そしてカグヤは空を見上げ、ただ一言だけ、叫んだ。

「ふっざっつけんぬあああああああああああああ……!!!!」

次の瞬間彼女の雄叫びに負けない轟音が響き、人形が消えた。いや、人形だけじゃない。カグヤを中心とした半径20mの地面が、深さにして3mほど陥没したのだ。

陥没した地面を見やると、人形は半ば埋もれる形で、上から踏み潰した空き缶のように潰れて動かなくなっていた。

顔を真っ赤にしたカグヤは手早く地均しを終えると、小走りで帰ってきた。
なんか増えてる野次馬達の拍手につつまれる。

「……恥ずかしい、人が見てたのにあんな事言っちゃうなんて……」

うつむいたまま、しゃがみこんでしまったカグヤを、復活したイ
スルギが迎える。

「昔よりはだいぶ落ち着いてるぞ。たまに見せるぐらいなら、むし

る可愛いから安心しとけ」

ガシガシと頭を撫でてやるイスルギ。
いいカップルじゃないか。俺にも機会を与えてほしいもんだ。
お嬢様はちよつとしょんぼりしている。

「本気を見たかったのに……」

まさか一撃で終わるとは思わなかったんだろう。でもアレ本気じゃなかったのか？

そんな彼女にイスルギが声をかける。

「ライゼラン殿、俺の相手は何かな？」

「へ？ えと、アレになります」

彼女の指す方向、上を見るが、鈍重な飛行機が旋回するだけで何も降りてこない。

……いや、飛行機そのものが高度を下げている気がする。

「……俺じゃ、あそこまで届かないな」

「大丈夫です、陸戦形態になりますので」

そんな話をする間にも飛行機は　アレでかくね？

「お互い楽しめるといいんだがな」

「あんまり不安にさせないでください……」

イスルギは背負っていた鉄塊のような両手剣を持つと、前に出た。

地面をえぐりながら着地した元円盤は、20mほどの楕円のモナカに四本の蟹脚をつけた、宇宙人の侵略兵器のような形になっていた。

緑豊かな草原に、砂漠仕様のデジタル迷彩が映える。すげえ目立つなおい。

楕円が、長い脚に似合わない鈍重な動きでイスルギを正面に捉える。その先端から石臼のような音と共に巨大な砲塔がせり出し、イスルギを見つめた。

「アレは流石に痛そうだな」

イスルギは笑いながら楕円の足元に駆け寄ると、反応出来ないでいる巨大な右脚の内側に向け鉄塊を振り下ろし　振り上げた。

金属が軋む不快な音を立てながら、まるで何かの冗談の様に巨体が裏返る。

圧倒的な質量がひっくり返った轟音に僅かに遅れて、大地が大きく揺らいだ。

観客が程よく盛り上がる。

「これで終わる訳でもあるまい？」

このまま一気に終わらせるのかと思っただが、イスルギは距離を取った。

手早い勝利より娯楽性を重視したと言う事だろう。

楕円は暫らく脚をジタバタさせていたが、やがてソレも止まる。

前脚をぐっと縮めて、ソレを思い切り広げて地面に叩きつけると、その衝撃で何とか起き上がる。

スローモーシヨンのように前脚が地面に降りて、その衝撃が

……右の足先が折れた。

イスルギがアレを転倒させるために攻撃した部分だ。

楢円はつんのめるようにバランスを崩したが、何とかボディを水平に戻し、横を取ったイスルギを捉えようとぎこちなく旋回を始めた。

「何アレ？ 図体だけの廃棄物じゃない」

カグヤが酷評するが、お嬢様は笑顔だ。

「でも、300t近くの質量を人間1人で転がす姿なんて、滅多に見られませんよ？」

重いだろうとは思ったが、そんなにか。

「ライゼラン、流石にアレは重量過多じゃないですか？」

「そんな事ないですよ」

お嬢様はそう言うが、楢円が旋回するよりもイスルギが横を取るスピードの方が速い。徒歩で。

「……ライゼラン殿、もう終わりでいいんじゃないか!？」

イスルギが立ち止まってお嬢様に呼びかける。

「壊しちゃってくださいーい！」

お嬢様の答えを聞いたイスルギは、鉄塊を大上段に構え腰を沈める。

楢円は今だに旋回中だが、あえて見栄えの良いタイミングを待つ。そして楢円が最後の一步を終え、中央の砲塔がイスルギを狙うべく下を向いた瞬間、真正面へ跳び、その先端に鉄塊を振り下ろした。シューイン、と。

今までにない音をたてて、楢円が滑るように後退した。

鉄塊は空を切り、全身隙だらけになったイスルギの眼前に、素早く、それでいて繊細な動きで主砲の先端が向けられた。

「や」

轟音。

チャージ時間ゼロで撃ちだされた圧倒的な光が、イスルギを飲み込む。

光は徐々に収束していき、糸のように細い線となる。

だが光源のすぐ側、イスルギの居た場所は光の量が多く確認できない。

手で光を遮りながら問う。

「ライゼラン！ イスルギは！？」

「いい感じです！」

どんな感じかと。

とりあえず生きているって事だと思っておこう。

楢円から伸びる光線は未だ健在。自分ならアレをどう防いだかを考えながら眺めると、イスルギの姿が漸く見えるようになってきた。……光線を右手で受け止めている。何アレ非道い。俺には無理だ。

「魔法防御が間に合わなかったので、別の方法を使ったんでしょ
ね」

「別って？」

「恐らく、体内に遺失技術を埋め込んでいるんじゃないかと思うのですが……」

ライター知らないのにイージスの盾が作れるとか目茶苦茶だな。主砲からの光が消えて、地面に降り立ったイスルギが大きく息を吐いた。

「完全に騙されてたよ。だがもう油断はしないからな？」

そう告げると、彼は次の瞬間黒い閃光となって楯円に肉薄、剣戟を繰り出す。

イスルギが鉄塊を振るう度にその剣圧が大地すら抉り取るが、こちらも本気モードになった楯円は巧みなステップで攻撃をかわし、更には脇に付いた機銃から大量のホーミングレーザーを撒き散らす。もうなんて言うか、高速弾主体のシューティングゲーム？

秒間3発程度の射撃を弾き、回避しながら攻撃を続けるイスルギは凄いが、ジャンプすると空中で無防備になってしまう彼は、地面から離れる事が出来ずに決定打を与えられない。

「何か俺詰んでないか？」

イスルギはそんな状況でも呟く余裕があるようだ。

お嬢様から野次が飛ぶ。

「本気で行ってくださいよー！」

「あんまり見せたくないんだがなあ」

そんな事を言いながらイスルギは楯円から大きく離れた。

楯円も攻撃の手を止め、相手が次の手を準備するのを待っている。お互いに相手の本気を待ちながらの戦闘は、まるでシヨールを見せ

られているようだ。

イスルギが鉄塊を地面に刺してそつと手を添えると、刀身に鎖のように絡みついた、大量の文字が浮かび上がる。

文字が完全に鉄塊を包み込むと、ソレは光へと変わり、粒子となって空へ消えていく。

光が消えたとき、ソコには1本の直刀が残った。彼と同じ地味な色の鞘。

俺を助けてくれた時の刀だ。

「コレ使うと消耗抑えるの大変なんだよ……」

「どうせすぐ使うと思いますし、いいじゃないですか」

「やっぱりそうでしたか、塔に入ろうつてんだから覚悟はしてましたけど。でも、ココでは少しも抑ませんよ？」

2人は今後の予定について、ある程度の見通しが立っているのだろうか。

イスルギは刀を手にとると、ため息と共に鞘を抜く。

そして片手でもったソレを、適当に2〜3回振った。

そして、乱暴に鞘に戻す。

刀の鐔が鞘に当たり、涼やかな金属音が鳴った。

僅かに遅れて響いた、今度は耳障りな金属音に視線を向けると、中心から見事に両断された楕円が、倒れこんでいく最中だった。

イスルギが拍手に迎えられて戻ってきた。

「まさかココまで追い詰められるなんて思ってたな」

「ウチの小型機を両断するなんて、面白い物を見せていただきました」

「いえ、防御結界を展開してなかったから、何とかなっただけですよ」
お嬢様は笑顔だが俺には何が起こったのか解らない。
カグヤがイスルギに駆け寄って聞く。

「また鞘作るの？ 半日ももらえればやっておくけど」
「いや、今週中は必要ないな」

あの鉄塊は鞘だったのか。

「イスルギ、色々一体どうやったんです？」
「……いい剣つてのはな、射程範囲が無敵なんだ」
そんな無茶な。

「音速を超えて振るとだな、切り裂かれた空気がこうブワッて」
「成る程。空気がブワッで鋼鉄が真っ二つですね？」

教えてはくれないらしい。
多分、刀身からマジカルな何かが伸びたって事なんだろう。魔力
相変わらず万能だな。
どうせ考えたところで判らないし、今はそんな物考えてる場合で
はない。

「それでは最後にリュウジさん、前へどうぞ？」

お嬢様が笑顔で促す。

だが、俺には戦闘が始まる前に言わなくてはならない事がある。

「ライゼラン、ちょっと待ってください」

「どうしました？」

「俺には隠された能力とかないんですからね？　ちゃんと手加減してくださいよ？」

そこんところはキツチリ判っておいてほしい。

俺はあの二人とは桁が違うんだ。悪い意味で。

「大丈夫、リュウジさんの相手は2000年前の近接格闘しか出来ない人型タイプですから」

ならいいんだが……でも2000年つてのがロートルつて事が完成されてるって意味かで、だいぶ変わってくると思うんだよね。

「……ほら、来ましたよ」

お嬢様の視線の先を見ると、俺の相手が見えた。

「……ライゼラン殿、何か随分と可愛らしいのが出てきましたね」

「2000年前ですから」

「アレで格闘するの？　両腕にデッドウェイトがあるから、リュウジでも楽勝じゃない？」

「……思えば俺達つて、いつも楽観論しか言わねえのな」

俺は二人の意見に何も応えなかった。

……爆音と共に飛んできたのは、パイルバンカー装備、7割生身のメカ少女でした。

ツマの、生死をかけた戦い

パイルバンカーの人は周囲に強風を撒き散らしながら着地すると、笑顔で挨拶をしてきた。

「どうも。256番の防衛を任されてるアリスです」

なんか口調だけなら普通っぽい人だ。

つまり口調以外は普通じゃない。

大人になってショートカットになったカグヤの手足にメカパーツを着せてやるとあんな感じになるな。胸部の残念さも含めて。

レオタードの上に軍服羽織ったような格好で、腿から下が黒く輝くスレンダーなメカ脚。腕も肘から下が同じくメカ。

ただ、両の二の腕外側に、腕より太い金属製の杭と、ソレを動かすための機構がある。

杭が手の動きを妨げないように、かなり引いた状態になっているから、腕を下げた状態だと頭より上に杭の後ろが出ており、どう見てもアンバランスな重量配分に見える。

多分、自身の重量より杭の方が重いんじゃないか？

でも、重量過多系恥ずかしくないもんファツションか……イイネ！
ちなみに背負い物とか副腕は無し。ゴテゴテしてないのも実によ

ろしい。

「貴方も、塔の防衛機構の一部なんですか？」

今までの奴らとあまりにも違う外見に、思わず尋ねる。

「そうですねよ？」

ちよつと考える。

2000年前の人型兵器って、どう言った存在なんだろう。

見た目はあまり脅威とは見えないが、今までと違い対話が可能なわけだが……

その分内部構造に繊細さが求められるんだから、戦闘能力への比重が減って俺でも何とかなるのだろうか。

何とかならないと俺が何とかされて困っちゃう訳だが。

「とりあえず、さつさと始めましょうよ」

アリスはガシャガシャ手を振って俺を呼ぶ。

確かに考えても何も進まないな。

おれは促されるままに前に出た。

「じゃ、お手柔らかにお願いしますね？ 俺、強い訳じゃありませんから」

そう言いながら、俺が自分の刀を構えると、パイルの人が手を出した。

「ちよつと待って、強くないのに刀抜かなくていいの？」

「錆び付いてて抜けないんですよ」

そう言いながらポン刀を振る。

シャラリと音を立てて鞘が抜け落ちた。陽光を受けた刀身が、ギリと輝く。

「……………あれ？」

鞘を拾って眺めてみる。逆さに振ると、パラパラと鉄粉が落ちた。刀身を見て、そつと触れてみる。艶やかな輝きの中に俺の指が跡を残し、滲にじんで消えた。

「あ、昨日の内に錆は取っておきましたので」

「ライゼラン……そう言う事は先に言ったださいよ。でも、どうやったんです？」

「その刀って、魔力を持った人間が持つだけで勝手に最良の状態を維持する機能があるんですよ」

考えてみれば手入れとかやった事ないから助かるけど、魔力マジ万能だな。

「そうでしたか……でも、俺も時々持ってたんだけどなあ」

2〜3時間持つだけじゃ落ちなかつたんだらうか。

「魔力の絶対量の差ですよ。私が持った瞬間錆が全部落ちて、床が大変なことに……リュウジさんを起こす訳にもいかないし、あんなの使用者に見つかったら叱られちゃうし、もう、もう……」

お嬢様が思い出し涙目。漫画の婿養子みたいに立場の弱い決戦存在だな。

でも俺は平均的な魔力量らしいから、お嬢様パネーって事は確かだ。

俺は刀を持ちなおすと、軽く振って具合を確かめてから、パイルの人に向きなおって構えた。

「じゃ、気を取りなおしていきますか？ えー……」

「アリスって呼んでね」

「はい、アリスさん」

「……それでリュウジ君は、今度は峰打ちで私を倒すつもり？」

現在俺はそう言う持ち方をしてる。

「だってアリスさんナマモノっばいですから」

「私ナマモノじゃないから頭潰したぐらいじゃ止まんないよ？」

なんか例えがえぐいんだが。

「斬ったらオイルとか飛んで、服が汚れちゃうかもじゃないですか。止まなくても負けを認めてくださいよ」

「別に殺しあえてって訳でもないから、別にいいけど……」

言い方が悪かったか？ アリスの表情が微妙になってきた。カグヤみたいなきれ方しないといいんだが。

そんな事を考えていると、彼女は棒立ちのまま言った。

「私も本気は出さないでおこうかな」

むしろ、そうしてもらえると助かります。

そんなセリフを吐こうとした瞬間、ドドドンと爆発音がして、視界がぶれた。

「つつかまあえた」

アゴが掴まれている。何に？ 指だ。

アリスが俺の口に、右手の指を2本突っ込んでアゴの骨を掴んでいる

視界の半分が鉄杭に、もう半分がアリスの笑顔で占められている。彼女のもう片方の手が俺の頬をそつと撫でる。耳の側で、ガチャンと音がした。そして

「……つくう！」

とつさに頭を前に出す。直後に爆発音。

後頭部に何かが掠める感触があった。

展開したはずの盾が、豆腐みたいにブチ抜かれたのが解る。

頭を動かしたことで指が離れたので、慌てて距離を取って叫んだ。

「こつ……殺す気があつ！」

マジ死ぬかと思った。つーか今の奇襲はなしだろう？

そもそも実力を見たいって話なのに殺してどうすんだよ！

「戦いはいつだって理不尽なんだよ？ それに頭の1つくらい藍の字がいるから大丈夫だって」

アリスはウィンウィンと手を振って笑う。

頭1つくらい大丈夫って事は、間違いなく軽いノリで殺しに来るって訳だろう？

ますます大丈夫じゃねえよ。

俺をしとめ損ねた左腕の杭が、重い音を立ててリロードされる。視界の隅でお嬢様が俺に手を振っているのが見えた。安心させるつもりだろうか。

……これは腕の1本はへし折るつもりでやらないと死ぬな。

覚悟を決めた俺は一つ深呼吸すると、アリスのお喋りに付き合わず一気に駆け寄る。

アリスはその場で構えている。多分カウンター狙いだ。

だから彼女の3歩前で地面を切りつけ、思い切り切り上げた。

魔力制御も加えた大量の土砂がアリスの顔面に向かう。

彼女が回避行動を取った隙に……って避けない！ 前に出て来た！
急制動をかけて全力後進、距離が離れたと思った瞬間にドンッと
爆発音がして、彼女は一気に距離を詰めてきた。

2発のパイルを回避し刀身で受け流すと、今度こそ距離を、必要
以上に離す。

アリスは顔を振って土を落とすと、ニヤリと笑った。

「着けてて良かったコンタクトレンズ」

「……ないわー」

ひとまず落ち着こう。対策を考えるんだ。

アリスは何らかの方法で、一瞬だけクレイジーな推力を出せるよ
うだ。

10m程度なら文字通り瞬く間に詰めて来る。

だが、それだって今見たから判っただけで、彼女が急加速をどの
程度維持出来るかは、現状正確には把握してない訳だ。

武器は今のところ左右のパイルバンカーしか使ってこないが、あ
の脚で蹴られれば俺の盾は持つのだろうか。

……いや、弱気になるな、持たせてみせるんだ。

考えてる間にアリスはリロード終了、こちらに歩いて来る。

さーて困った。寸止めとかでカッコつけるとスルーして脇腹を打
ち抜いてきそうだ。

……なら、完全に動きを止めないとダメか。

もう色々と覚悟は決めたので、俺は引かずに構える。

ソレを見てアリスは再びドドドンと急加速、一気に間合いを詰め
てきた。

今回は距離があるから観察できたが、彼女のメカパーツにクイツ
クダッシュ用ブースターが付いているのに気付いた。

爆発音はアレが火を噴いた音だ。連発は出来ないだろうし、この距離で3連発ならソレが限界か？

右手パイルを盾で左に受け流し、左手パイルは右に避け、蹴り上げてきた左脚をギリギリの後退で回避、刀を捨てて左脚が降って来るのを肩でキャッチ！ 思いつき捻ったるあああ！！

膝からバキバキと嫌な音を出しつつつつ伏せに転倒した彼女の首筋に、素早く抜いた短剣で切りつける。刺突用だから当然切れないが、お嬢様には俺の意図が伝わるはずだ。

そしてあたふたとアリスから離れて、ライゼランに叫んだ。

「これで全力！ これで限界だから！」

「……え〜」

「目的は実力の把握であってそれ以上は余興でしょ！？」

俺は必死だ。だってアリスが俺の予想外の武器を隠し持っていて、フェイントを絡めた攻め方をしてきたら負けちゃうかもしれないし、「彼女の勝利イコール俺の1回死亡」は間違いない。

「だいたい復活したとしても魂のありかが云々で納得できなくなっちゃうよ。」

「……ゴメン、よく解んなくなってきた。」

「まあ……そうですけどお」

お嬢様はちよつと困惑顔だ。

「相手の脚をねじ切っておいて、よくそんな事が言えるもんよねえ」

声に振り向くと、アリスが座った姿勢になって俺を見ている。

「よし！ 左膝が変な方を向いてるけどリロードはしてない。」

「アリスは続いてお嬢様を見やる。」

「だけど、私が人間なら死んでたし、コレでいいんでない？」
「でもアリス、大技出す前に終わっちゃいましたし……」

お嬢様は不満そうだったが、結局アリスの敗北宣言により、無事戦闘は終了した。

まだ隠し技が残ってたとかありえん。短期決戦でマジ良かった。

アリスは関節の向きを強引に直して立ち上がると、俺に笑顔を見せた。

「まさか投げ技を使ってくるとは思わなかったわ」

「格闘技とか習ってないんで、どんな技でも相手に致命傷を与えるんです」

「成る程……そんな考え方もあるのね」

腕の方向とか安全な投げ方とか考えないからね。

関節の動きを確かめながら言う彼女の膝は、もう自己修復が済んでしまったようだ。

カグヤと戦った人形のような華麗な演舞を披露して、脚の動きを確かめている。

いつの間にか現れた2体目の人形が、観客席からおひねりを貰いはじめた。

金なんか貰ってどうするつもりだろう。警備だけじゃ給料足りないのか？

そんな事を考えながらお嬢様の隣に戻ると、俺が一番重要な事を聞く。

「ライゼラン、多少思うところはありますが、通してもらえますか？」

「仕方ありませんね、アリスがいいと考えるなら……」

そこまで言っただけでポンと手を打った。

「いい事思いつきました！ 私と一緒に行けばいいじゃないですか！」

え？……って何がいいの？

「その方が色々楽しそうですし、イスルギさんの本気も間近で見られますし……ね？」

俺に笑顔を向けられても困るんだが……

助けを求めてイスルギを見る。

「……ライゼラン殿は、町を守らなくてはならないでしょう？」

「大丈夫！ 100kmも離れてないから掌の範囲内ですし」

キロメートルの単位が軽い。

「私の欠片を残していきますから」

そう言ったお嬢様の横に光が集まったかと思うと、その光は人形作り、服装もそのままに小さな彼女になった。

つまりエロ衣装の幼女だ。

子供は親を選べない、なんて聞くが、ソレがいかに恐ろしいものか、思い知らされた気がする。

せめてお嬢様も……いや、青肌悪魔っ娘に合う子供服って何

!?…………まあい。

本体の半分くらいのサイズで固定された幼女ライゼランは、ゆっくりと自分の身体を観察すると、本体に告げる。

「んう…………ますたー！ このサイズなら新しいプレイを開拓出来る！」

「おお！ 確かにコレは大発見ですよ！」

…………こいつらがこの世界で最強の存在なんだぜ？

でも400年もあったんだから、合法ロリごっこの二度三度はやってたんじゃなくかと思ってしまう自分が、今一番くやしい。

雑念を振り払ってから幼女を見ると、彼女は笑顔でこちらを見ている事に気付いた。

何だ？ 俺の春は犯罪から始まるのか？

「……………ぷ」

笑った！ あの幼女笑いやがった！ 哀れみ全開の愉悦MAXな表情で！

畜生！ 俺が何考えてるか全部解ってやってたんだろ！？

華麗な失意体前屈を披露する俺をスルーして、カグヤがミニライゼランに近寄る。

彼女は笑顔で見返すミニを撫でながら、お嬢様にたずねる。

「こんなちっちゃい娘に町を任せて大丈夫なの？ お嬢様が残ったほうが、いいんじゃないありません？」

「そうですね？ じゃあ、そうしようかな……………」

「塔に入ったらこの娘を守ってやれるか判りませんか？ ライゼラン殿」

「ええっ!? じゃあ、じゃあ……………」

何て流されやすい世界最強だろう。
あつあう言ってるお嬢様に助け舟を出す。

「ライゼラン、この少女は弱い訳じゃないのでしょうか？　なら、ど
ちらが町に残っても問題ないのではありませんか？」

「非道い！　リュウジさんまで私に決めさせようって言うんですか
？」

「少女って……」

カグヤが何か言いたそうだが、ソコは今重要な部分じゃない。
いいから決めてもらわないと。優柔不断っぷりが最強でも誰もほ
めないぞ。

自分の身を守れるのであれば、もうどっちが来ても　と、そこ
で拳手する少女。

「さすればますたー、ワシが塔へ参ろう」

「……青肌悪魔っ娘口リ婆あは属性が多すぎて逆に駄目だろ」

「……属性つて。ぷ」

やられた！　やあられた！　まっつたやられた！！

ああ神様……俺はあの少女の操るままに踊るしかないのですか？
立てひざついて神に祈る俺をスルーして、イスルギがミニライゼ
ランにたずねた。

「何が起こるか判らんが、君は覚悟が出来てるんだな？」

「何が起きたとて僕が遅れをとるはずもないし、役目が終われば主
人の下に還るのみさ」

「おい少女、キャラはちゃんと固定しろよ」

「リュウジ君は何を言ってるんだい？　意味が解らないよ」

「ぐっはあ」

……俺は、もう、駄目だ。

転移装置、起動

結局大きなお嬢様は町に残り、ちっこい方が塔に向かう事となった。

彼女も、基本的亜人種の思考に引きずられて番号制で名乗るかと思われたが、自身をリーゼと名乗った。

でもやっぱり適当な名前だな。お嬢様の名前をちよつといじっただけじゃね？

最終ダンジョン直前で5人パーティーとなった俺達の前に、アリスが呼びだした、小型の輸送機が到着した。

外見は、どう見ても翼の面積が足りてないSF系飛行機で、あえて例えるなら『タイヤがバーニアになった装甲車』か。

……世界観間違えてね？ 2000年前は超文明だった、とか言っちゃうの？

「ここで待ってるから宿に戻って……あれ？ 誰も準備とかに戻らないの？ 別に急ぎじゃないんだから」

「ああ、俺達って、基本手ぶらなんですよ」

「だな」「だね」

「お主ら、その無計画さで良く死なんのう……」

イスルギに肩車してもらいながら呟くリーゼは、今後ロリ婆キャラでいくらしい。

名前の件と言い、なかなか常識の範疇から逸脱した感性の娘だと思っ。

宿には空っぽのリュック以外は荷物なんて何も無いから、俺達は武器だけを持つと、そのまま輸送機に乗り込んだ。

輸送機は僅かほどにも揺れる事なく浮かび上がり、塔への移動を開始する。

「ところでさあ、この後どんな展開が待ってる訳？」

カグヤはアリスに問いかける。

確かにイスルギは目的があつてココにいるようだが、彼女は詳しい事を聞いていない様だ。

「まずは、リュウジ君を本来あるべき場所に帰してあげないとね」
「お、出来るんですか。やっぱりリュックも持ってきてくりゃよかったかな？」

ちよっぴり後悔する俺……を見るカグヤの目が見開かれている。

「えっ何？ リュウジって人外とかだったの？」

「人外じゃなくて別世界の住人だと思っただけ。アリスは詳しく解るんですよね？」

解らずに送られて時空の狭間へ、とかやめてくれよ？

なお、カグヤは黙って俺の髪を1本引っこ抜くと、じつくりと観察をはじめた。

分子分解とかしてるみたいだから、異世界人と現地人の違いでも探しているんだろう。

「んー。そこんこは暗号データ以外で開示出来ない情報なのよね。私達の製作者がいれば別だけど、彼らは1万年ほど前に全滅したみたいだし」

無駄にスケールでけー。

「でもリュウジ君の戻るべき場所とかは全部把握してあるから大丈夫。向こうでは最悪の場合3ヶ月間昏睡状態だった、くらいの誤差は出るけれどもしれないと、それ以上の問題が貴方の身体に起きる事はないから」

「え？ 元の世界で問題が起こってるんですか？ 目が覚めたら『夢落ちかよ』とか言いながら筋力と魔力だけ持ち帰れてラッキー、みたいなのを想像してたんですけど」

「お主はどこまでも気楽な男じゃのう……」

「リーゼ達には言われなくなかったな」

苦笑する俺に向けて、リーゼが何か放ってきた。ソレをキャッチ。俺のリュックだ。中に何か入っているようなので、確認しておく。

「ますたーからじゃ。『忘れ物ですよ』とな。お土産入りじゃぞ」
「おおー……何コレ、センス悪い。魔道書とか？」

中に入っていたのは、ごついハードカバーの本だった。しかも全体に金メッキが施されて下品に光ってる。間違いなく真つ当な本じゃないはずだ。

「ますたーは光物が好きでの中……まあ中身は普通の創作集じゃ」
「創作集？」

「お主が主催したアレの量産見本じゃ。昨日の内にはますたーが1冊くすねてきた。元々お主にも渡される予定であったのだから、もらっておけ」

「何でこんな非道い外装に……離れるべきじゃなかったのか」

うなだれる俺にリーゼが声をかける。

「ますたーが泣いておるぞ、一生懸命夜なべしてメッキしたのに
い」と

「ライゼラン……視線を同調させているんですか？」

「待て、代わる……」 『キラキラしてた方が綺麗じゃありませんか
？』

リーゼの表情が変わった。お嬢様に“代わった”のか。
でも幼くなってるね？

「何か面白い事してますね。でもそうは言われても、コレはやりす
ぎですよ」

『でも、宝石とか埋め込む場所もないですし、水晶の中に入れたら
読めなくなっちゃいますし……』

彼女はどこに向かおうとしているのだろう。

「そのままでもいいじゃありませんか」

『そんなぁ……』 「……逃げよった。まあ、ワシもあのセンスはな
いと思うがの」

お嬢様に味方はいないのか。

と、輸送機が揺れた。外を見ると、雲海をはるか下に見る高度で
静止した輸送機の前方で、塔の外壁が開いていくのが見えた。

「こんな高いところに入り口があるんじゃ、誰も入れない訳だね」

俺と同じように外を見てカグヤが呟く。

「ココだけじゃないんだけど、せつかく高度を稼いだし、ね？」

「え〜？ 違うの……」

なんだ。俺もカグヤと同じ事考えてたのに。

そんな事をしている間に輸送機は完全に塔の中に入り、外壁が閉じる。

外壁には窓が一つもないから、残念ながらこの先外の景色を見る事は出来そうにない。

塔の内部には明かりがなく、機内が真っ暗になってしまったので、リーゼが天井に魔力の光源を生成した。

四方から伸びたアームに機体が固定されると、フロントガラスに2000と言う数字が浮き上がり、輸送機の上昇と共にソレが増加を始める。

もしかしてココ2000階だったって事？ すごい。

しかも輸送機がそのままエレベーターになっちゃったか。

と、アリスが数字の前に立つ。

「このまま最上階に向かうけど、質問はある？」

「はい。なんで俺に協力してくれるんですか？」

説明なしでサクサク事が進むのは楽だが、素直にありがとうで済ませる訳にもいかない。

アリスは可哀想な子を見る目で説明する。僅かに苦笑しながら。

「本来誰もこんな年代に来るはずじゃなかったんだよ。君がこんな場所にいるのは、使い方を良く解っていない初心者の操作ミス」

なんと云う事だろう。ついつつかりで俺はココに放り込まれたのか。

「ミスした人達はずっと昔に亡くなっているから、気付いたこっち

で君を本来あるべき場所に戻してあげようと思って」

「うっわ……なら、その初心者って誰なんです？」

「そこらへんの詳しい事情は知らないのよね、議事録とかも取らなかったみたいだし。多分君がこんな事になってるなんて気付いてすらないと思うよ」

「うわーうわー……」

勇者とかそんなレベルじゃねえぞ。しかも俺を召喚した人間はもうこの世にいらなくなって？

マジで俺ココにいる意味ないじゃん……

何かもうどうでもいいやって気分になってきたよ。

正面の階層表示はなんかから桁になってるし、もう好きにしろって感じだ。

アリスに誰かが質問してるけど右から左について感じで聞き流されちゃう……って！

「何？ カグヤ記憶なかったん！？」

「まだリユウジには言ってたなかった？」

全然聞いてねえし、流石にソレは聞き流せないだろ。

カグヤはイスルギの胸に飛び込んだ格好で、目を輝かせながら答えてくれたが、すぐイスルギに視線を戻す。

「でも、イスルギがアタシの事考えてココまで来てくれたなんて、考えもしなかったよ」

「記憶が戻ったほうが楽しそうだからな。で、戻せるのか？」

カグヤにされるがままの状態で、イスルギはアリスに問いかけた。アリスの表情は変わらなかったが、回答は明快。

「もちろん」

「ヤダどうしよう、今までイスルギの事ネジが全部外れたやばい人だと思ってたのに。まさかアタシのためだったなんて！」

カグヤ、身体全体で感謝と喜びを表現してるけど、口にしちゃう駄目なセリフがこぼれてる。

「いや、お前の目に狂いはないよ。何にしても、ココに来たのは正解だったようだな」

イスルギは否定しないのな。

大型犬でも相手するみたいにかぐやをガシガシ撫でてやってる。

ソレを眺めるリーゼは微妙な表情だけど……

俺は背後からリーゼに忍び寄り、耳元で囁く。

「どうした？ リーゼも撫でて欲しいの？」

「まさか。ワシがそんなあふあぁん……いきなり角を掴むなあ！」

「弱点もマスターと同じ」

「わー！ わー！ 貴様、貴様あー！！」

俺のセリフに叫び声をかぶせながら、両手を大きく振り回すリーゼ。

カグヤは嬉しさで何も聞こえない状態だろうから問題ないし、イスルギとアリスは気にしないだろうから、恥ずかしがらなくて大丈夫だと思うけど。

「ところで、もうすぐ最上階だけど、もう質問はないの？」

そんなアリスの声に階層表示を見ると、1万9千と少々になっていた。

きり良く2万階建てとか？

他に質問者がいないようなので、せっかくだし俺が疑問を投げかける。

「しっかし外見から判っていましたけど、凄い高さですね？」

「埋まつてる部分も入れれば、全長は120km以上あるからね」

「中身は何なんです？」

「うーん……NGワードを避けて言うのであれば、“世界”かな」

「ああ、なんとなく解った気がします」

この塔は恐らく、アリスの製作者達が造った巨大なシエルターなのだろう。

ラグナロクより更に昔に起きた、歴史から消えてしまった戦争で、英知を結集したシエルターに逃げ込んだ人間が全滅したのではないだろうか。

皮肉にもシエルターの外に捨て置かれた者だけが生き残り、生存者なきシエルターを守るガードメカを止める術を持たない彼らは、やがて各地に点在するこの巨大な建造物が、何のために造られた物であるかも忘れてしまった。

……うん、正解には当たらずも遠からず、くらいには来てるんじゃないかな。

アリスは僅かに笑うと、背後の階層表示を見やる。

20000

数字はもう動いていない。

モーター音と共に輸送機の扉が開き、更にその向こうにあるエレベーターの扉も開く。

流石に扉の先には明かりが点いている。

ソコは、天井がドームになった、野球場のように広いホールにな

っていた。

その中心に、増設を繰り返して外観が目茶苦茶になった、巨大なパソコンのようなものが置いてある。

そして、PCの側に立っているのは

「お待ちしてました、ココが君達の願いを叶える場所です」

アリス。

輸送機の中に1人、PCの側に1人。

「どうも。256番の中央管制を任せとりますアリスです」

「……せめて、名前は変えろよ」

「昔は1人だったのよ。でも、権限の一極集中は危険だって気付いて。でもやっぱり元は1人のアリス、改名は嫌だって事で、気がつけばアリスが1ダース。他のアリスも呼ぶ？」

「いやいいから」

管制アリスと防衛アリスが並ぶと、人間部分は全く同じ外装になっ
っているのが解る。

違いは肘から先の部分だけらしい。

防衛アリスは武器を装着するハードポイントが付いており、管制
アリスには隠し腕のようなサブアームが内蔵されている。

現在、防衛のハードポイントには、何も装着されていない。

「じゃあ、リユウジ君からチャッチャとやるとしよつか」

管制がそう言うと、床が開いて大きなカプセルがせり上がって来

た。

立ったまま入る、映画で中の怪物が突然目を覚まして飛び出してくるようなアレだ。

「この中に入るんですか？ 失敗とかしませんよね？」

「ん？ 分裂とか合体とか、する？」

「冗談でもやめて……」

カプセルの前面、ガラスの蓋がスライドする。

後は俺が入るだけ。

「そつだリュウジ君、持ち帰る物には限度があるんだ。刀とリュウクの中身だけが持てるよ」

「こつちの剣はダメなんですか？」

入場無料ソードを見せる。

答えてくれたのはリーゼだった。

「家紋付きの剣が行方知れずとなれば、誰かが責任を取らねばならん。ワシからシオウに返してやろう」

成る程。バイトに迷惑かける訳にもいかないし……

「……なんじゃ？」

はよう渡せと手を踊らせるリーゼを見ながら考える。

お嬢様とシオウの関係って、良好なのかな？

この世界の権力者達の利害関係って、全然解ってないんだよね。

かと言って他の人に渡しても………まいつか。

リーゼに剣を渡し、彼女はソレを両手で抱えこんだのを確認する

と、管制に聞く。

「リュックに入れたものが、持って帰れるんですね？」

「だね。チャックは閉じてね」

剣。
それを聞いて荷物を整理。リュックに入れたのは創作集と骨の短

翻訳の首輪はどうするか。悩んだところにリーゼが言う。

「それは要らんじゃろ。元の世界での使い道などなかるう？ それに、あの機械に入ってから転送が始まるまで、リュウジが考える以上の時間が必要じゃ。その間ワシらの戯れ言が理解できぬと、つまらんぞ？」

じゃあ、この2点で十分かな。
チャックを閉じようとするタイミングで、カグヤが小物を放ってきた。

「ほら、リュウジ！」

「おわつと！ん、コレは指輪か！もしかしてプロポーズ？」

「はいはい笑った笑った。リュウジの世界で魔法が使えるか解んないけどさ？アタシからのお土産も持ってつてよ」

地球ではサイズ合わせが出来ないだろうから、この場で号数を合わせてリュックに入れる。

コレでお土産は3つ。

「……ところでイスルギ？」

「なんだ？」

「イスルギは何もくれないますか？」

「うーむ。まあ、形あるものはいずれ壊れる。俺がお前に贈った物は、お前の心の中にある、この世界での思い出ってやつだな」

大きく頷くイスルギ。その横でカグヤが笑う。

「イスルギ、『いま俺カッコいい事言った』って思ってるでしょ」
「惚れ直しただろ？」

イスルギも笑って、続ける。

「ソコのカプセルに入ったら、俺がお前と旅した理由を教えてやるよ。アリス、その中でも会話は出来るんだろ？」

「外から中への呼びかけは可能だけど、逆は無理なんだ」

ソレを聞いたイスルギが更に嗤う。

「くくつ……いいね。互いに余計な事を詮索出来ないってのが最高じゃねえか」

「イスルギ、目が輝いてますよ。なんか嫌な予感がしてきた」

苦笑しながらカプセルに入る。

そして、イスルギたちに向き直った。

「イスルギが何企んでるのは知りませんが、ココまで送ってくれて、ありがとうございます。カグヤも、俺の命を救ってくれた事、感謝してるよ」

「アタシもリユウジの事忘れないよ。元の世界でも頑張りなよ？」

「リユウジ。お前に会えて良かった。本当にだ」

「イスルギが何でソコまで言ってるのか解りませんよ」

イスルギはただ笑うのみ。

俺は管制に目をやる。彼女と視線が合ったので、頷く。

「お別れはお終い？　じゃ、閉じるよ」

シュツと音がして蓋が閉まると、低い音と共に転移装置が起動。ソレを確認したイスルギが、アリスに質問した。

「じゃあ、始める前に1ついいか？」

「プロセスが動き始めてからは私も忙しくなるから、先に終わらせちゃってもらえる？」

「解った。カグヤ、刀をバラすの手伝ってくれ」

そう言って直刀を抜く。

カグヤが文句を言いながらも手早く持ち手部分と刀身を分ける。刀身を持ったイスルギは俺に、刀の銘を見せてくれた。

「がんさく　こてつ。」

ちよ、マジ平仮名で書いてある、しかも読点付きで。しかも自分から贗作ってマジか。せめて漢字で

「やっぱり読めるか」

何でこの世界に日本語があるんだ。

「イスルギ！　ソレは一体何ですか！？」

「……改めて見ると、リュウジは口の動きが全く違うんだな。どうやって翻訳出来てるんだその首輪？」

クソツ！ 聞こえてないのか。

『リーゼ！ アリス！ とうにか出来ないのか！？』
「何じゃリュウジ、よく解らんが無駄に騒ぐでない」

おいおい話が動き始めたらこの仕打ちかよ。

全ては俺の手の外で動く決まりでもあんのかよ。

ため息と共に天を仰ぐ俺は、イスルギがカプセルを叩く音で再び前を見る。

イスルギが銘の反対側に書いてある文字を見せていた。
日本語と現地語で同じ意味の事が書いてある。

魔力無き者を塔へ導け

もうどうでもいいやコレ。よく解らない事が解ったから。

イスルギが、現地語と日本語の意味が同様であるか聞いてきたので、頷いてやる。

「そうか。言語すら異なる俺の知らない誰かの願いは、しっかりと叶えられたみたいだな」

満足そうに笑うイスルギ。

誰か俺の事も納得させてくれよ……

「な？ お前に会えて良かっただろ？」

笑顔のまま下がるイスルギが、管制アリスに手を振る。
ソレを見たアリスは、俺に告げた。

「じゃ、そろそろ始めようか」

ま、後は元の世界でゆっくり考えればいい。

俺が管制に手を振ると、転移装置から響く低いモーター音が、少しだけ大きくなった。

閑話 デウスエクスマキナの視点より（前書き）

主人公の知らない話。

閑話 デウスエクスマキナの視点より

とある見晴らしの良い、豪華な部屋。

奥にある巨大な机には、1人の青年が座っている。

部屋の主としてはあまりにも若すぎるが、ソレを補わんと身にまとって重々しい服装こそ、逆に彼の滑稽さを強調するようでもあった。だが、かつては彼も必死であったのだ。

肥大しすぎた組織が、彼唯1人に盲従しているが故に。

そして彼は今、待ち遠しくてたまらないと言った表情で扉を見つめている。

と、扉の向こうから声がかかった。

「会長、騎士団長がいらつしやいました」

「うむ、通せ」

彼の声が終わる事すら待たずに扉が開き、純白のサーコートを纏った男が入ってきた。

大柄なその男は、2本の剣を持っている。

背中に差した両手剣と、剣の鞘に取り付けられた日本刀である。

男は、部屋の中央で立ち止まると、何の敬意をばらう事もなく青年に言った。

「久しぶりだな、マイケル」

「師匠もお変わりないようで、なによりです」

青年が重厚な椅子に身を委ねたまま返す。そして、互いに笑った。2人の間に形式などいらなと言ったのは、青年であったから。

「それで、今回はずいぶん時間がかかったようですが、何か問題でもありましたか？」

「いや、邪魔を片付けたついでに、ちょっとな。エノクの見聞を広めてやるうと思って」

「……ああ、彼は訓練所を家として育ち、『白金の天使』なんて呼ばれるようになってからは、全てをキョウカイに捧げてきましたからね……」

エノクの苦勞を知る青年は、今でこそ白金の天使と呼ばれる彼が、どれほどの苦難を乗り越えたのか、その全てを知っている。

家族を失い、政争の具とされ、幾度となく信じた相手から刃を向けられた彼の、笑顔と言う仮面の下は、すでにボロボロであった。

彼の名を世界に広めた正義の戦いにおいてすら、周囲の悪意ある後援者たちが考えたのは『いかにして自分になびかない戦力を自然に排除するか』であり、7日もあれば終わるはずの旅が半年にまでずれ込む事となる。

キョウカイの切り札となるために精神を歪ませ、肉体すらも捨て去った騎士団長の男が己の無力を嘆くほどに、勇者は苛烈な妨害を受けた。

魔王を成敗して勇者となった後、今度は誰からも恐れられるようになったエノクが、埋伏の毒としか思えぬ愚か者共を排除し終えた男と再び出会い、交わす会話の中で人間性を取り戻していく姿は、本当に嬉しいものであった。

青年は思うのだ。彼には、幸せになつて欲しかったと。

沈痛な面持ちとなった青年に対して、男はまるで興味がないと言つた口調で返す。

「へー。アイツ俺の知らないところで面白い人生送ってんだな。だから馬鹿みたいに騙されるのかな」

「えーと……ご存知なかつたのですか!？」

「過去にはそれほど興味が無いんでな。久しぶりに俺が直々に訓練してやるうってのにやる気の無えツラしてやがったんで……暇潰しに遊んでやったんだ」

青年は椅子に沈み込んで天を仰いだ。

「本当に知らなかったんですか？ 彼をまた救ってくれた事は、本当に感謝してたのに……」

「誰からも望まれなかったとは言え、せつかく生き延びたんだ。アイツには頑張ってもらわねえと、アイツを庇って1人で死んじまつた聖女様が可哀想だからよ。なんにしる感謝の気持ちは物理的な形で示せつて事だ」

「そんな無茶な……一瞬とは言え『師匠カッコいい！』って思っただけ損しましたよ」

青年は大きなため息をつき、それを見た男がククツと笑う。

「人と関わるって楽しいなあ？……で、お前は何やったんだ」

男は話題を変えた。この話はこれで終いとでも言いたげに。だが青年にとっても、今の話はさほど価値のある物ではなく、話したい事はあった。

「ええ、書類仕事に忙殺されて、碌に視察も出来ませんでしたよ」

「……でも、1度は外に出たんだろ？」

「そうですね。遺失技術研究所に、1度だけ」

「……成る程な」

男はおもむろに刀を抜き、振り下ろす。

当然ながら青年に届く距離ではないが、熱したバターナイフの如

く、と言った感じで壁に柵に線が生える。しかし青年は手を横に出し、鉄を切り裂く不可視の刃をそっと握り止めた。

男は感嘆の表情を見せるが、その腕は刀を動かそうと力が込められ、震えている。

「いきなり強くなったもんだ。何やったんだ？」

「南西の都市国家群と押し付けあっている森で、亜人を捕獲しましてね。つい先日研究所に搬送されたあれを、見に行っただんですよ」

青年の手から力が抜けると、男は黙って刀を納めた。

それをみた青年が肩をはだけると、そこには大きな傷跡があった。

「すっかり嘔まれてしまいましたね？ 命に別状はなかったのですが……何か半分混ざったようでした」

青年は困ったような表情で笑う。

「色々やってみたい事が出てきたんですよ」

「ほう……例えば？」

青年は笑みの形をを愉悦へと変え、大きく手を広げると、歌うように告げる。

「全ての生命を消し去ってみたい。陽光すらも失われた、どこまでも続く暗い暗い砂の大地を、どこまでも歩いてゆきたい」

「それはまた……魅力的な願望だな。だが、願いが叶った後はどうするつもりだ？」

「師匠、ちゃんと聞いてましたか？ 最後は私も消えるに決まってるじゃないですか」

男も笑う。どんな顔をすれば良いか、解らずに。

「成る程な。だが、なぜそんな事を俺に？」

「私の半分はこの考えに異を唱えておりまして。なら、全てを知った妨害者を作ろうと思っただんですよね」

「……それが、俺か」

「そうです。師匠ならこのゲームを面白く演出してくれると思います」

青年は期待を込めた表情で男を見やる。

対して男は、少しばかり考える。部屋をゆっくりと廻りながら、提案を出す。

「俺とお前じゃ出来ることに差がありすぎる……カードが欲しいな」

「確かに、そうですね……なら私の作戦を、全て明かしましょう」

「そいつは助かる」

「作戦は簡単です。世界から魔法をなくせば、今や魔力なしでは生きる事の叶わない全ての有機物は、等しく塵に還るでしょう」

「大胆な考えだな。だが、その方法は？」

男の問いに青年は破顔して答える。

その表情に、昔から彼がこう言った種明かしの状況を心から楽しんでいた事を、男は思い出す。そんな性格は、消えずに残っているらしい。

「私の半分が教えてくれました。全ての魔力は我々が『塔』と呼ぶものを源とするのです。つまり全ての塔を破壊すれば、世界は緩やかに魔力を失い、緩慢な死を迎えるのです」

「……今までは魔力を全面的に利用してきたんだ。急な方針転換に市民が従うか？」

青年は一瞬驚いた顔になり、その後机に突っ伏す。

「師匠……ちゃんと考えてから発言してくださいよう。魔力と塔の正しい関係を知っている人間は、私と貴方だけなんです。私がそこに關して嘘をつけば、誰がそれを否定するって言うんです？」

「あー、俺が言ったところで、たしかになあ」

男は頭に手をやりながら考える。どうひっくり返した物か。

「キョウカイ内の思想を歪めるのは、2年もあれば十分でしょう。じっくり100年もかければ、全世界を間違った方向に導くのは難しい事ではないと、私は見積もっています……そうそう、私の寿命も200年ぐらいは延びてますから」

「………塔をフル活用している都市国家群の切り札にはどう対処する？」

「最強を名乗る藍のお嬢様には、共に暮らす住民と言う致命的な枷があります。塔が人間の魔力を奪い亜人に供給していると世界が信じれば、守るべきものに否定されて彼女は自滅します」

「………なら、ならどうやって塔を攻める？俺とエノクと魔眼娘が組んでも、塔に侵入する事すらも出来ないんだぞ？」

「それはいい質問ですね、師匠。そこについては絡め技を考えておりました……かつてラグナロクにおいて崩壊した塔の中に、1つだけちよつと変わった壊れ方をした物があるんですよ」

青年は、この質問を待っていたとばかりに身を乗り出す。

「ここの研究所の最奥に、人としか思えない外装の機械人形が転がっています。それが、塔と運命を共にしなかった唯一の『全権管理理者』なんです！」

「……………全権？」

「そう！ 全ての権利を持つ物！ 自分の管理塔を失ったためか、殆どの記憶を失っていますが、その権限は残っています。解りやすく言うと彼女の中身を持ち歩けば、全ての塔はフリーパスになるんですよ。現存する塔の管理者は抵抗するでしょうが、侵入さえ出来れば破壊は容易い事でしょう？」

青年は満足げな顔で椅子に座りなおすと、大きく息を吐いた。

「これが、私の計画ですが……………まだ質問はありますか？」

「俺はこの壮大な計画を、どうやって止めればいいんだ？」

再び突っ伏す青年。

「師匠おう……………そこは自分で考えるとここでしょ？」

「ばかやろう、俺は考えるのが面倒なんだよ。お前の遊びに付き合っただから、お前がルールを決めるのが当然だろうが」

「はあ……………世界の命運をつてシーンでそれはあんまりですよ」

「解ったから勝敗の決め方を考える。うだうだやってつと遊んでやらんぞ？」

青年はやる気のない姿勢のまま少し考えると、ルールを提案した。

「じゃあ、私が世界を変えたらこちらの勝ち。私が指導力を失ったら師匠の勝ち。これでどうです？」

「OK、なら簡単だ。剣士たる俺が出来る事は1つしかねえだろ」

男は嗤^{わら}つ。

彼を深く理解する青年もまた、笑った。

「さつすが師匠、常軌を逸した人間は期待通りに面白い事をやる！」
「言ってる、お前ももうアウトじゃねえか。自動人形はもらってく
ぜ？」

「壊しちや駄目ですよ」

男は黙って頷くと、両手剣を抜き、青年に投げつけた。

剣が真っ直ぐ青年の胸を貫くと、彼は椅子ごとひっくり返り、破
壊音が盛大に響き渡る。

慌てて中に入った使用人が見た光景は、壊れた窓から逃げようと
する騎士団長と、主のいるべき場所にそそり立つ、騎士団最高峰を
証明する聖剣であった。

「イ、イスルギ様!？」

今の会話を知らぬ者からすれば、ありえない光景である。

騎士団長と呼ばれる地位の人間は、絶対にこの様な事をするはず
がないのだ。

主従などと言う小さな理由ではない。男は世界を敵に回しても青
年に盲従する思想改造と、その状況下で主を守るための肉體改造を
受け『主にだけは絶対に反逆しない』ようになっていたのだ。

親の代より2人は親交を深めており、その意味でもありえない事
態である。

青年は心を痛めていたが、男は彼に全てを捧げる事をためらいな
く受け入れたのだから。

「後は任せませ？ またな！」

騎士団長は窓の向こうに消え、パニックになった使用人に、剣の
横に立ち上がった青年の姿が映る。

「か、かか……こ、これは？」
「師匠も派手にやってくれるよ。でも『またな』って……ん？ ああ、お前はまだ何もせずについて良い……いや、新しい団長を作らねばならぬか」

かつて世界復元協会として発足し、今ではその目的を忘れたキョウカイと呼ばれる組織、その会長。世界全土の1割を軽く超える、巨大な領土を欲しいままにする青年は、落ち着いた声で指示を出し、速やかに騒ぎを鎮める。

その的確な対応を持ってしても、騎士団長乱心の噂をせき止める事は出来なかったが、その際に青年の服が、致命傷を受けたとは思えない破れ方をしていた事は、誰の噂にものぼる事はなかった。

最低の真実と、機械仕掛けの神の苦勞（前書き）

TS
ネタバレ注意

最低の真実と、機械仕掛けの神の苦勞

管制アリスは転送装置を起動させながらリリースに言う。

「最終防衛線はライゼランね。後は頼むよ」

何言い出してんだ？ 俺を転送するのに防衛線って。

「うむ、任せい。ますたーは既に機器へのシールド展開を終えておる。お前さんも含めてじゃ」

「そっか。じゃ、私は本体制御に専念させてもらっよ」

管制は1つ頷いてコンソールに身体を預けると、そのまま動かなくなつた。

ソレを確認した防衛アリスがカグヤを見る。

「に……カグヤさんは戦術データリンクとか対応してる？」

「え？ ちよっ……なあっ！ 頭に、なんか、されてるんだけど！」

顔を歪めて膝をつくカグヤ。

「うん、いけるみたいね。レーダーは武器に合わせてレンジ1万キロで設定しようか」

1人で納得した防衛の足元から、バスターキャノンとでも言うべきであるう巨大な銃器がせり出してくる。ソレも2丁。

防衛が二の腕のハードポイントへ砲を接続する間に、立ち上げられずにいるカグヤの前にも同型の砲が現れる。

何コレ何コレ！ 俺が帰ってから旧文明の遺産でSF編とか開始

しちゃうの？

「ちょっと待って、一体何が始まるの……」

頭を抱えながらカグヤが説明を求めろ。

どうやら彼女は、俺と同じく状況が理解できないようだ。

そんなカグヤに、楽しそうに笑うイスルギが声をかける。

「こんな場所で護衛対象と新兵器の支給だぜ？ 敵が来るに決まっ
てんじゃないか」

「そんな……でも壁を壊して外から入る事は出来ないし、出入り口
には大量の機械人形が居るんでしょ？ こんな場所に何が来るって
言うの？」

そつだ。2万階建ての塔の最上階に招かれざる客が侵入するなん
て不可能だ。

「それがね、リュウジ君を戻す際に天井を開けなくちゃいけないの
よ」

「誰が気付くつてのさ？ 気付いてもたつた数分じゃこの高度まで
は上がれない筈だよ！」

「でも、不可能を可能にする者達の存在をカグヤは知っているし、
リーダーに見えてすら、いるんじゃない？」

カグヤが頭から手を離し、真っ直ぐに防衛を見つめる。

心当たりがあるのか。俺は完全に置いてかれたっぽいぞ。

「まさか、この大量の反応は……」

「そつ、白金の天使と直属の飛行部隊は、既に私たちを超える高度
にまで到達している」

「マズイ、聞きたい事が山盛りなのに、こつちに気付いてもらえない……」

カプセルの蓋を叩いて注意を喚起する。誰か俺にも解説を。なんとかりーゼを呼ぶ事に成功。意思の疎通を試みる。

「どうしたリュウジ、解らん事だらけか？　おいカグヤ」「んー？」

……この状況で話をぶつた切るとか、ありがたくはあるけど、りーゼは空気読む気ゼロだな。

カグヤはりーゼに話を聞くと、肩をすくませて笑いながら説明してくれた。

「えつとね、アタシの記憶が無いのは聞いたよね？　今のアタシに残ってる最初の記憶は、キョウカイの研究所からイスルギが救い出してくれるところから始まるんだ」

人体実験でもされていたのだろうか。ソレによつて魔道のエキスパートになったのかもしれない。

「だからキョウカイはアタシを取り戻そうとしているし、その追っ手の中には勇者様もいるんだよ。でも、アタシはイスルギと勇者様のどつちが正しいのか判らないし、勇者様もアタシがキョウカイに戻ればどうなるか聞かされてないから、アタシの不安に気付いて、わざと追跡を失敗し続けてくれてるんだ」

勇者様いい人だな。なんて考える俺を見ることはせずに、カグヤの顔は不安で埋め尽くされていく。

「でも、流石にもうタイムオーバーって事なのかな……」

「いや、そう言う訳ではない」

「イスルギ？」

「キヨウカイは塔を破壊したいんだ。最近になって『塔が世界を蝕む邪悪である』とか言い始めただろ？ 邪悪と接触した重要人物であるお前を、これ以上放置出来なくなっただ」

「……そうだったんだ」

かぐや、自分が重要人物であるってところにつっこんでくれないかな。

……残念ながら彼女は気付かずに、防衛が話を進める。

「それに貴方達を監視していた彼らの衛星は、天井のロックが解除されてるのを確認しているはずよ。ここから侵入できれば一気に全ての施設が制圧できるから、チャンスは逃さないはず」

「まあ、そこまで解ってるのに他の部隊が準備出来ない辺り、俺がカグヤを助けるついでにやった破壊工作ごときで、未だに指揮系統の乱れが出ちまってるみたいだけだな」

「頭数だけが揃っても犠牲者が増えるだけ。むしろ喜ぶべきね。こんなところでOK？」

はい、OKです。

俺が頷くのを見た防衛は作戦を説明する。

「じゃあカグヤは私と一緒に雑魚の排除。イスルギは乗り込んでくるはずの勇者様を排除してくれる？ そうしないと天井が閉められないから」

「解った」「了解」

2人の返事を確認すると、天井が開くのはほぼ同時だった。

花の蕾が開くように、円を描いて空が現れる。

「周辺は気圧の制御で安全だけど、あんまり遠くに行くとも生命維持に支障が出るから気をつけて」

「俺は空飛んだりしねえよ」

「アタシは寝ながらも制御できるから大丈夫。それよりこの銃、コピィーしていい？」

「好きにしちゃっていいよ」

防衛の許可を得たカグヤはバスターキャノンを正面に浮かせると、両手をかざした。

重ねられた手をゆっくりと左右に滑らせると、虚空より全く同じキャノンが次々と出現、彼女の前に計11本のキャノンが並ぶ。

手がおりと、彼女の身長よりでかいキャノンがその背中に整列した。翼のように。

「じゃイスルギ、アタシは露払いを済ませたらエレベーターで昇り直すから、勇者様はお願いね」

「任せろ」

イスルギの返事を聞くと、カグヤは鉄の翼を引きつれ塔の足場を蹴り、見えなくなった。

いつの間にかバックパック背負っていた防衛も、バーニアを吹かしてソレに続く。

視界から消える速度を見るに、俺とやりあつた時はかなり手加減していたらしい。

これでこの場にはイスルギとリーゼ、俺、管制。

管制アリスは意識を手放しているから、実質3人か。

はるか彼方での閃光と爆発を眺めながら、しばらくの間無言が続く。

ソレを破ったのはイスルギの声だった。

「お、来た来た」

その視線の先に現れた、緩やかに羽ばたく輝きは、光の羽をまき散らす天使のように見える。

光は大きく上空を一回りすると、イスルギの前に降り立った。

光が消えて尚輝く鎧を身にまとう金髪の少年は、美しい装飾の剣を持ったままで挨拶をした。

動作こそ優雅であるが、その表情はとても硬い。

「お久しぶりです、団長」

「いよつ。いきなり切りかかってくるかと思ったんだがな」

イスルギが刀を鞘から抜いた。

リーゼ！ リーゼ！……あ、流石にこの会話をぶった切るのは無理ですか。

「団長、一体何をしようとしてされているのですか？」

「マイケルから聞いてるだろ」

「僕は貴方から直接聞きたいのです」

俺の位置からはイスルギの表情は見えない。

だが、予測はつく。

「なに、祖国を崩壊させようと思ってな」

きつとイスルギは、人をくつたような笑みを浮かべているんだ。

「なぜです!?!」

「ちよつとしたゲームさ。ルールは単純、キョウカイが指揮系統を失えば俺の勝ち、失敗すればマイケルの勝ち……だったんだが」

「なんなのですか!？ ゲームって一体どう言う事です!？」

「塔に関する部分で、両者の均衡を大きく崩す要素があつてな? 少し俺が譲歩してやつてるんだ。あいつも知識先行型だから、重要なところが抜けてんだよな」

「……待ってください!!!!!!」

白金の天使が叫んだ。その顔は、あまりにも悲壮だ。

「僕にはまだ団長が何を考えているのか理解できません。お願いですから理由を教えてください、団長。貴方は理由も無くこんな事をする人ではありません。それは貴方に助けていただいた僕が、一番よく知っています。僕が仲介しますから、もう1度会長と話し合ってみましょうよ? 誰もこんな無意味な争いは、望まないはずですから」

自分達が襲撃者であるのに、まるで命乞いをするような表情で語る天使。

恐らく彼は、イスルギを心の拠り所に行っているのだろう。

「貴方だつてこんな事終わりにしたいはずですが、キョウカイが秩序を失えば諸国が牙を剥くでしょう、そうなれば団長が今まで守つてきた人々が平和な日常を失うんです、貴方の大切な人にだつて危険が迫るかもしれない。僕が全力で貴方を守りますから、だから!……だから、お願いします、帰ってきてください……」

「まあ、そんな事はどうでもいいんだが」

イスルギ……その返しは非道すぎる。

「今、俺の部隊は、どうなってるんだ？」

天使が息を飲む。

団長つて言ってたんだから、イスルギはキョウカイの偉い人だったんだろう。

状況から見るにイスルギが裏切ったのだろうし、その指揮下の部隊は

「犯人は、見つかったか？」

犯人？

「それは、まだ……」

「だろうな。せつかく国境付近でうるついてんに、追っ手が来ねえんだもんね」

「……団長？」

ああ、まさか、コレは……

「あいつらは、俺が、殺した」

「団長？ 一体何を」

「理由は、このゲームにおいて、目障りな駒だから」

イスルギはゆっくりと、相手が聞き間違える事のないように告げる。

『リーゼ、リーゼ』

「いやだから、あの会話に割り込むのは……」

思い切り蓋を殴りつける。

「こらリュウジ、ますたーがシールドを展開しておらんかったら割れておったぞ」

『そうじゃねえだろ！！ 違えよ！！』

俺の叫びは誰に届く事もなく、イスルギと白金の天使は会話を進める。

「今となつては悪かったと思う。でも、まさか俺がこんなに有利だとは思わなくてよ」

「何を、言っておられるのです？」

「大体お前は他人を安易に信用しすぎなんだよ、魔王を倒した時だつてそうだった。作戦も立てずにたつたの4人で強行突破したあげく、魔王を瞬殺出来る俺と、俺とガチでやりあえる魔眼娘が雑魚掃除のために離脱するんだぜ？」

イスルギは見せ付けるように刀を振り上げ、更に語る。

対する天使は、顔をうつむかせており、その表情は判らない。

「落ち着いて思い返せば解らないか？ あそこで2人も離脱する必要はなかっただろ？ 聖女様はお前に全てを委ねていたし、魔眼娘は常識皆無の自称一般人だから仕方ないとしても、お前は……」

「貴方は、僕を……」

「騙されてるつて、気付くべきだった。魔王とお前らを相打ちに持ち込むのが、俺の目的だつて、な」

イスルギが刀を振り下ろす。届く距離ではないが、刀身の先には見えない攻撃判定が存在しているのだろう。

白金の天使は視線を上げもせず防御結界を展開、2人の魔力の衝突が、腹に響くような鈍い音と共に火花となって散る。

鉄と鉄がこすれ合う嫌な悲鳴を響かせながら、イスルギがジリジリと刀を結界に押し込む。

「今回もお前は、自分を守るだけで精一杯か？ 初恋の相手がこんなじゃ、お前のために命はった聖女様も、浮かばれねえな」

天使はもう何も言えなかったのだろう。

よって、感情を行動で示した。

光をまとい、イスルギに切りかかる。

イスルギはそれを不可視の刀身で吹き飛ばすが、天使は強力な結界と飛行魔法で強引に接近、その場から1歩も動かないイスルギを中心に、2人は1つの光の塊となり、周囲に重い金属音が響く。

恐らく、斬り合っているのだ。あの、衝突実験のような音の嵐の中で。

カプセルの蓋1枚隔てた向こう側は、暴風と殺意が吹き荒れる死の世界となっていた。

「エノクさんも、難儀な性格してますねえ……今の強引な流れなら疑問を持つかなって期待したんですけど」

いつの間にか、リーゼと“代わった”ライゼランが立っていた。地獄の中心から撒き散らされる破壊力の余波を、防御もせずを受けている。

それでありながら、彼女の小さな身体は傷1つ負う事なく、俺を笑顔で見上げてきた。

「あ、エノクさんと言うのは、勇者様の事ですからね？」

『ライゼラン？ コレは一体なんですか！』

「イスルギさんは友達からゲームを持ちかけられて、そのお友達を
楽しませようと全力を挙げているんですよ」

「いや、そうだ、そんな事はどうでもいいんだ、あの2人を止めて
ください！ 貴方なら出来るでしょう？」

「イスルギさんと先約がありまして、手出しは無用って言われてる
んです」

「意味が解らない!!」

「エノクさんからイスルギさんに対する依存を見ましたか？ 自分
の全てを捨ててもイスルギさんを助けようとしたでしょ、彼なりの
やり方で。まあそれ以上に大切な思い出を傷つけられて暴走しちゃ
いましたけど。イスルギさんとお友達の間にも、似たような狂気が
あるんですよ」

「ライゼラン……」

「お友達は世界を滅ぼすつもりみたいですけど、私達が彼にとつて
致命的なイレギュラーだと言う事を、未だに気付いていないんです
よね」

だいぶ、落ち着いてきたと、思う。

彼女は傍観を決め込むつもりだ。俺に出来る事は、ない。

だが、状況は理解したい。

光と音の狂乱の中で、何を聞けるか考える。

「世界を滅ぼすとか、どう言う事です？」

「イスルギさんは、お友達にゲームを持ちかけられたんです。世界
を滅ぼそうとするお友達に対して、イスルギさんの目的は彼を阻止
する事。世界を守るために、イスルギさんは祖国を滅ぼそうって考
えたんですね。ゲームですから面白おかしく」

肩をすくめる女児なお嬢様。

「でも、お友達は世界や私達が塔に依存していると思っていて、塔を破壊する事で世界を滅ぼそうとしているんですけど、既に私はスタンドアローンですから塔には依存していませんし、イスルギさんには秘密にしているんですけど、私1人で塔の代わりに世界を維持する事も出来ちゃうから、この計画じゃ世界は滅びないんです。で、今コレ」

彼女は後ろの地獄絵図を指す。振り向きもせずに。
俺は頭を抱えた。

『……みんな馬鹿ですか』

「それは貴方が正常な思考を持って、なおかつ神の視点から状況を把握しているだけです。カグヤだって言ってたでしょ？」 『イスルギはネジが全部抜けてる』 って。イスルギさんってお友達の全てを肯定するように、精神を改造されちゃってるんですよ。この喜劇は、気のふれた権力者が従順すぎる部下を持った事による暴走、とでも言ったところですね」

『喜劇って……』

「最終的にはイスルギさんに勝ってもらおう予定ですが、この展開の後でエノクさんとどう仲直りさせるかが新たな問題ですね」

お嬢様は、真面目な顔で恐ろしい事を言っている。

後ろのアレが、ただのケンカだったのか？

『うわー、うわー……なら、せめて犠牲者が少ないうちに終わらせてたほうが』

「そのつもりなんですけど、私は抑止力ですから能動的に動くと世界がヤバイんです。でもイスルギさんって精神改造の影響でエキセントリックだから影からのサポートが難しくって。せっかく私がスタンドアローンだって教えたら、難易度調整のために狂言で勇者を敵

に回すとか言い出すんですよ？ カグヤさんまで向こうに返そうとしたのを必死で止めたんですから！ そんな人に『そもそもお友達の計画が成り立ちません』なんて教えたら何をやらかすか……しかも彼は自分の部隊を手にかかけちゃってるんですよ？ もう、どうすればいいの！？」

『俺に聞かないでくださいよ』

剣がぶつかっているとは思えない重い金属音と、殺意の嵐が吹き荒れる中で、涙目のお嬢様が俺に助けを求めるが、俺にそんな解るはずもない。

……神の視点も大変だな。

と、カプセル内に、光があふれ出す。

「まあそんな訳でして、そろそろ転移装置が作動しますが、龍二郎さんは安心して元の場所に戻ってください。この後カグヤの記憶を戻せばこちらがかなり有利になりますし、死者を復活させてでもハッピーエンドに持ち込みますから！」

場にそぐわない笑顔になったライゼランが、俺に手を振る。

そう言えば本名で呼ばれたのって、久しぶりだな。

『なんでアンタが俺の名前知ってたんだ！！ つーかなんで会話出てんの！？』

今までツツコミを入れなかったとは、不覚！

「いやーもしかしてスルーされたのかって不安でしたよ」

『そんな事いいから』

「難しい事じゃありませんよ。私日本人ですから」

『笑いどころが解らないです』

「……………ああ——————！！！！！！！！！！」
「っ！！ 渡会さん！！」

息を吐ききった俺は、視界にある物を徐々に認識し始める。

「渡会さん？ 大丈夫ですか？ 渡会さん？」

「こ、ココは？」

「病院です。渡会さん、1ヶ月もの間意識のない状態だったんですよ」

「え……………ふえ？」

目の前の看護婦さんを見てから、ゆっくりと周囲を見渡す。
俺は……………帰ってきたのか？

「ココは、何市ですか？」

「変な聞きかたしますね、足立区の」

知らない病院だ。でも、都内だって事は解る。
足立区には、親戚の伯父さんが住んでいるから。

「今、親族の方に連絡を取りますから、ゆっくり休んでください」

看護婦さんはそう言って部屋を出て行く。

ソレを見送った俺は、ベッドから降りると、窓に向かう。
窓の外には、当たり前前の景色が広がっている。

世はおしなべて事も無し。

俺は1つ、大きなため息をついていた。

「非道い、夢だった」

生死を賭けた男の戦いがただの茶番とか、ストーリーを根本から考え直すべきだ。

大体、俺の視点で話が進むのに、俺はほとんどその場に立ち会っていないだけだったじゃないか。

あれじゃ俺は、刺身のツマ、ただの添え物だ。

あげくあのオチはありえない。シリアスが吹っ飛んだ。

ふと思いついて夢と同じ魔法の仕草を試みるが、虚空には炎も氷も現れない。

「まあ、出たら出たで困るけどな」

誰にともなく呟いた俺は、もう1つだけ、大きなため息を吐くと、ベッドの手すりを持ち、クルリと1回転してベッドに転がった。

最低の真実と、機械仕掛けの神の苦勞（後書き）

どんがらがっしゅん

閑話 その力は、選ばれた者に対して、等しく与えられた

ある朝、目が覚めると、身体能力がすごい事になっていた。

お腹周りの余計なお肉が綺麗になくなって、ジャンプしても膝が痛くないどころかバク宙も簡単に出来る。

自分の新しい身体を堪能していると、お父さんが『部屋で暴れるな！』と怒鳴ってきたので、思い切りぶん殴って家を出た。

流石に悪い事をしたと思ったので、何か手土産をもって謝りにいこうと思っただが、サイフを持っていない事に気付いた。

更に言えば、部屋で決めポーズを考えながら怪奇マスクを装着していたので、僕はムンクの叫びみたいな表情の、白いマスクを付けたまま外を歩いていた訳だ。

周囲には誰も居なかったけど、今更ながらに恥ずかしくなったので手近のビルの屋上に駆け上がって退避、下界を見下ろしながら、この先どうしたものやら考える。

こんな事になったのも、世界が滅びる前兆とかなんだらうか。

そう、最近また世界の終末が近いと叫ぶ人たちが増えている。

何でも世界中が口裏合わせて秘密にしているだけで、異文明の物としか思えない何かが地球に向かってきてきている最中だとか。

各地の天文台はそんな物見えないって言ってるし、それ以外の人も見えないって言ってるけど、国家機関が見えないって言うてるのは国からの圧力で、素人が言ってるのは望遠鏡の性能が悪いだけだそう。

もちろん僕はそんな馬鹿な話信じていなかった。ちゃんと理由もあった。

だって、この世界の主人公である僕がまだ眠れる才能に目覚めて

いなかったし、活躍もしていないじゃないか。

逆に言えば、選ばれた存在である僕が真の力を覚醒させたと言う事は、僕の活躍の舞台が今から作られると言う事に他ならないだろう。

学校にも通わずに3年間ネットで勉強した甲斐があったってものだ。

正直、もうすぐ中学生になるから諦めたほうがいいのかとすら考える事もあった。

だが、僕は主人公として覚醒をとげた。

僕の偉大さを理解しなかった同級生の奴らの悔しがる顔が、目に浮かぶつてもものだ。

まあそんな些細な事は置いて。

主人公が目覚めたのであれば、世界は本当に崩壊の危機に陥るのかもしれない。

ビルの外壁を駆け上がって屋上に到達できるこの体は、どう考えても『荒廃した世界で無双』するためのものだとしか思えないからだ。

……いや、気付いていないだけで、僕の知性はもう神の領域に到達しているのかもしれない。

だとすれば、僕は心・技・体の全てを兼ね備えた存在である訳か……なんと言う事だろう、まさか自分が現人神になつてしまうなんて、想定していなかった。

ちょっと神にふさわしいキャラ造りとかもしようかな？

自分の事を“僕”じゃなくて“我”って言ったりするとカッコいいかも！

まあそんな事は後々考えるとして。

いつになるかは判らないが、きっと世界は崩壊する。

僕の活躍の場を作るためだから、まあ仕方ない事だ。
……それであるならば。

多少の悪事もいずれリセットされるのだから、万引きとかしまくってOKか！

うん！　じゃあ朝御飯を食べ損ねた事だし、コンビニに寄ってお弁当を強奪しよう！

お母さんのお昼御飯の分まで持って帰れば、喜んでもらえるかもしれない！

善は急げって言うし、早速コンビニに行こう！

僕の知っているコンビニはもう潰れてしまっていたから、町を走り回る事になった。

あげく漸く見つけたコンビニには人がたくさん居て、とてもじゃないが入れそうになかった。

立ち読みをしている人間だけで2人も居たし、出入り口で煙草を吸ってる奴まで居た。どう考えても無理だ。

なんであいつら立ち読みなんてしてやがるんだ！　僕が1年ぶりに外に出たからって馬鹿にしてるとしか思えない！

でも手ぶらで帰るのも楽しくないし……

近くにあった開店前のスーパーのガラソとした駐車場で、打開策を考える。

そうだ！　まだ開店していないこのスーパーのお弁当を奪えばいいんだ！

さっそくお店の入り口に向かったが、自動ドアには鍵がかかって

いた。

裏口から入るとお店の人に出会っちゃうかもしれないし……仕方ないから、ドアの1枚くらい割っちゃってもいいよね？

僕はドアをパンチで砕いて侵入すると、けたたましく鳴り響く警報の中をお弁当コーナーにダッシュ、警報に慌てる店員さんの隙を突いて3人分の食料をもらう。

店員さんはみんな僕の壊したドアの側に集まっていたから、今度は裏口から、誰にも気付かれる事なくスーパーを脱出した。

……お弁当を抱えて走りながら振り返るが、誰も追ってきてはいないようだった。

予想以上に簡単だった。これなら慌てて動く事もなかったかもしれない。

きつと僕には主人公補正があるから、ゆっくりしても見つからないで逃げられたかな？ お弁当をちゃんと選べなかったのは失敗だった。

でも自分に出来る事が色々解ったし、1度家に帰って休憩しよう。

家の入り口にはパトカーが停まっていた。近所の人たちも集まって何かしている。

何があっただらう……泥棒でも入ったのかな？

あんなに他の人がいっぱい居たら、怖くて家に入れないよ……マスクをかぶったままだから、目立つ動きも出来ない。

仕方ないから屋根伝いに近寄って、何があっただのか情報収集をする事にしよう。

家には戻らないまま、1日がすぎた。

漸く落ち着いてきた僕は、この先どうすればいいか悩んでいた。

まさか、僕のとっさの一撃でお父さんが死んでいたなんて。

……まあ僕を叱ってばかりだったから、天罰だよな。

お母さんは『変な子供がパパと僕を殺して逃げた』と言ってるよ
うで、警察も僕の事は行方不明として扱っているらしい。

でも、いずれ僕がやった事はバレてしまっただろうから、そうなっ
た場合に主人公がどうなるのか、想像がつかない。

親を間違つて殺してしまった悲しみを胸にダークヒーロー？

お父さんの死因に疑問を持った政府の裏の組織が接触してくる？

……違う、どっちもありえない。

1人でダークヒーローなんて無理だし、影の組織じゃ僕が有名に
なれないじゃないか。

今までに読んだラノベを思い出すんだ。きつと解決法が………
あった。

前に家の外に出たときに間違つて買った古本の中に、似た
ような話があった。

ライトノベルじゃないけど、モノクロのオジサンが煙草を吸いな
がら銃を掲げる渋い表紙で、本の帯に“圧倒的ノワール！”って書
いてあったから、ノワールってどんな意味だろうって思って買った
本だった。

後先考えずに好き放題する主人公が、友達や偶然出合ったナンパ

相手を次々に死の淵に追いやりながら、暴力警官の手をすり抜けて逃げ回るお話で、最後には主人公を目的の仇にする刑事さんがギャングの家のドーベルマンに食い殺され、主人公はそのギャングと『何となく気に入らない』って理由で殺しあって半死半生で生き延びる……って話だった。

僕はこの主人公がどんな結末を迎えるのかってドキドキしながら読んで、エピソードを読み終わると同時にその本を投げ捨てた。

本当に圧倒的に意味が解らない本だったけど、あの主人公になら、簡単になれる。

あの主人公が生き延びるなら、僕が死ぬはずがないじゃないか。この世界には、僕の気に入らないものだらけじゃないか。

大暴投の果てに何が待つのかを試してみるのも、なかなか面白そうじゃないか。

今僕は、自分の生まれてきた意味を理解した。

うん！　じゃあ暴走を開始する前に今後のキャラ設定を考えて、それが済んだら僕を馬鹿にした奴らに復讐に行こう！　全部終わったら東京に行けば、きつとライバルとか謎の組織とかが出てきてストーリーが目茶苦茶になっていくに違いない！

時間はたっぷりあるんだ……ああ、何だか楽しくなってきた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1984t/>

英雄譚のツマ

2011年8月28日21時07分発行